池田会長全集十巻　下

「経王殿御返事」講義

文永十年八月　五十二歳御作

四条頼基並妻に与う

（御書全集一一二四ページ～一一二五ページ）

（編年体御書　五六九ページ～五七〇ページ）

題号の、経王殿という方は、日蓮大聖人の門下のなかでも有名な四条金吾のお子さんのことです。四条金吾という方は、ひじょうに強信で、大聖人にたいそうかわいがられた方です。竹を割ったような直情径行の気性をもち、主君には忠義な武士であり、武術にもすぐれ、また医術の達人でもありました。また酒の好きな方でした。

大聖人が竜口で首をはねられようとしたときも、四条金吾は、とるものもとりあえず、素足のまま、一目散に大聖人の御もとへ馳せ参じたのです。そして、大聖人のお乗りあそばされている馬の手綱にしがみついて、大聖人にもしものことがあるならば、自分も命を落とそうとの固い決心をもってお仕え申し上げたのです。

また、ひじょうに勇敢で、鎌倉中を折伏しきって歩いた闘士です。あまりにも折伏が激しく、また

同僚からやきもちをやかれて、讒言されて、ずいぶん苦しい思いをしてきております。

その折伏の結果によって、つけねらわれ殺されかけたことも再三あるのです。しかし、強信なる四条金吾は、あくまでも大聖人のおおせどおりに、指導どおりに、信、行、学に励みきっていかれた模範の方でありました。

今、私どもが一生成仏をめざして、宿命の大転換をするために、おのおのの幸福のために信心折伏に励んでいますが、どんなに折伏しようが、だれが私たちを殺そうなどという人がいますか。せいぜい新聞や雑誌に悪口を書かれるか、隣近所や親戚や友人などから悪口をいわれるぐらいなものです。しかし、大聖人御在世においては、刀をもって殺されかねないほどの戦いをしたのです。それからみるならば、今の私どもの信心のありかたは、ひじょうに楽なのです。

そういう楽な信心ができる時代に生まれあわせて、一生成仏をするという決心をしたならば、少しぐらいなことで退転していくような人は、日蓮大聖人の弟子ではないと、私は思うのです。

この御書は、その四条金吾のお子さんが、からだが悪くなったので、日蓮大聖人がわが子のごとく御心配あそばされて、四条金吾にたまわった御書なのです。ここでは、この対告衆はいちおう、経王殿として、お子さんの名前になっております。

其の後御をとづれ（音信）きかまほしく候いつるところに・わざと人ををくり給候、又何よりも重宝た

るあし山海を尋ぬるとも日蓮が身には時に当りて大切に候

大聖人が四条金吾一家のことについて、経王殿のことについて、心配しておられた。そのようすをきこうと思っておられたときに、わざわざ人を使わして、いろいろの報告をしてくれてありがとう。また、たくさんの供養を、わざわざ届けてくれてありがとう――と。

大聖人が御供養をおうけになっている御書がたくさんございますが、大聖人はぜんぶ日興上人に、その供養のお金を渡して、広宣流布のために、折伏行のために、いっさいをお使いあそばされておられるのです。

このように、お弟子方が御供養をお持ちしたときには「ひじょうに助かるよ」とおおせです。功徳をうけるのは、御供養を申し上げた信者です。大聖人がおうけとりくださるから、私どもに功徳があるのです。その原理なのです。

日蓮正宗創価学会は、あくまでも日蓮正宗の信徒の集まりです。総本山の大御本尊に、そして御法主上人に御奉公申し上げていくのが、私どもの使命であります。初代の会長牧口先生、ならびに第二代戸田先生も、奉安殿の御供養、大講堂の御供養、五重塔の修復の御供養、また本日もお寺の御供養がありましたが、何十か寺の御供養と、その他かずかずの御供養をされています。立正佼成会や、霊友会や、国柱会や、生長の家や、その他のあらゆる邪宗教は、宗教をもって企業としております。しかし、創価学会は断じてちがうのであります。

社会の人々は、私どもの純粋なる信心ひと筋の姿を理解できない。あまりにも、乱れた世の中でありますし、悪い人々が多いからでありましょう。私どもの学会精神は、広宣流布の達成と、それから御本尊根本にして、人々の幸せを願う信心ひと筋の精神です。

総本山にどこまでも御奉公申し上げていくべき心で戦っているのが、初代の牧口先生以来の創価学会の伝統であります。

夫(それ)について経王御前(ごぜ)の事・二六時中に日月天に祈り申し候

四条金吾のお子さんである経王御前のことについては、「二六時中」というのは朝も晩も一日中、ということです、一日中心配しています。そして日天、月天にも、早く病魔を去らしめるために、病気が平癒(へいゆ)するためにきちんと祈ってある、命じておりますよ、ということです。

日蓮大聖人は、御本仏でいらっしゃいます。したがって、宇宙それ自体を動かしていくべきお力があります。太陽は大日天という、月は大月天です。私どもが拝んでいる御本尊のなかにも、大日天、大月天としたためられています。したがって、御本仏であらせられる日蓮大聖人から、大日天、大月天に命ずれば、即大御本尊の威力と同じすがたがあらわれてくるわけなのです。

先日のまほり暫時も身を・はなさずたもち給へ

先日さしあげた、お守り御本尊を、けっして離してはいけませんよ。

お守り御本尊は、現在においては、日蓮正宗の大信者として功労のあった人に、順次お下げ渡しを願うことになっておりますが、ここでおおせの「まほり」とは、いま皆さん方が拝んでおられる御本尊のことを意味するのです。同じと考えてよろしいのです。

御本尊を暫時も離してはいけない。受持即観心です。御本尊を受持しきっていくことが信心である。それで初めて御本尊から守られるのです。どんな嵐があろうが、悪口があろうが、弾圧があろうが、御本尊を絶対に離さないでいく、それが信心なのです。それで仏になれるのです。守られるのです。

其の本尊は正法・像法・二時には習へる人だにもなし・ましてかき顕し奉る事たえたり

その「本尊」とは、弘安二年十月十二日の一閻浮提総与の大御本尊のことと拝します。正法千年、像法千年の二千年のあいだに出現した迦葉、阿難とか、天台、伝教とか、妙楽とか、そういう人々が

だれも顕すことができなかった御本尊であるというのです。正法とは釈尊がなくなってはじめの千年、像法とはつぎの千年をいいます。

この御本尊は、衆生を永遠にお救いくださるところの根本の法なのです。したがって、釈尊であろうが、天台、伝教であろうが、三世十方の仏さまであろうが、ぜんぶ、この御本尊を覚って仏になったのです。

本尊ということについては、これは「功徳聚」とも御書に説かれております。功徳の集まり、との意味です。または「輪円具足」ともいいます。すなわち十界三千の宇宙の法則が、そのまま御本尊にふくまれている、縮図されているのです。大宇宙の根本法則です。

また、本尊とは、根本尊敬、または根本尊仰ということで、すなわち根本の本と、尊敬、尊仰の尊で「本尊」と申し上げるのです。

およそ宗教というならば、本尊がなくてはならない。また、何をもって本尊とするかによって、おのずと高低浅深があります。この御文におおせのように、いまだかつて存在したことのない最高唯一の根本尊敬の当体こそ、この御本尊である。一大事の因縁によって、一切衆生を永遠にお救いくださる慈悲と大哲理をもって出現された、末法の御本仏であられる日蓮大聖人が、その御命をもって初めて顕された人法一箇の御本尊なのであります。この御本尊に南無したてまつる以外に、真に幸せになる道は絶対にないと、私は信ずるのです。

師子王は前三後一と申して・ありの子を取らんとするにも又たけきものを取らんとする時も・いきをひを出す事は・ただをなじき事なり、日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も師子王に・をとるべからず、経に云く「師子奮迅之力」とは是なり

「前三後一」とは、前に三歩進み、後ろに一歩用心のためにさがる、そのように慎重にかまえつつ、全力で獲物をとらえる姿勢を示しています。師子王は小さな蟻をとる場合でも、また猛獣に襲いかかる場合でも、同じように、全力を尽くして戦うといわれています。

この師子王の前三後一という言葉は、法華経をたたえている涅槃経にでてくるのです。そのような力をもって、日蓮大聖人が全身全霊を打ち込んでしたためた御本尊なのだ、すごい力があるのだ、とのおおせなのです。

また「師子王」の師とは、日蓮大聖人です。御本尊です。子とは子供で、弟子の意味になるのです。弟子が、師匠である大聖人について、一生懸命、信心に励んでいくならば、王のごとく悠々たる絶対の幸福境涯にいたる、このように拝することもできるのです。

「師子奮迅之力」とは、法華経涌出品の言葉です。御本尊の偉大な力用を意味するのです。師子王の奮迅の力をもってあらわした御本尊なのです。このように説かれておられるわけです。

又此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし

この御本尊をよくよく信じていきなさい、とおおせです。

信とは何か。「無疑曰信」――疑わざるを信という。どんなことがあっても、御本尊に祈りきって疑わない。その信心なのです。願いはぜんぶかなうのです。

それを御本尊に題目をあげながら、どうも紙を拝んでいて、病気は治りそうもないな、などと思えば、治りそうもないという思いのほうが通じてしまうのです。ですから疑ってはいけないのです。

南無妙法蓮華経は師子吼の如し・いかなる病さはりをなすべきや

「南無妙法蓮華経は師子吼の如し」

有名なお言葉です。生命力の弱い人、信心の弱い人は、この一節を暗記することですね。

南無妙法蓮華経という仏法は、「師子吼の如し」――百獣の王である獅子が吼えているような力があるのだ。師子王が一声吼えれば、百獣はこわくてぜんぶ逃げてしまう。と同じように、題目を唱えるならば、どんな病魔、悪鬼魔神も逃げていくのです。

戸田先生は、「南無妙法蓮華経と唱えるときに、たとえていえば、この脊椎を中心にして、放射線が、グーンと体内から宇宙に発散していくようなものだ」というふうに話されたこともあります。

この大宇宙の運行、その本源力が、南無妙法蓮華経です。私たちが御本尊にむかって、南無妙法蓮華経と唱えたときに、大宇宙の運行と合致する自分自身の生命の本源の力が出てくるのです。

だから、「いかなる病さはりをなすべきや」です。病魔などは逃げていってしまう。それほど力がある。また病魔を克服していく、その力があるのだとおおせです。

鬼子母神・十羅刹女・法華経の題目を持つものを守護すべしと見えたり

これは法華経の陀羅尼品の約束なのです。きちんと御本尊に題目を唱える人を、いっさいの諸天善神、十羅刹女、鬼子母神等が、ぜんぶ、守ってくれます。

私どもは御本尊を拝んでおりますから、鬼子母神も、十羅刹女も、諸天善神も、あらゆる仏、菩薩も、私どもを守ってくれているわけです。ですから、御本尊を信じきってしまえば、悠々たるものです。経文にはっきり約束があるのです。

十羅刹女とは、鬼子母神の十人の娘です。子供です。この鬼子母神と十羅刹女が、御本尊護持の者を守る。この経文の約束に違えず、経王殿も守るのですよ、との大聖人のおおせなのです。

幸
さいはいは愛染の如く福は毘沙門の如くなるべし

幸福境涯をひらき、幸福の生活になることは、愛染明王のごとく、また福運を積み、福徳のすぐれたことは、毘沙門天のようになる、とのおおせです。

愛染明王も、毘沙門天も、幸福をつかさどる働きを示します。私たちの生命にも、毘沙門天、愛染明王が具わっている。御本尊にも、愛染明王は左端に梵字で、毘沙門天は左上に、きちんとしたためられております。

願いがかなって幸福を感ずるのみならず、人生全体が福運に満ちみちていく、そういう生活にかならずなるのだというのです。これも御本尊の偉大な功力であります。

いかなる処にて遊びたはふるとも・つつ(恙)があるべからず遊行して畏れ無きこと師子王の如くなるべし

どんな時代がこようとも、どんなところにいようとも、いつも楽しみきっていける。悠々たるもの

です。なにもこわいものはない。御本尊さえ拝んでいれば、諸天善神の加護が絶対にあるのです。

私どもの人生の目的は、信心の目的は、仏になって最高の永遠の幸福をつかむことです。毘沙門天や愛染明王の働きのように、幸福生活、福運の生活になることは当然なのです。

悠々と自由自在にこの人生を生きていく姿が、ちょうど師子王のごとき姿なのです。師子王はどこへいっても、百獣がこわがって逃げてしまう。師子王が威風堂々と悠々と生きていくように、私どもは、そのような師子王のごとき人生が送れるのだというおおせです。

十羅刹女の中にも皐諦女の守護ふかかるべきなり

四条金吾のお子さんでありますから、鬼子母神の十人の子供である十羅刹女のなかでも、皐諦女の守護がとくに強いであろう。かならず経王殿の病気は治るはずだとのおおせです。皐諦女はひじょうに顔かたちがきれいだといわれております。

但し御信心によるべし

ここが問題なのです。ただし、信心によるのです。ただし書きがあるのです。

ある御書には、「叶ひ叶はぬは御信心により候べし全く日蓮がとがにあらず」（御書全集一二六二ページ）とおおせであります。すなわち、どんな願いでもかなう。ただし、おのおのの信心による。功徳をうけられないのは御本尊のせいではないよ、とも明確にお述べです。

信心の姿には二通りある。潔い信心と、濁れる信心です。清らかな水には、月がきれいに映る。濁った水には、月が映らない。そのように、御本尊の偉大な功力を、ひきだせるかどうかは、こちらの信心にかかっているのです。

潔い信心とは、清らかな水が流れるような信心です。朝晩の五座三座の勤行をまじめにいたし、学会の指導どおりに、信心に、折伏行に励んでいる人は、潔い信心、清らかな信心です。その人には功徳は絶対にあるのです。

濁れる信心とは、朝晩の勤行もろくにしない、折伏もしないという人です。折伏をするということも、なにも学会が発明したわけではありません。日蓮大聖人のおおせです。また釈尊の経文にも、はっきりしています。それ以外に、根本の修行はないという意味なのです。修行しないで仏になろう、功徳を受けようなどということは、おこがましいかぎりです。働かないで月給をくれというのと同じなのです。

濁れる信心の人は功徳がありません。それは批判している人か、折伏しない人か、怨嫉をしている人であり、そういう人は、顔色も悪いのです。もっともかわいそうな人です。

なにも私どもは、信心してくれといったおぼえはありません。ご紹介は申し上げたのです。批判されるべきなにものもありません。あくまでも自分のための信心です。日蓮正宗のために信心してくれとか、創価学会のために信心してくれとか、そんなことは、ひとこともいいません。

そのほか、広宣流布を実現しようということは、日蓮大聖人の民衆救済のための至上命令です。それは合言葉としていいます。しかし、自分のこともできないで、広宣流布のためなどということは、すこし話が大きすぎるのです。どうか、自分自身の幸福のために信心していただきたいと、こう申し上げるのです。それが結局は、広宣流布の前進にも、ぜんぶ通じるのです。

そのためにも、どうか信心の純粋な先輩、よき同志についていってください。

つるぎ(剣)なんども・すすまざる(不進)人のためには用る事なし、法華経の剣は信心のけなげ(勇)なる人こそ
用る事なれ鬼に・かなぼう(鉄棒)たるべし

いくら名刀をもっていようとも、戦おうという勇気がなければ、その名刀の価値はありません。なんら必要なくなります。これは当然です。

御本尊を信心するということも同じです。大きい鐘(かね)があっても、そっとたたけば、その反響は小さい。力いっぱいたたけば、その反響も大きい。そのように、信心を強くすればするほど、それだけ功

徳も大きい。弱い信心の人は、それだけの小さい功徳である。

よく恩師戸田先生は「私の功徳は、公会堂いっぱいの功徳を受けている。あなた方の信心の功徳は、小指ぐらいだ。もっと、もっと、たくさん功徳をもらったらどうですか」と、このように指導してくださっておりました。

御本尊は宇宙大の功徳をお持ちになっていらっしゃるのですから、遠慮しないで、自分自身の宿命転換のためにも、罪障消滅のためにも、大功徳を受けるためにも、私どもは歓喜をもって信心修行に励んでまいりましょう。

「鬼に・かなぼうたるべし」とのおおせに、勇気が凛々とわいてくるではありませんか。

日蓮がたましひ（魂）をすみ（墨）にそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」

これは有名なお言葉です。「日蓮がたましひ」の「たましひ」とは、生命と訳すのです。日蓮大聖人の御生命を、墨にそめながしてかきあらわされたのが、日蓮正宗の御本尊なのです。日蓮大聖人のおおせどおりに、御相伝そのままに伝わっている御本尊です。

しかし、池上や身延や中山など、日蓮宗となのる邪宗日蓮宗各派には、日蓮大聖人の残された本尊はないのです。マネをしてまったくのニセモノを拝ましているのです。そのうえ狐を拝ませ、狸を拝ませ、蛇を拝ませている。ぜんぶ、魔の姿です。この大聖人の御文からみて、それがどれほど邪道であり、恐ろしいことであるかしれません。

あくまでも、「信じさせ給へ」とおおせどおり、日蓮大聖人おしたための御本尊に南無することこそが、大聖人の教えどおりに信心する絶対の道です。大聖人は「日蓮を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし」（御書全集九一九ページ）と厳しく戒めておられます。

「仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」

これは、むずかしくいいますと、種脱相対という法門です。脱益の仏法と下種家の仏法との相違なのです。この御文を拝するならば、あくまでも日蓮大聖人が、末法の仏さまであって、釈尊は脱益の仏である、なんら末法の時代には関係がないということが、明確にわかるのです。

「仏の御意は」――釈尊の本意は、法華経二十八品である。脱益です。

「日蓮がたましひは」――日蓮大聖人の究極は、南無妙法蓮華経という五字、七字の法華経です。これ三大秘法の御本尊です。

それなのに、身延では、三宝といって仏・法・僧をたてるのに、仏の宝を釈尊とたてるのです。釈迦像を五百塵点劫の教主釈尊としてたてる。法の宝をば本迹一致の妙法とたてる。これらはひどい邪義です。「本迹の相違は水火天地の違目なり」（御書全集九九六ページ）と、はっきり大聖人は打ち破ってい

らっしゃいます。

それから、僧の宝をば日蓮大菩薩とたてている。日蓮大聖人を仏と仰がないで菩薩とたてる、これまた、大きい邪見です。このように、大聖人の法門をまったく知らないのです。

日蓮正宗の仏・法・僧は、仏の宝は久遠元初の自受用報身如来、即日蓮大聖人です。法宝は寿量文底秘沈の大法、事の一念三千の南無妙法蓮華経。僧宝は第二祖御開山日興上人になるのです。これが大聖人の仏法をそのまま受け継いだ日蓮正宗の正しいあり方なのです。

妙楽云く「顕本遠寿を以て其の命と為す」と釈し給う

妙楽大師は、天台宗の第九祖で、おおいに天台大師の仏法を宣揚した方です。天台大師滅後二百年ぐらい後に中国唐代に出現しました。

その妙楽大師は「法華文句記」に、本地の遠寿を顕すことをもって、その根本となす、と解釈している。

仏法には八万法蔵という膨大な経典がありますが、その根本が南無妙法蓮華経である、すなわち御本尊になるのです。久遠元初以来の大生命哲理をもって、仏法の極意となすのだとの意味です。

経王御前には・わざはひも転じて幸となるべし

この御文は変毒為薬の法門です。経王御前が病気であります。その禍を転じて、かならず幸福になりますよ、病気が治ることはまちがいないというお約束のお言葉です。

私どもが、よく「罰即利益」とか、「変毒為薬」――毒を変じて薬となす、といいますが、その力をお持ちくださっているのが御本尊、妙法なのです。

妙法の妙とは、不可思議です。われわれの頭ではとうてい考えられない法です。私どもは過去遠遠劫の罪業によって、いろいろな宿命をもっています。貧乏であるとか、病気であるとか、人にしいたげられるとか、そういうような禍や罰や毒の宿命をぜんぶ転じて、幸福、利益にかえていく、これが仏法の極理なのです。

皆さん方は、今、おのおのの生活のうえで、宿命と戦い、いろいろな禍や苦しみがあると思いますが、その罰をぜんぶ利益に、幸福に転じきっていく、強い強い信心をしていただきたいと、私は願うものです。

あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就せざるべき、「充満其

願・如清涼池・現世安穏・後生善処」疑なからん

「あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ」

またここで「信心」のお言葉があります。しっかりと信心をして、この御本尊に祈念していきなさい、祈り念じなさい。願いきっていきなさい。かならずよくなるのですから、と。

途中で休んでしまう人は功徳がないのです。もうすこしのところで、挫折してしまうのです。「こんなに信心をやったけれども」「これだけお願いしたけれども」という愚痴をいう人がいる。しかしその尺度は、どこにあるか。「こんなにやったけれど」という基準は、どこをもっていうのか。大聖人よりも、よけいに信心したか。だれよりも、よけいに信心をやったのか。となれば、そうはいえないと思うのですね。

これだけやったけれども、まだ願いがかなわない。それほど自分は罪業が深いのだから、もっと勇気をだして、願いがかなうまでだれよりも御本尊に祈りきっていこうという心が、けなげな信心ではないかと、私は思うのです。

「何事か成就せざるべき」

短い御文でありますが、大聖人の絶対の御確信があらわれています。御本尊にきちんと御祈念しきっていくならば、どんなことでもかなわないわけはない。なんと自信にあふれた明らかな文証でしょうか。「祈として叶わざるなし」と日寛上人がおおせになりましたが、大聖人がこの「経王殿御返事」

に、このようにはっきりと述べられていることなのです。

そのつぎに「充満其願・如清涼池」――その願い充満して、清涼池の如し、と読むのです。これは、薬王品の経文です。

ぜんぶ、自分の願いがかなって満足しきって、物心ともに幸せにみちあふれていく姿は、清涼の池に入るがごとく成仏の境界に入るのである、というのです。

それから、「現世安穏・後生善処」というのは、薬草喩品の経文をひかれております。

「現世安穏」とは、この世で物心ともの幸福生活をしきる、そして「後生善処」は、来世もまた、幸せなところへ生まれてくる、御本尊のおわしますところへかならず生まれてきて、また幸せな生活をしていけるという経文です。それは「疑なからん」と、この御文は絶対に疑いないのだとおおせでございます。

又申し候当国の大難ゆり候はば・いそぎ・いそぎ鎌倉へ上り見参いたすべし

「当国の大難」と記されていますように、大聖人は、このときは、佐渡の国へ流されておられる重大なときでありました。御自身が最大の艱難辛苦をうけられているにもかかわらず、「佐渡の国から許されて鎌倉へ帰ったならば、すぐにお会いいたしましょう」という御慈悲あふれる激励をされている

のです。

私どももまた、大聖人のこの御慈悲の万分の一でも、まねごととしても実践していきたい。同志の人々、信心がまだ強くない人、また信心をよく知らない人々に対して、御本尊をしっかり拝んで幸せになるように、一生懸命に、真心をこめて指導の任にあたっていかねばならないと、痛感しております。

法華経の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり、ただ歎く所は露命計りなり天たすけ給へと強盛に申し候、浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経、あなかしこ・あなかしこ。

八月十五日　　日蓮花押

経王御前御返事

「法華経の功力を思ひやり候へば不老不死・目前にあり」

こうした大御本尊の偉大なる功力を考えるならば、「不老不死」――老いず死なずということは、ひじょうに深い意味があるのですが、それは別として、簡単にいえば、絶対の幸福になることはまちがいない、ということです。仏になることはまちがいないのです。

いろいろな難があるけれども、病気や事業の失敗や、また三障四魔などの難があって苦しいときこそ、御本尊に願いきっていくならば、「佐渡御書」にも「師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」（御書全集九五七ページ）との御文もあるとおり、かならず幸せになることはまちがいないのです。

しかもそれは、「目前にあり」といわれて励まされています。わずかのしんぼうなのです。

「ただ歎く所は露命計りなり」

ただ心配することは、その人の寿命である。今世の寿命というものはきまっております。五歳で死ぬ人もおります、二十歳で死ぬべき宿命の人もおります。八十の寿命の人もおります。

寿量品には「更賜寿命」――更に寿命を賜わん、との文もあります。

御本尊を拝するならば、寿命を、五年でも、十年でも、十五年でも、その人の信心によって延ばしていただけるのです。また、そういう証拠はたくさんあります。大聖人は仏さまでいらっしゃいますから、よくその寿命もおみえになるのです。だから、心配することは、その人の寿命である。宿命である。だが「天たすけ給へ」と強盛に祈ってあげます、との御慈悲あふれるお言葉です。

「浄徳夫人・竜女の跡をつがせ給へ」

浄徳夫人も、竜女も、法華経に説かれています。女人です。妙荘厳王の奥さんが、浄徳夫人です。竜女も八歳の竜女といって、提婆達多品に説かれている。そこに出現すべき女性の信者です。二人とも、やはり法華経によって、仏になったのです。

同じように、あなたも御本尊にすがりきって、仏になりなさい。生命は永遠なのだ、かならず幸せ

になれるのだとのお言葉です。

そして「南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経、あなかしこ・あなかしこ」でおわります。

（昭和三十五年九月八日）

「一生成仏抄」講義

御書を拝読する場合には、かならず、佐渡以前の御書であるか、佐渡以後の御書であるかということを考えて読まなければなりません。なぜかならば、佐渡以前の御書は、御本尊がまだ御建立になっていないのです。佐渡以後になりますと、御本尊の御建立がありますから、御書にも本尊、本尊ということばがありますが、佐渡以前は題目を中心にして、御書のうえでお説きになっているのです。したがって妙法蓮華経というおことばについては、私どもが拝する場合には、かならず、御本尊を根幹として、拝していかなくてはいけないのです。

この一生成仏ということは、釈尊の仏法ではあくまでも調機調養されて、長い長い歴劫修行によって仏になるのです。すなわち機根が違い、仏法が違います。それに対して、日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経の末法の法華経は、一生のうちに成仏ができるという仏法なのです。御本尊を受持し

て、そして、御本尊に題目をあげることによって、今世の人生も、また来世も、仏の境界で、仏のふるまいで生活ができるという偉大なる仏法なのです。一生成仏ということについては、深い深い仏法の偉大さを説かれているわけなのです。

> 夫れ無始の生死を留めて此の度決定して無上菩提を証せんと思はばすべからく衆生本有の妙理を観ずべし、衆生本有の妙理とは・妙法蓮華経是なり故に妙法蓮華経と唱へたてまつれば衆生本有の妙理を観ずるにてあるなり

これが信心の目的です。「無始の生死」――生命は永遠である。宇宙が存在していたときから、私どもの生命はある。始めがあって終わりがあるというような生命ではない。無始無終、どこまでいっても、われわれの生命は永遠なのです。宇宙も長遠なのです。

その永遠の生命のなかにあって、「生死を留めて」、すなわち不幸、苦悩、苦しみというものをとどめて、「此の度決定して無上菩提を証せんと思はば」、すなわちここで一念発起して成仏を遂げたいと思うならば、「すべからく衆生本有の妙理を観ずべし」――自分の生命のなかに仏界が存在する、自分自身が妙法蓮華経の当体であることを知らなくてはならない。それを覚知するということは、御本尊に題目をあげる以外に道はないのです。

「衆生本有の妙理」とは、われわれの生命に本来そなわっている妙理のことで、それはなにかといえば、「妙法蓮華経是なり」と。それは南無妙法蓮華経のことである。妙法蓮華経と唱えれば、「衆生本有の妙理」を観じたことになるのです。

その南無妙法蓮華経という偉大なる法を御図顕あそばされたのが日蓮大聖人であり、すなわち御本尊なのです。御本尊に南無妙法蓮華経と唱えることによって「衆生本有の妙理」を観ずることができるのです。すなわち、自分自身が妙法蓮華経の大宇宙のリズムに合致した、妙法蓮華経の当体であるということを観ずることができる、覚知することができるというのです。

文理真正の経王なれば文字即実相なり実相即妙法なり唯所詮一心法界の旨を説き顕すを妙法と名く故に此の経を諸仏の智慧とは云うなり

「文理真正の経王なれば」

「文理」とは、南無妙法蓮華経という文と、文によってあらわされている法理のことで、それが真実の法であり、一切経の王である。すなわち、御本尊は、仏さまの悟りをそのままあらわされた究極の経であり、八万法蔵の大将であり、いっさいの経々の王さまです。

八万法蔵を要約すれば、三大秘法に帰着するし、三大秘法をせんじつめれば、帰趣するところは一

大秘法の御本尊です。ゆえに経王です。

したがって、「文字即実相なり」――御本尊のお文字は、即実相である。仏さまの姿である。御命であり、観念的なものではない。「実相即妙法なり」、御本尊には妙の働きがある。不可思議なる働きがある。信ずれば功徳があり、誹謗すれば大罰を受けるというその力がある。

「唯所詮一心法界の旨を説き顕すを妙法と名く」

「一心法界の旨」ということは、衆生の一心（生命）に法界（現象世界）のすべてが収まり、またこの一心が全宇宙に拡がっていくとの原理です。これを天台は一念三千の法理として示しました。いっさいの経の究極は、一念三千の法門になるのです。それを説き明かしたのを妙法というのです。

ゆえに、「此の経を諸仏の智慧とは云うなり」と。

その南無妙法蓮華経、即一念三千の仏法によって、三千の諸仏は仏になることができた。したがって、成仏できる本源の知恵は、南無妙法蓮華経である、御本尊なのであるというのです。

一心法界の旨とは十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり、此の理を覚知するを一心法界とも云うなるべし

「一心法界の旨」について、ここでさらに説かれています。

「十界三千の依正色心・非情草木・虚空刹土いづれも除かず」

全宇宙のありとあらゆる生命存在と現象世界のすべてをさしているのです。

「十界三千の依正色心」――十界は、地獄から仏界までの十の境界をいい、瞬間瞬間にあらわれる生命の境地をあらわしたものです。

私自身一個の生命体とすれば、私のこの宿命、たとえていうならば、病気で苦しんでいる宿命であるならば、これは地獄界です。その地獄界でありながら、ご飯を食べた、いい手紙がきた、いい音楽が聞こえたと喜びを感じる、天上界です。地獄界即の天上界です。十界に具足の十界がまたあるのです。

宇宙全体からみた十界ならば、自分自身は人間界です。この人間界のなかに、喜びや悲しみや楽しみがありますから、やはり十界の働きがそなわっている。

十界におのおの十界があるので百界、そのそれぞれに十如是をそなえているので千如、さらに国土世間、五陰世間、衆生世間の三世間を具して三千世間となります。

「依正」とは、正報はわが身、依報は環境世界です。「色心」の色は肉体、心は精神です。「虚空」は大空、「刹土」は小さい土地。

「いずれも除かず・ちりも残らず一念の心に収めて」

いっさいの宇宙の全存在と現象が衆生の一心に、一念の心におさまる、含まれるということを、一

心法界というのです。

「一念の心・法界に偏満するを指して万法とは云うなり」

また、これは逆にいったわけです。一念というものは、したがって、全宇宙に通ずるということなのです。

「此の理を覚知するを一心法界とも云うなるべし」

具体的にいえば、御本尊を拝むことによって、題目を唱えきっていくことによって、如来秘密神通之力の力をおだしくださることができるのです。大宇宙のリズムは、きちんとわが生命の幸福に及ぼす作用になっているのです。

但し妙法蓮華経と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず麤法なり、麤法は今経にあらず今経にあらざれば方便なり権門なり、方便権門の教ならば成仏の直道にあらず成仏の直道にあらざれば多生曠劫の修行を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがたし

「妙法蓮華経と唱へ持つと云うとも若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず」

御本尊を持ち、題目を唱えているとしても、わが身が妙法の当体であると信じられないならば、成

仏はできない。他に幸せになる道はないか、幸せにしてくれる人はいないかと、環境や他人を頼っていくいき方が、「己心の外に法あり」と思うすがたです。

それでは「妙法にあらず」です。麤法（そほう）というのです。「麤法」とは、妙法に対して劣った法とか、粗雑な法をいいます。御本尊を持っていない邪宗教は、法を盗んで、南無妙法蓮華経を唱えているけれども、それは麤法である。

「麤法は今経にあらず」――麤法であれば、それは法華経ではない。「今経にあらざれば方便なり権門なり」――法華経でなければ、方便経であり権経です。「成仏の直道」になるわけはありません。いつまで修行しても、絶対に成仏することはできないと断定していらっしゃるのです。

三大秘法の御本尊を離れたならば、ぜんぶ麤法になり、権教になり、外道になり、「多生曠劫の修行」、すなわちどんなに長いあいだ修行しても、永久に仏になることはできない。いわんや、一生成仏はできるわけはないのです。

故に妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華経と名（なづ）くるぞと深く信心を発（おこ）すべきなり

「妙法と唱へ蓮華と読まん時」、すなわち御本尊にお題目を唱えるときは、自分の一念、生命を南無

妙法蓮華経と名づけられたのであると信じていきなさい、と。題目を唱えた結果は、生活のうえに、はっきり事実の相として、現証としてあらわれるのです。信心即生活で、南無妙法蓮華経は、即いっさいの生活活動の源泉なのです。

自分自身が妙法蓮華経の当体になるのだ、その働きを湧現するのだという深い深い信心をもって、御本尊に題目をあげきりなさい、というお言葉です。

都て一代八万の聖教・三世十方の諸仏菩薩も我が心の外に有りとは・ゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども心性を観ぜざれば全く生死を離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善を修せんは譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し

「一代八万の聖教」――釈尊一代で説かれた膨大な経教といえども、また三世十方の諸仏、菩薩といっても、ぜんぶわが心の外にあると思ってはならない。

地獄というも、極楽というも、仏というも、修羅というも、すべてわが一念にあるのだというのです。つまり、不幸になる原因も、幸福になる因も、自分のなかにあると、とらえることが大切です。どんなに仏法を学し、有名な宗教家や学者になったとしても、「心性を観ぜざれば」ということは、

御本尊に題目をあげて、わが仏界を湧現していかなければ、自分自身が妙法蓮華経の当体なりと信じて実践しなければ、「全く生死を離るる事なきなり」、苦しみを離れることは絶対にできない、とのおおせです。

大聖人が衆生のために御本尊を御建立くだされたということは、どれほどありがたいことか、御本尊にめぐりあい、題目を唱えられることが、どれほどの福運であるか、いまさらながら感謝にたえないではありませんか。

「若し心外に道を求めて万行万善を修せんは」

心外に道を求めてあらゆる仏道修行をしようとも、どんなに慈善事業をしようとも、御本尊を離れた修行であるがゆえに、なにも利益がないのであります。

「譬えば貧窮の人日夜に隣の財を計へたれども半銭の得分もなきが如し」

なんの得にもならない、くたびれ損だということのたとえです。

然(しか)れば天台の釈の中には若(も)し心を観ぜざれば重罪滅せずとて若し心を観ぜざれば無量の苦行となると判ぜり、故にかくの如きの人をば仏法を学して外道(げどう)となると恥(はずか)しめられたり、爰(ここ)を以て止観(しかん)には雖学仏教(すいがくぶっきょう)・還同外見(げんどうげけん)と釈せり

天台大師もこのようにいっているではないか、「若し心を観ぜざれば、重罪を滅することはできない。御本尊を信じて題目をあげなければ、絶対に罪は消えない。また、御本尊に信心しなければ、どんな仏道修行をしても、ただ無量の苦行となる罪業を積むだけだ。業因をつくるだけだ」――と。

皆さん方は信心できたからよかったのです。世の中には、立派そうな人もいるし、ひじょうに福運のありそうな人もいるし、幸せそうな人もいるかもしれませんが、一生涯という長いあいだの人生をみ、また永遠の生命からみた場合には、かわいそうな姿になっていくのです。

反対に御本尊を持った人は、これから幸福へ、それから生命力を横溢して、福徳を積み勃興していけるのです。

したがって、「かくの如きの人をば」――御本尊を知らない、日蓮正宗以外の宗教、人々です。いくら仏法を勉強しているような姿をみせても、ぜんぶそういうような輩は外道である。

それで摩訶止観には、「雖学仏教・還同外見」、すなわち「仏教を学すといえども、かえって外見と同ず」、外道と同じであると釈しておられるのです。

さらにいえば、御本尊を持っていても、信じて実践できない人は、やはり外道と同じになってしまうのです。

然る間・仏の名を唱へ経巻をよみ華をちらし香をひねるまでも皆我が一念に納めたる功徳善根

なりと信心を取るべきなり

ゆえに御本尊にお題目を唱え、方便品、寿量品を読誦し、またしきみやお線香をお供えするということも、ぜんぶわが一念に功徳、善根として納まるのであると信じていくのです。

講義を聞くのも、座談会に行くのも、指導しに行くのも、御供養することも、登山会に参加するのも、一切法はこれ仏法ですから、わが身が一念三千の当体になるわけですから、御本尊のためになすいっさいの行動が、感謝にあふれ、真心をこめたものであるならば、すべて自分自身の功徳、善根になるというのです。どんなにささやかな努力であっても、すべてわが身の福運となってかえってくるのです。

これがすこし、その一念がくるい、その一念が、信心から、この「一生成仏抄」の原理からはずれた場合には、とても苦しくなるのです。すぐにもんくやわがままをいいたくなるのです。その一念が、功徳をぜんぶ消してしまうのです。

之に依って浄名経の中には諸仏の解脱を衆生の心行に求めば衆生即菩提なり生死即涅槃なり
と明せり

「解脱」とは悟りです。あらゆる仏の得た悟りの境地、諸仏が悟ったその知恵が、じつはそのまま「衆生の心行」にあるということです。衆生とはわれわれ凡夫です。

そのことを、「衆生即菩提」――九界の衆生が凡夫の身そのままで成仏する、迷いの生活が悟りへと開ける、また「生死即涅槃」――苦しみの生命が幸福に輝く生命に転換する、と明かしているのです。われわれ凡夫が御本尊に題目をあげれば、すなわち、それが悟りであり、解脱なのです。

又衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて浄土と云ひ穢土と云うも土に二の隔なし只我等が心の善悪によると見えたり

われわれ凡夫の心が寂しければ、その土も同じように寂しく感ずるのです。われわれの心が楽しければ、その土も同じように楽しく感ずる。浄土というも、穢土というも、ぜんぶ、わが一念一心によって決定される、その反映であるというのです。すなわち、「土」には二つの違いはないのです。

「只我等が心の善悪によると見えたり」

自分の住んでいるところを楽しくするもしないも、それはわが一念によって決定されるのです。

自分の家庭というものを仏界にするか、地獄界にするか、天上界にするか、修羅界にするかはぜんぶ自分の一念一心によって決定される。広くいえば、全世界を地獄界にするか、修羅界にするか、仏

界にするか、天上界にするかは、そこに住む人々の一念によって決定されるのです。

ですから、御本尊を持つわれわれの一念で、どんなところをも楽しい国土にしていく、そういう環境をつくっていくのが、私どもの役目なのです。座談会へ行っても、わが家へ帰っても、会社へ行っても、わが一念で、喜びにあふれた楽しい世界にかえていけるのです。

衆生と云うも仏と云うも亦此くの如し迷う時は衆生と名け悟る時をば仏と名けたり

「衆生（凡夫）」といっても、「仏」といっても、なんのへだてもないのです。同じ当体なのです。同じ人間なのです。したがって、「迷う時は衆生」であり、「悟る時は仏」でもある。

同じ凡夫の当体でありながら、御本尊に題目をしみじみとあげて、わがこの生命こそ妙法と覚って、たくましい生命力と清らかな知恵をもって、人々を救ってあげたい、この法を教えてあげたい、という境涯の場合は「仏」です。

反対に信心を一生懸命やらないで、商売も苦しい、家庭も暗いといつも愚痴をこぼしている場合には「衆生」なのです。迷いなのです。

御本尊を拝んで、御本尊に照らされて、九界の現実の世界にあって悠々と闊歩していく、人生をたくましく切り拓いていく、それが私ども信心をしているものの姿なのです。安心立命です。

悩みや苦しみがあっても、それに引きずられない。悠々とそれを見おろしてのりきっていける。それで、人々を、慈悲をもって、御本尊へ、御本尊へと導ききっていく心が充満している。これがもう地涌の菩薩の生命なのです。

譬えば闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず法性真如の明鏡と成るべし

「闇鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが如し」

くもった鏡も磨けば、玉のようによくうつる。

「一念無明の迷心は磨かざる鏡なり」

したがって、私どもの「一念無明の迷心」は、生命自体にそなわった根本の迷いであるがゆえに、不幸なのです。

これを磨くならば、かならず「法性真如の明鏡」とかわるのです。「法性」とは妙法蓮華経、「真如」とは真理のことで、結局、妙法蓮華経という意味です。「法性真如の明鏡と成る」とは、仏の生命、仏界の境地が湧現するということです。正しいものの見方ができ、豊かな知恵がわいてくるのです。

また染浄の二法でいえば、一念無明の迷心が「染」です。九界です。それから法性真如の明鏡が「浄」で、きよらかということです。仏界です。

一念無明の迷心は、魔の働きになってくるのです。法性真如の明鏡は仏の働きです。信心は魔と仏との闘争です。ですから題目をあげないで、御本尊を忘れては、その魔に負けてしまうというのは、ここにあるのです。

深く信心を発して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり

この御書の初めに「無上菩提を証せんと思はば」とありますが、無上菩提を証せんと思うならば、このようにして深く信心をしなさい、と結論されているのです。

無上菩提ということは、それ以上の悟りがないという意味なのです。無上に対して爾前経の悟りは有上なのです。まだ上があるという悟りなのです。世の中には名人とか、達人といわれる人がおりますが、それは有上なのです。

南無妙法蓮華経によって悟った悟りが、無上菩提なのです。最高の悟りになるのです。それを悟らんとするならば、「深く信心」をして、そして「日夜朝暮に又懈らず磨くべし」、今の皆さんの姿で

す。朝晩の勤行を怠らず、折伏行に邁進していることは、日蓮大聖人のおおせどおりに仏道修行している人です。

朝晩の勤行は、「日夜朝暮」とおしたためですから、朝だけでもいけないのです。晩だけでもいけないのです。地道な実践の積み重ねこそ、大切であります。

「只南無妙法蓮華経と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」

御本尊に、南無妙法蓮華経と題目を唱え、唱えきって、わが生命を磨いていくのであります。

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり

これはこのとおりです。「妙」とはどういう心か、ただわが一念の心が不思議な作用をする、これを妙というのである。したがって、妙法は不可思議、思議することのできないということです。言葉でもいいあらわすことができない、文字でもいいあらわすことができない、それを、「不思議」とい

い、「妙」というのであります。

「一念の心」は妙です。十界三千の働きは、縁にふれて刻々と変わっているのです。

ここは、恩師戸田先生が牢獄のなかで無量義経を読んでいたそのなかで、いきあたったところなのです。ちょうど、その三角でもない、四角でもない、まるくもない、青でも黄でも赤でもない、縦でもない、横でもない、長さでもない、距離でもない、という経文にぶつかったのです。なんのことだろう。それが仏性、心性、すなわち、生命そのものである。一念一心という表現だったそうです。それが、われわれの一念一心の作用なのです。

切ってみても出てきはしない。有るかといえば無いし、無いかといえば、きちんと精神作用、活動がある。妙であります。

有無ということばではとらえられないというのです。有でもない、無でもない。しかも有か無のどちらかをもってあらわれる中道一実の不思議な当体を妙というとのおおせです。

「此の妙なる心を名けて法とも云うなり」

此の妙なる心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり

妙法です。妙とは法性、法とは無明と説いてある御書もありますが、いろいろな心の働き、現象があるのですから、法になります。

御本尊は妙法の当体です。その妙法の当体に私どもが妙法蓮華経と唱える、南無妙法蓮華経と唱えると、しぜんに病気が治る、生命力が湧く、功徳がでてくる。これが現証です。不思議といわざるをえないが、事実は事実です。

したがって、「此の法門の不思議をあらはすに譬を事法にかたどりて蓮華と名く」

これが譬喩蓮華です。妙法をあらわすものとして蓮華と名づけるのだというのです。

「一心を妙と知りぬれば亦転じて余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり」

心には善心、悪心、それから善心でも悪心でもない場合は、無記となぞらえておりますが、いっさいが妙法蓮華経なのだという意味なのです。

また、私どもの生活に約した場合は、御本尊に題目をあげる、妙法蓮華経と唱えているのですから、一心が妙です。生活のうえでも、さまざまな念心が起こります。だが、そのさまざまな瞬間瞬間の心、一念というものも、ぜんぶ妙法蓮華経なのだ、御本尊に通ずる念心であると信ずることが、南無妙法蓮華経の精神なのであります。

また、苦しい、楽しい、つらい、悲しい、その人、その人に応じて、おのおの刻々とその作用があります。それらはすべて妙法蓮華経なのです。苦しい、だからといって、南無妙法蓮華経を唱えるしかない。唱える当体が御本尊です。つらい、どうしたらいいか、南無妙法蓮華経を唱える。唱える当

体は何か、対境は何か。それは御本尊です。結局はそういうことになるし、それが大事なのです。

悲しい、といっても題目を唱える以外にない。さびしい、といっても題目を唱える以外にない、悩むといっても題目を唱える以外にありません。したがって、ぜんぶ仏になれる。結果はみな幸せになれる。これがこの妙境です。

然ればすなはち善悪に付いて起り起る処の念心の当体を指して是れ妙法の体と説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云うなり、此の旨を深く信じて妙法蓮華経と唱へば一生成仏更に疑あるべからず、故に経文には「我が滅度の後に於て・応に斯の経を受持すべし・是の人仏道に於て・決定して疑有る事無けん」とのべたり、努努不審をなすべからず穴賢穴賢、一生成仏の信心南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経。

日蓮花押

善心であり悪心であり、いずれにしても念々起こるところの心、その心自体が、こんどは南無妙法蓮華経と誓って、この題目を唱えればぜんぶ成仏できる。どんな悪心であろうが、男性であろうが、女性であろうが、愚かな人であろうが、高貴な人であろうが、ただ御本尊に題目をあげればいいのだ、仏になるのだ、というのです。

その一念の本体から悪心もでるし、それから善心もでるし、悩みもでるし、苦しみがでてくるのですから、なんでもその一心一念に、題目を、御本尊に向かって唱えさせればいいのです。ほんとうに簡単であり、ありがたい法門です。

「経文には」というのは神力品です。神力品には「我が滅度の後に於て」――釈尊滅度の後においてというのです。滅度には、三種類あります。滅度正法、滅度像法、滅度末法です。この「滅度」は末法と読んでいいのです。

「応に斯の経を受持すべし」――「斯の経」とは、末法の経、すなわち南無妙法蓮華経です。その三大秘法の南無妙法蓮華経を受持した「是の人」とは、名字即の凡夫です。

「仏道に於て」――仏道とは仏道修行です。その仏道修行において仏になることは「決定して疑有る事無けん」――疑う必要は絶対にないというのです。

さらに「努努不審をなすべからず」と念をおされていらっしゃいます。

「一生成仏の信心南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経」

釈尊の仏法は妙法蓮華経序品第一、妙法蓮華経譬喩品第三、妙法蓮華経如来寿量品第十六というように、説明なのです。

日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経です。すなわち南無妙法蓮華経を唱え、それ自体の生命活動が生活のうえに功徳としてあらわれる。実際なのです、実践なのです。即生活に通ずるのです。

釈尊の仏法は妙法蓮華経、序品第一、方便品第二というふうに説明書きなのです。文底から拝すれ

ば、御本尊の説明なのです。また御本尊を中心にした功徳論と罰論、これが法華経二十八品といってもいいでしょう。

それに対して、日蓮大聖人の仏法は南無妙法蓮華経の仏法であり、すなわち歴劫修行せず、この世で、このままの凡夫の姿で、成仏の境界の生活ができる、との意味なのです。

（昭和三十六年四月二十三日）

「富木殿御返事」講義

文永九年四月　五十一歳御作

於　佐渡一ノ谷

（御書全集　九六二ページ
編年体御書四七七ページ）

この御書は、富木常忍が佐渡の国の日蓮大聖人よりたまわったお手紙です。

日蓮大聖人は、法華経の勧持品の「数数見擯出」の予言どおりに、二度島流しにあわれた。すなわち、釈尊の予言をそのまま日蓮大聖人の御身にあてはめて、伊東の流難、佐渡の流難となったのです。その佐渡の流難のときに、弟子である富木常忍にあてられた激励のお手紙が、この御書なのです。

日蓮が臨終一分も疑無く頭を刎ねらるる時は殊に喜悦有るべし、大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか

この御文は、死身弘法の大精神をお示しになっておられます。

日蓮大聖人が佐渡へ流された。邪宗の輩の手によって、自分はいつ殺されるかしれない。しかし、妙法流布のために、まちがいなく首をはねられるというそのときこそ、これ以上の喜悦はないだろう、とおおせなのです。

私どもの師匠は日蓮大聖人です。日蓮大聖人のお振る舞いを鑑とし、手本として仏道修行し、日蓮大聖人からおほめのことばをいただけるような、信心を貫いている人が、ほんとうの日蓮大聖人の弟子といえるのです。

私どもも弟子の一分として、日蓮大聖人の仏法を弘めていくうえにおいて、どんな迫害があっても、むしろ迫害があればあるほど「喜悦有るべし」、これほどの喜びはないと、莞爾としていきれる、また修行しきっていける一人ひとりでなければならないのです。そういう境涯になっていける人は、まことの日蓮大聖人の弟子といえるのです。

日蓮大聖人は、「此経難持の事」という御書（四条金吾殿御返事）を残されております。この経はたもちがたし、御本尊を持てばかならず難にあう、とおおせです。

それなのに、少々悪口雑言されたからといって、すぐに「信心やめようかな」と思う。そういう弱い信心では成仏できるわけはないし、まして日蓮大聖人の弟子とはいいがたい。したがって、信心が浅いために、大功徳も受けられないのです。

信心していけば難があるのです。たとえば、自動車の運転の練習をするにしても、一人前の運転手

になるまでには、ドブへ落ちたり、電柱にぶつかりそうになったり、ハラハラするような場面に何回もあいながら、だんだんと力をつけて、自由自在に運転ができるようになるのでしょう。

運転なんか習わないと決めれば、難がないかもしれません。苦労はないわけです。と同じように「永遠の幸福をつかみきるのだ、絶対の安心立命、物心両面にわたる幸福な生活をきずこう」という場合には、御本尊を拝み、御本尊を根本とした信心修行をしていく。そうすれば罪業はでるし、また宿命転換のために難もあり、罪障消滅が必要だということになります。

それを「信心すると難があるのなら、それでは信心しないでおこう」などというのは、もっとものようにきこえますが、そうではないのです。信心してからうける難は、かならず変毒為薬されるのです。また、同じ罪業であっても、それでも軽くうけているのであり、すべて帳消しにしていけるのです。

それなのに、信心しないで、なんとかして罪業を消滅しようとか、悪口をいわれないように、難がないようにしていこうなどといったところで、どこまでいっても永久に不幸です。

ですから、御本尊を持った以上は、一生涯、勇敢に信心だけはしぬいていきましょう。いっさいが自分自身のためなのですから。日蓮大聖人の弟子として、もし、大難があって妙法流布のために命をおとすようなことがあったとしても、その瞬間に、「ああ、よかった」と、にっこりと笑っていけるような境涯になりたいものです。

「大賊に値うて大毒を宝珠に易ゆと思う可きか」というのはそこなのです。

これは、変毒為薬を明らかにした御文です。

法難にあうということは、ちょうど大賊にあって、もっていた大毒を奪われ、かえって宝珠をえたようなものだというのです。ということは、自分自身の罪業というものを、ぜんぶ大賊がもっていってくれるようなものであり、仏の境界だけ残るというのです。すなわち成仏疑いないというのです。これ変毒為薬です。

ですから日蓮大聖人は「種種御振舞御書」に「此の身を法華経にかうるは石に金(こがね)をかへ糞(くそ)に米をかうるなり」(御書全集九一〇ページ)とおっしゃっております。

すなわち、石を金にかえると思いなさい、しょせん糞のような生命ではないか、と。福運のない、罪業深いわれわれではないか、と。それゆえ御本尊のために生命を捨てることは、ちょうど金にかわっていくようなものである。その原理と同じなのです。

実際問題として、私などもノリ屋のむすこです。病弱で世間から見放されていくような運命の自分であったのが、御本尊にお目にかかり、また日蓮大聖人の仏法を教わり、創価学会員として今日まできたがゆえに、仏法も少しずつわかり、福運も積み、大勢の人々に信頼され、大勢の人々のために働いていけるなどということは、それこそ大毒を宝珠にかえたようなものでしょう。

皆さん方一人ひとりが、そうだと思います。自分自身というものを静かにふり返ってみた場合に、どれほどこの御本尊に巡りあったことによって救われていることか。これ以上の有意義な最高の幸せはないと、しみじみと感ずるはずだと、私は思うのです。

そのように感じていくことも、信心といえるのではないでしょうか。

> 鶴目員数の如く給び候い畢んぬ御志申し送り難く候

富木常忍のお使いの方が、きっと佐渡の一の谷まで日蓮大聖人をおたずねして、御供養にあがったわけでしょう。

戸田第二代会長は「今だから佐渡といっても近いけれども、七百年前の佐渡といえば、それこそ現在でいえば、アフリカの砂漠の真ん中のようなものだよ」といわれたことがありましたが、実際、そうでしょう。

汽車もなければ、飛行機もなければ、船だって今みたいに大きい汽船ではありません。それも、師匠が大法難にあわれ、弟子たちは牢へ入れられたり、所領を奪われたり、世間から見放されている最中にも、日蓮大聖人をお慕い申し上げて御供養にあがるという、これはほんとうに尊い信心だと、私は思うのです。

それからみれば、今の私たちの境遇はひじょうに楽なものです。これは幸福といいますか、また一面では不幸といいますか。一面は幸福のようにみえて、仏道修行の面からみれば、不幸なことです。しかし、実際問題として、朝な夕な不幸な人のために折伏をし、広宣流布に邁進していることは、こ

の富木常忍の振る舞いにまさるとも劣らないと、私は思います。

また、御供養については、あくまでも本部として、総本山にきちんと御供養申し上げておりますから、全学会員が総本山に御供養していることに通ずるのです。

このあいだも、大坊の落成式が厳粛にとどこおりなく終わりました。それと引き続いて、このあいだの幹部会でお話ししました総坊や六壺、厨坊とぜんぶ設計にはいっております。また、墓地にしても、土地にしても、そうとうの御供養もしております。さらに、私は大客殿建立のときの御供養をはるかに越える御供養の決意もしております。

法門の事先度四条三郎左衛門尉殿に書持せしむ其の書能く能く御覧有る可し

これは、指導の方式を述べられているのです。

法門のことは、あなたの同志である四条金吾殿に、きちんと書いて渡しておいたから、「能く能く御覧有る可し」――よくその御書を、お手紙を、指導を、読みなさいとおおせです。

「私は日蓮大聖人から直接聞かなければ、承知しない」というような、身勝手ないき方ではいけないのです。

「あなたの同志にいっておいたから、それを聞きなさい」と。

したがって、現代において、このように、私どもが、日蓮大聖人の御書をみなで拝していることも、同じ原理です。

また、日常的な指導については、大勢なのですから、先輩のいうことを聞いてください、聖教新聞をよく読んでください、大白蓮華をよく読んでください。しかし、根本はなんといっても御書を読みあっていこうではないか、このいき方が、いちばん大事になってくるわけなのです。

それから「依法不依人」ということが大事です。「法に依って人に依らざれ」ということです。あくまでも「四条金吾殿に渡した手紙をあなたもよく読みなさいよ」と富木常忍におおせなのです。

粗経文を勘え見るに日蓮法華経の行者為る事疑無きか

これは日蓮大聖人が、法華経の文上においては、上行菩薩、文底においては、末法の御本仏であるという依文です。

「粗経文を勘え見るに」――法華経の経文に照らしてみれば、その上行菩薩の振る舞いというものは、自分自身の振る舞いと一致しているではないか。

「日蓮法華経の行者為る事疑無きか」――日蓮大聖人が御本仏であられることは、疑いのないことで

ある。法華経の行者とあったならば、これは「末法の御本仏」と拝すべきなのです。

なぜかならば、御義口伝にいわく「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり」（御書全集七六〇ページ）と。

すなわち、法華経の行者の一身の当体が本尊です。本尊とは根本尊敬です。したがって、日蓮大聖人が、御本尊であり、人本尊です。人本尊であるならば、仏さまでしょう。

それであるのに、日蓮大菩薩と悪しく敬ったり、日蓮大聖人の教えは南無妙法蓮華経の法華経であるにもかかわらず、釈迦如来に対して題目を唱えさせるというような宗派は、まったく道理に合わないことは、この一事をみてもわかります。

> 但し今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の悪国を去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか等、一一の証文道理追て進せしむ可く候

日蓮大聖人は仏さまであるのに、今、佐渡の国へ流されるというような法難にあったということは「天の加護」がなかったのかというのです。どうして、日蓮大聖人が、そういう大法難にあうかという理由を三つ、つぎにあげられております。

「一には諸天善神此の悪国を去る故か」

諸天善神が、悪国、すなわち謗法の国であるがゆえに、その国をすてて天にあがってしまうのです。「立正安国論」にくわしく論述されております。

「正直者の頭に神宿る」ということばがありますが、真実の正直とは、南無妙法蓮華経を唱える人をいうのです。正法を護持する人を正直という。その人に神は宿り、神は守るのです。これは御書にもありますけれども、それは当然でしょう。

国が悪国であるがゆえに、日蓮大聖人を迫害し、法華経をないがしろにしている国であったがゆえに、諸天善神は、仏のまえで「正法を守護する人を守る」と誓いをたてたのですから、この正法を護持していない国から去るのは当然であるというのです。これが一つです。

「二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか」です。

諸天善神は法味を味わうことによって、個人を、一国を守る力を得るのです。食事ができなかったり、月給をもらわなかった場合には、威光勢力もおとろえてしまいます。もし会社が、職員に対して月給をあげなかったら、威光勢力はおとろえて、仕事なんか、だれもしなくなるでしょう。ストライキをやるのはあたりまえです。

と同じように、あくまでも諸天善神は、南無妙法蓮華経の法味を食べて、神としての働きをするのです。これは法華経を拝し、御書を拝すれば、この原理は、はっきりしているのです。ですから、私どもは神を否定してはいないのです。むしろ、もっとも神を大事にし尊敬しているのは、私どもとい

えるでしょう。

神札は、これはだめです。神と神札は違うのです。はやく妙法が流布されて、天照大神や正八幡大菩薩も、そしてすべての諸天善神がぜんぶ来下して、日本国を守っていくようになれば、何千年の歴史にかつてない平和な世の中が到来することは、御書に照らして当然なのです。ですから、どうしても広宣流布をしなくてはならないのです。

七百年前からみれば、諸天善神もそうとう法味を味わっているといえるでしょう。二百何十万世帯の人が、法味をあたえているのですから、なにやかやいいながらも、刻々と日本の国はよくなってきております。

外国をまわってみても、物資が豊富という点では日本の国は世界一です。こんな小さな、それも敗戦国でありながら経済的にここまで立ち上がったのも、やはり、御本尊のお力が厳然とあらわれているのです。日本全体が大きく守られていると、私は確信するのです。

「三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか」と。

それはそうでしょう。なにしろ、十何万という宗教法人があるなどという国は、日本だけです。どこの国へ行っても、そんなにたくさんの宗教が乱立しているところはありません。

ですから「大悪鬼三類の心中に入り」――大悪鬼が、俗衆、道門、僭聖増上慢の三類の強敵となってあらわれてくるのです。

日本国中がこのような邪宗教の世界です。魔の働きが強いにきまっています。いわんや、日蓮大聖

人の御出現においては、すごい法難があることは当然です。「梵天帝釈も力及ばざるか」――当然、そうです。これは一往の義です。

日蓮大聖人御自身で経文どおりにお振る舞いになって、もう、すべてお見通しになっていらっしゃるのです。なにも恐ろしくはないのです。また、そういう三類の強敵が出現しなければ、法華経の予言どおりにならないからと、たなごころにのせての御行動のように拝するのです。

私たちもまた、事実、これだけの大折伏戦を、日蓮大聖人滅後かつてない大折伏、大法戦をやったのですから、三類の強敵は、紛然とおそいかかってくると覚悟しなくてはなりません。皆さん方も、難があればあるほど喜んで、宿命転換をしていってください。

釈尊の予言、また日蓮大聖人の御書を拝すれば、正法を護持するものには、かならず三類の強敵があると書いてあります。ですから、難があったからといって、これは、どうもやりかたが少し強すぎるからではないか、もっとやわらかに弘めるべきではないか、などと思うことはまちがいなのです。まことに、御書のとおりになっているのです。

日蓮大聖人も、「難来るを以て安楽と意得可きなり」（御書全集七五〇ページ）、また「大悪をこれば大善きたる」（御書全集一三〇〇ページ）と、繰り返しおおせになっております。

御書をしっかりと拝読してごらんなさい。どの御書を拝しても、すべて、難があるぞ、難があるぞと警告され、また「猶多怨嫉」と、如来の滅後にはかならず難がある、とおおせではありませんか。

にもかかわらず、難がでてくると、どうも強すぎるからとか、私は難がないようにうまくやってい

こうとか、人間にはずるい根性があるのです。

ですから、このように、三つの理由によって、自分は佐渡の国へ流されたのであると、富木常忍が疑わないようにおおせになったのです。

「一一の証文道理追て進せしむ可く候」――証文どおり、道理のとおりに、このようになったのである。それゆえ疑う余地はないのです。あくまでも、経文をひかれて説かれているのです。

なにかあったら、皆さん方も、御書をきちんと拝読していきましょう。

今、大御本尊の御威光は、中天の太陽のように輝きわたっています。また、これだけの法華経の信者が団結していけば、どんなことでもできないわけはありません。ですから、お互いに守りあって、勇敢に楽しくやっていきたいと思うのです。

但生涯本より思い切て候今に翻返ること無く其の上又違恨無し諸の悪人は又善知識なり

「但生涯本より思い切て候」とは、日蓮大聖人の御決意です。

どんな難があろうとも、もとより覚悟のうえである。法華経を弘めきって死ぬのだ、富木常忍、あなたもそういう決心をしていきなさい、と日蓮大聖人おんみずからの御決意を、披瀝されている御文であります。一生涯、信心を貫きとおすべきであるという激励でもあると思います。

総じては、日蓮正宗の全信者にたまわった御金言です。われわれへの激励として、受けとめなければならないところです。

「今に翻返ること無く」――どのような難があったからといって、退転などする考えはみじんもないのである。そして「其の上又違恨無し」――恨みもなにもない。ここが大事なところです。

かつて牧口初代会長の時代に法難があったときに、多くの同志は牧口先生、戸田先生を恨んだのです。法難がきたときに「牧口先生にいわれたから信心したのだ、戸田先生にいわれたから信心したのだ。それなのにこんなに難があって……。うちの主人が牢に入ってしまう」と、さんざん恨んだらしいのです。

現在もまれに、そういう場合があります。「創価学会でいわれたから、信心したのだけれども、こんな難がでてしまった。悪口をいわれてやりきれない」という人が、まれにいるのです。まるで創価学会のためにやっているみたいな考えではいけないということです。「違恨無し」です。信心は、ぜんぶ自分自身のためなのです。

いいときは、ああ、よかったよかった、ひとつも学会をほめないで、自分だけいい気になって、悪いことがあれば、なんでも会長が悪い、組織が悪い、支部長が悪いといいたくなるのです。

大事なことがあったときに、その偉さはわかるのです。信心もみえるのです。

「諸の悪人は又善知識なり」

また難があったからといって、諸の悪人はまた善知識である。大きいおことばです。大慈大悲の御

境界のおことばと拝すべきです。

いろいろ悪口雑言され、難があった。そのおかげで題目もあがり、御本尊の偉大さもわかるのです。また自身の成長もある。したがって、悪人といっても、憎むのでなく、むしろ自分を仏にしてくれる人なのだと感謝していかなくてはならない。「ありがたいな」と心のなかで思えればよいのです。それだけ強い信心をするのです。

日蓮大聖人は、一切衆生はぜんぶ自分の子供であるとおおせなのです。悪人であろうが謗法であろうが、結局は、われわれを仏にしてくれる善知識なのです。ですから、軽蔑したり、憎んでいくということはまちがいです。

邪宗邪義はこれはいけません。これは憎むべきです。しかし、知らなくして謗法をおかし、正しい宗教を知らずたぶらかされている人に対しては、あくまでもめざめさせてあげる気持ちが必要です。

「摂受・折伏の二義仏説に依る」

摂受・折伏の二義仏説に依る、敢て私曲に非ず万事霊山浄土を期す、恐恐謹言。

卯月十日　　日蓮花押

土木殿

摂受といい、折伏といい、仏法弘通の方軌には二義あるが、これは釈尊の説である。

「敢て私曲に非ず」――これは我見ではない、かってに、日蓮大聖人が決めた教義ではないのであるというのです。

よく、私たちが折伏、折伏というと、世間では、まるで創価学会が折伏ということを発明してやっているみたいに思っている。そうではありません。三千年前からあるのですから。仏法には、摂受か折伏か、どちらかしかないのです。

「佐渡御書」に「摂受・折伏時によるべし」（御書全集九五七ページ）とあります。今の時代は折伏です。

末法においては、はっきり折伏となっているのです。それは釈尊の経文にも明確です。いわんや、七百年前に日蓮大聖人が御出現になって、みずから折伏を行じられた。それは御書を拝すれば厳然たるものです。

「万事霊山浄土を期す」というのは「霊鷲山会（りょうじゅせんえ）において、また会おう」と。現在においては「大御本尊を根幹として、人生を生ききっていこう」ということなのです。「霊山浄土」といえば、御本尊のことです。現実においては大御本尊が霊鷲山です。御本尊にいっさいをまかせ、日蓮大聖人にいっさいをまかせて、人生を生ききっていこうとのおことばと拝せます。

（昭和三十七年四月五日）

「兄弟抄」講義

文永十二年四月　五十四歳御作

与　池上兄弟　　於　身延

（御書全集一〇八七ページ十行目～一〇八九ページ）

（編年体御書　六八八ページ十行目～六九〇ページ）

されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし、仏法漢土に渡って五百余年・南北の十師・智は日月に斉く徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり

「されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし」

法華経に三種類あるということは、皆さんもごぞんじであると思いますが、像法年間における法華

経は、摩訶止観になるわけです。釈尊在世においては法華経二十八品、末法今時においては南無妙法蓮華経の五字七字の法華経、天台大師の法華経は摩訶止観です。

したがって、像法年間においては、一代聖教の肝心は摩訶止観なのです。摩訶止観といっても、こんどは文底から拝したならば、ぜんぶ御本尊になるのです。

「仏法漢土に渡って五百余年」

インドから中国に仏法が渡って約五百年後に、天台大師が出現し、摩訶止観の広宣流布があった。正法、像法年間を区切る場合に、五百年、五百年に分けますが、天台大師の出現までが五百年であるということは、ひじょうに不思議に感ずるのです。

それに対して、仏法が日本の国に伝来して約七百年後に、こんどは日蓮大聖人の立宗宣言があり、立宗宣言から七百年後に現在の隆盛があり、ちょうど題目の七文字の、七百年、七百年目にきわだった大事があるのもまた、不思議であります。

「南北十師」――江南の三派、江北の七派のことで、南三北七といいますが、その邪宗十派です。

それらの十師は「智は日月に斉く徳は四海に響き」とあらわされているように、大学者であり、大宗教家であり、大思想家であったけれども、唯仏与仏の境界ではないから、一代聖教の浅深、勝劣、前後、次第には、迷っていた。

また一大事の因縁によって出現した仏ではないから、相伝がないから、以上の理由によって仏法の極理がわかるわけがないのです。南北十派の教えは、知恵に対する知識になってしまうし、実践に対

する理論になってしまうし、仏法の真髄の奥義を会得していないというのです。

「智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず」

「智者大師」とは天台大師です。天台大師は、それらの南北十派を打ち破って、仏法の真髄を明かしたのです。

像法年間において成仏の直道はなにか。それは摩訶止観である。しかし、摩訶止観は、理論においても、またその実践においても、まだたいへんにむずかしいものでした。

末法においては、日蓮大聖人が摩訶止観のもっと本源である妙法それ自体を、一幅の曼荼羅(まんだら)としてお明かしくださったわけです。いかなる宿命の人でも、愚かなものでも、不幸なものでも、平等にぜんぶ仏になれる、それが御本尊です。

「教弥(いよい)よ実なれば位弥よ下れり」(御書全集三三九ページ)で、実際問題として、日蓮大聖人は凡夫僧でいらっしゃるけれども、御本仏であり、私ども凡夫をぜんぶ仏にしてくださる御本尊をお残しくださったのです。幸せになる根本は、御本尊以外にないのです。この文の場合は、天台を立てて、天台の摩訶止観のうえから、仏になっていく直道を説明されているわけです。

「一念三千の如意宝珠」ということは、根本的には御本尊ということですが、ここは天台大師の一念三千の法門のことです。

「三国の一切衆生に普く与へ給へり」――三国とはインド、中国、日本です。それらの国々の一切衆生を救うために説かれた法門であるということです。

此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く「止観の明静なる前代に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし

この「一念三千の如意宝珠」という仏法の真髄、極理は、漢土で初めて説かれたばかりでなく、インドの論師ですら明かさなかった法門である。どんな大学者、大宗教家、僧侶たりとも、明かすことのできない、またできなかった法門である。

「章安大師」という人は、天台大師の跡継ぎです。そして、天台大師の説いた「法華文句」、「法華玄義」、「摩訶止観」各十巻、これが天台大師の三大部といって、経文になるわけですが、その摩訶止観を筆録したのは章安大師です。

その章安大師が「止観の明静なる前代に未だ聞かず」――摩訶止観という大仏法哲理は、いまだ前代に聞いたことのない明らかな立派な哲理であり、仏法であるといっているのです。

また章安大師のいうのには、「天竺の大論尚其の類に非ず」――インドの竜樹菩薩の著である有名な大智度論といえども、この摩訶止観にくらべれば問題にならない、とも述べています。

そして、その摩訶止観十巻のなかの第五の巻の一念三千という哲理は、摩訶止観のなかでもとくに

深い法門である、とおおせです。

これは、南無妙法蓮華経ということを、そのまま説けませんから、いろいろと論理的に明かしているのです。

> 此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず

大事な御文です。ここはあくまでも摩訶止観のことをさしていますが、しかし、いま日蓮大聖人の弟子として、日蓮大聖人の仏法を拝する身として、「此の法門」とは三大秘法の御本尊のことであり、日蓮正宗の仏法のことであると訳していいのです。

像法の法華経である摩訶止観を奉じ、論じ、それを説法しても難がある。いわんや、それ以上の極理である南無妙法蓮華経を濁悪の末法に説法するならば、折伏するならば、魔は競わないわけは絶対にないという御文なのです。

だから、折伏をするならば、「必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず」、魔が出来しなければ正法ではないのです。天理教、霊友会、立正佼成会などは、いくら広めても、なにも魔が競わないでしょう。

ところが、日蓮正宗の仏法を弘めていった場合、折伏行に励んでいった場合には、個人においても

創価学会においても、魔はたえずあるでしょう。これ正法であるという証拠なのです。正法である証拠であると同時に、仏になれるという証拠でもあるのです。

第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ

三障四魔があったときには、この御文を拝読してください。この御文を身口意の三業で読めば、それで、その人は仏道修行の要に通達したことになるといってもいいのです。

「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず」

これは摩訶止観第五の巻の文です。信心修行がすすめばすすむほど、三障四魔は猛然と競いおこってくる。だが、その魔にしたがってもいけないし、恐れてもいけない。

魔が起きたならば正法である、大功徳を受けられるのだと、まず喜ぶのです。この魔を魔と見破り、魔と戦って、どんなことがあっても「随う可らず畏る可らず」です。

「之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」

これにしたがえば、人々を悪道に墮としてしまう。これを恐れてしまったならば、仏道修行はしき

っていけない、仏にはなれない。宿命転換もできない。断固としてこれをいいきればいいのです。これだけわかっていれば、あとはいいのです。

「此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり」

この法門は、日蓮大聖人御自身が身をもって読まれたのであり、日蓮門下の弟子檀那の鏡とすべきである。

「謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」

ちょうどいまは日蓮大聖人立宗七百十年にあたります。その大聖人のおおせどおりに、それを資糧として実行、実践していく人こそ、日蓮大聖人のまことの弟子といえるのです。その弟子が功徳を受け、仏になれないわけは絶対にないと、私は信ずるのです。

この御文を私どもは生涯色心の二法で、色心のこの生命で読んでいこうと、これをきょう決意してもらいたいのです。

此の釈に三障と申すは煩悩障・業障・報障なり、煩悩障と申すは貪瞋癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし

これも有名な御文です。三障四魔の「三障」とは、煩悩障、業障、報障をいいます。

「煩悩障と申すは貪瞋癡等によりて障礙出来すべし」

まず第一番目の煩悩障は、貪瞋癡の三毒から、さまざまなかたちでおこるものです。

「座談会へ行こうか。いやそれよりも、家で寝ていたほうがいい」「総本山へ行こうか。いやその電車賃でどこかへ遊びに行きたい」、これ貪りです。

つぎに瞋りとは、感情です。「あの人に怒られたけど、なにも文句をいわれる必要はない」「学会は強すぎるからもうやめよう」などというのは感情です。これは自分自身の魔です。自分が永遠に幸福になっていくのだ、丈夫になるのだ、一言一句でも教わって自分の財産にしようという心を、自分で妨げてしまうのです。

それから、つぎは癡でしょう。題目をしっかりあげていけば「以信代慧」になってわかってくるけれども、題目をあげないで、自分の頭だけで判断して、指導を受けない。御書にわれわれが信じていくあり方が書いてあるのに、それもわからないで批判したり、ぜんぶ自分の心のなかの障です。

また、女の人は男の人に引きずられたり、男は男で女の人に迷って信心が進まなくなったり、商売に失敗して、いくら信心しても功徳がないなどと自分で決めこんでしまったり、これも癡かです。自分の一念から起きているのです。

いずれにしても、それを打ち破っていくのは題目です。それから、すこしでも自分がそういう弱い心になった場合は、自分を引き上げてくれる人に接していくこと、また、そういう和合僧の雰囲気に

なじんでいこうと努力する以外にありません。いずれも根本は題目です。
魔はかならずでてくるのです。むしろ信心が長くなってきた人が危いのです。「行解既に勤めぬれば」ですから、信心が五年、七年、十年、十四、五年になってきた人が危いのです。だれも、「それが魔ですよ」とはいってくれない。心が退転してはなりません。これが煩悩障です。
「業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし」
これは、もっとも気をつけてもらいたいところなのです。
かつて牧口初代会長、戸田二代会長が牢にはいったとき、まず退転したのは幹部の夫人たちだった。「すべて牧口先生が悪い。戸田先生が悪い」といいだした。牢から夫を早く出したいと思うあまり、同志をも憎むようになってしまうのです。人の心というものは恐ろしいものです。だから、そういうことのないようにしていただきたいのです。
しかし一面においては、女性は大事なのです。戸田先生も「広宣流布は婦人の手によって」と激励されておりました。これを縮図して一家においても、皆さん方がよく気をつけなければならない場合があるのです。夫が七の力しかない場合に、妻が立派であれば十にしていける。逆に夫が十の力があっても、妻が愚かであれば七にも五にも減じてしまう。へたすれば夫を落としてしまう。それほど大事な役目なのです。
「報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし」
第三の報障は、国主、国家権力、それから大事なお父さんやお母さんが反対して信心を妨げること

をいうのです。

又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや

三障四魔の四魔のなかに「天子魔」という魔がある。第六天の魔王と魔民によって起こり、父母、妻子、権力者等のあらゆる姿をもって、仏道修行を妨げようとする働きのことである。四魔は、天子魔、死魔、煩悩魔、蘊魔です。

「今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや」

これは、現在にあてはめていえば、日蓮大聖人の仏法を学し、日蓮大聖人の仏法を修行しているという人はたくさんいるようであるけれども、だれびとも真実に実践してはいないという証拠の御文なのです。

なぜかならば、だれに、三障四魔が起きているか。だれにも起きてはいない。それは、正法を修していない証拠ではないか。

ということは、いま日蓮宗と名のる宗派の僧の、だれびとが法難にあっているか。三障四魔にあっているか、天子魔にあっているか。あっていない。ただひとり日蓮大聖人の正統である日蓮正宗創価

学会だけが、三障四魔と戦っているのでしょう。

> 之に随えば将に人をして悪道に向わしむと申すは只三悪道のみならず人天・九界を皆悪道とかけり、されば法華経を除きて華厳・阿含・方等・般若・涅槃・大日経等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を悪道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華経を信ずるやうにて人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり

これは厳しいおことばです。摩訶止観第五の巻の文のなかに「之に随えば将に人をして悪道に向わしむ」という文があります。

その意味は、そういう人に随ってしまうなら、地獄、餓鬼、畜生界の三悪道に堕ちるというだけではない。人界、天界、九界までみな悪道となるのである。仏法のうえにおいては、絶対に成仏するということが人生の目的であるがゆえに、それ以外はぜんぶ悪道になってしまうのです。峻厳なる戒めです。

「されば法華経を除きて」――この法華経は、日蓮大聖人の南無妙法蓮華経の法華経です。

「天台宗を除きて余の七宗の人人は人を悪道に向わしむる獄卒なり」

また七宗（倶舎、成実、律、法相、三論、華厳の南都六宗と真言宗）は、人々をぜんぶ悪道に向かわせて

いく獄卒なのである。その原理からいけば、今の日蓮宗各派も新興宗教も、そのなかにぜんぶはいるでしょう。

このように日蓮大聖人が厳しくおおせになったそのとおりに、私たちはいっているのです。世間で、創価学会は折伏で邪宗教、邪宗教と悪口をいうのが悪いというけれども、末法の御本仏が宣言していらっしゃる、そのとおりにいっているのです。

さらに「天台宗の人人の中にも法華経を信ずるやうにて人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり」と。

天台宗の人々のなかにおいても、法華経を信じているようであるけれども、事実は、心は爾前経を信じていて、人をも悪道に堕としている獄卒がたくさんいる。また、真実の法華経を行じきれないで、我見で、邪見で法華経を行じている人もたくさんいる。これも獄卒であると喝破されているのです。伝教大師いわく「法華経を讃すと雖も還って法華の心を死す」とは、まさにこのことです。

日蓮大聖人の仏法を学し、日蓮大聖人の仏法を賛嘆する人はたくさんいるようであるけれども、同じく悪道に人をつかわす獄卒がたくさんいるわけでしょう。正しく成仏へ導いていくのは日蓮正宗しかないのです。この御文から推測すれば、はっきりわかります。

今二人の人人は隠士と烈士とのごとし一もかけなば成ずべからず、譬えば鳥の二つの羽人の両

眼の如し

この「二人」というのは池上兄弟です。兄を大夫志宗仲といい、弟を兵衛志宗長といいます。二人の信心に、父の康光は反対でしたが、とうとう兄の宗仲が勘当されるという事態にいたりました。そのとき、大聖人より慈愛あふれる御指導をたまわったのが、この「兄弟抄」です。

池上兄弟二人は「隠士と烈士」のようなものである、とおおせです。隠士と烈士については、同じくこの「兄弟抄」のまえのところ（御書全集一〇八六ページ）にくわしく書かれてあります。

隠士が仙人になる法を修するのに、烈士の協力が必要でした。隠士の修行中、烈士は絶対に口をきいてはいけないといわれ、固く約束したが、つぎからつぎへと競いおこる魔に負けて最後にとうとう声を発してしまったため、隠士はついに仙人の法を成ずることができなかったというのです。

この池上兄弟も同じく、どちらが欠けても成就できない、二人が団結してお父さんを折伏し、成仏していきなさい、と激励されているのです。

「鳥の二つの羽人の両眼の如し」

みんな、こういう気持ちで団結していきたいものです。夫婦もそうであると同時に、兄弟も、そして、とくに同志は、広宣流布という目的に向かっての団結が大切です。そのような日蓮大聖人の御指導と拝していいのです。私ども仏法を信ずる身として、親類兄弟よりも、仏法の世界の契りというものは、もっともっと深い次元になるのです。

又二人の御前(ごぜ)達は此の人人の檀那ぞかし女人となる事は物に随って物を随える身なり夫たのし(おとこ)
くば妻もさかふべし(栄)夫盗人ならば妻も盗人なるべし

この「二人の御前」というのは、この兄弟の奥さんでしょう。「檀那ぞかし」という、檀那という場合は、ふつう施主と訳するのですが、ここでは主人を守っている保護者という意味です。

「女人となる事は物に随って物を随える身なり」

この御文は有名です。これは、皆さん方が思索してください。また実践してください。

たいていは、物に随わなくて、物を随えさせてしまうものです。つごうがいいところは随って、つごうが悪いところは随わないで、随わなくてはならないときに随わないで、随ってもらわなくてもいいときに随ってしまうものです。この御文どおりに、どうか信心で実践していただきたいと思うのです。ただし、自分なりに、御書を利用して、つごうがいいように読んではいけません。

「夫たのしくば妻もさかふべし」――これは、このとおりです。逆に、夫が退転してしまったならば、ちょうど夫が盗人ならば妻も盗人と同じように、いっしょに地獄へ行ってしまうのです。

どうか信心を根幹としてご主人をしっかり激励してください。妻の信心が大切なのですよ、と兄弟の夫人たちにも指導されているのです。

是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と華と果と根と葉との如くにておはする
ぞかし、木にすむ虫は木をはむ・水にある魚は水をくらふ・芝かるれば蘭なく松さかうれば柏
よろこぶ、草木すら是くの如し

「是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と」云云ということは、永遠の生命を明かしていらっしゃるのです。

夫婦の絆、またその因果というものは、今世ばかりのことではない。影あればかならず身があり、華が咲けばかならず果がなる、根が深ければ葉もしげるように、生々世々にどこまでもいっしょなのです。

今世のふるまいが世々、生々、因果の理法によって、ずーっと縮図されていくのです。ですからいちばん大事なのは、御本尊を根幹として妙法に照らされた現在なのです。

「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」(御書全集二三一ページ)なのです。

仏法の世界においては、御本尊に照らされて、いま激励を受けたり、いま薫陶を受けたり、いま自分が題目を唱えて宿命転換をしようと決意した場合には、その瞬間からもう成長していくのです。

「草木すら是くの如し」――木にすむ虫は木を食べて、また水にすむ魚は水を飲んで生きている。また芝が枯れれば蘭も生きていけない。松が栄えば、柏も喜ぶ。畜生や草木すら、助けあって生きているのです。いわんや人間として、また仏法を学する者においてをやです。

比翼と申す鳥は身は一つにて頭二つあり二つの口より入る物・一身を養ふ、比目ひほくと申す魚は一目づつある故に一生が間は離なるる事なし、夫と妻とは是くの如し此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔ゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば竜女が跡をつぎ末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし

「比翼」という鳥のことは、白楽天の長恨歌という詩のなかにもありますが、雌雄それぞれ一目一翼で、つねに一体となって飛ぶといわれます。「比目」という魚も同じように一目しかないので、二匹が並んで泳ぐといわれています。そして一生涯離れることはない。夫婦というのは、このように仲むつまじく、ともに助けあい、支えあっていくものだとおおせです。

「此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔ゆる事なかれ」

信心、御本尊のことについてだけは、たとい、夫にたたかれようが、害されようが、あくまでもいさめるべきである。信心しきっていくべきである。これは日蓮大聖人の御教訓です。いざという場合

には、婦人が大事です。信心さえ貫き通すならば、夫を救えるのです。

そして、夫人たちが力を合わせて兄弟の信心をいさめていくならば、竜女が仏になったあとをついで、末代悪世の女人の成仏の手本となると激励されているのです。

> 此くの如くおはさば設ひいかなる事ありとも日蓮が二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申して順次生に仏になし・たてまつるべし

「此くの如くおはさば」――日蓮大聖人のおおせどおりに実践していくならば、「設ひいかなる事ありとも」――たとえどんなことがあってもということです。こういう小さいことばを信心で読まなくてはいけません。絶対にそれを自分のものとして実践しなくてはいけません。

「二聖・二天」――二聖は勇施、薬王。二天は毘沙門天（多聞天）、大持国天をいいます。

日蓮大聖人が、二聖、二天、十羅刹、そして釈迦、多宝にも命令して「順次生に仏になし・たてまつるべし」と。すなわち、永久に幸福を与える、御本尊のもとに生まれてこられる、壊れない仏の境界で人生を送っていけるようにしてあげましょう、と。ありがたいおことばではないですか。難に遭っている弟子をお思いくださる、日蓮大聖人の厳然たる御確信です。

心の師とは・なるとも心を師とせざれとは六波羅蜜経の文なり

「心の師とは・なるとも心を師とせざれ」、これも有名な御文ですが、六波羅蜜経にあります。

心というものは微妙なもので、自分ではどうしようもないものです。それを正しく位置づけるには、どうしても師が必要です。

私たちの信心にあてはめてみれば、御本尊を拝することが「心の師」にあたります。

または、広くいえば、信心強盛な先輩について指導をうけ、意見をきくことも「心の師とは・なるとも」にはいるのです。

「心を師とせざれ」ということは、我見や感情のままに判断したり、行動したりしてはいけない。あてにならない自分の心を師とするところに、不幸があるのです。

御本尊を根本とし、それから仏法の指導を根本としていくことが「心の師とは・なるとも」にはいるし、そこに自身の成長と価値創造がある。反対に「心を師とする」とは自分を中心にして、仏法の原理を聞かなかったり、御本尊を第二義にしたり、それから指導を第二義にするがゆえに、成長も前進もないのです。

法華経陀羅尼品にも「若し我が呪に順ぜずして　説法者を悩乱せば　頭破れて七分に作ること　阿梨樹の枝の如くならん」（妙法蓮華経並開結六四五ページ）との文があります。これは、よく御書にも引用さ

れていますけれども、法華経の行者を迫害すれば罰があるという文証です。

つぎに「世尊、我等亦当に身自ら是の経を受持し、読誦し、修行せん者を擁護して安穏なることを得」ともあります。今でいえば、御本尊を持って折伏する人を守るという意味になります。

そのつぎに「諸の衰患を離れ、衆の毒薬を消さしむべし」とは、衰退したり、患わないで、いっさいの毒といっさいの不幸を消してしまうということです。こういう経文もあります。

設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華経の事のみさはぐらせ給うべし

「設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして」

どんなにわずらわしいことがあっても、そんなことは夢と思っていきなさい、とおおせです。私たちも、そう決めてしまいましょう。どんなに苦しいことが山ほどあっても、それは夢だと笑って進みましょう。たしかに、御本尊を根本として信心をきちんとしていけば、そんな悩みなどは、もう幻影のようなものです。この世の中は、一面では、諸行無常です。本有常住は御本尊しかないのです。

「只法華経の事のみさはぐらせ給うべし」

御本尊のことだけ考えていきなさい、というのです。広宣流布のことだけ考えていけばいいのではないですか。あとは、どんな事件があろうが、いやなことがあろうが、たいしたことはないというの

です。

信じられるのは、根本は御本尊だけです。ですから御本尊、それから御書を中心にして、永遠の幸福をめざし、一生成仏を願い、そのことを思索していきましょう。

お金などいくらあっても死ぬときに持っていけません。いくら名誉をもっても、自分はたいしたものだと思っても、人がみてくれないことはたくさんあります。いくらいいものを着ても百年着られません。みんな一時的な虚栄にすぎません。

中にも日蓮が法門は古へこそ信じかたかりしが今は前前いひをきし事既にあひぬればよしなく誇ぜし人人も悔る心あるべし、設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各にはかへ思ふべからず

日蓮大聖人が「真言亡国、禅天魔」と、大折伏行に御活躍をなされたが、初めは南無妙法蓮華経を信じ、唱える人は、少なかった。かえって、迫害ばかりして、批判ばかりしていたけれども、日蓮大聖人が「立正安国論」等で予言された「他国侵逼難」「自界叛逆難」がそのとおりに的中した。それにびっくりして、理由もなく誇じていた人も、批判していた人も徐々に悔いる心がおきてきたことでしょう。また、信心する人がふえてくるでしょう、こういう意味です。

「設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各にはかへ思ふべからず」

これから、たくさん信心する人がいるかもしれないけれども、池上兄弟のほうが、薫陶もたくさん受け、信心も古いのですから、ずっと、あなた方のほうを信頼していますよ、とおおせです。

始(はじめ)は信じてありしかども世間のをそろしさにすつる(捨)人人かず(数)をしらず、其の中に返って本より謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘(ぜんしょうびく)等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返って仏をはう(謗)じ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき

これは、このとおりです。はじめは、せっかく信心しても、世間の批判がこわくて捨てる人は数を知らないというのです。いままでの歴史でも、どれだけ退転したことか。批判記事が新聞にでたとか、悪口をいわれたとか、そんなことで退転するぐらい、みっともないことはない。どんなことがあっても退転だけはしてはいけません。

信心するのに世間の目を恐れて、なにが幸せになれますか。では、新聞記事や雑誌記事や世間の人が幸せにしてくれるか。してくれはしません。目先のちょっとしたことに紛動されて、一生の幸福を、いな永遠の幸福を破壊してしまうのは、もっともおろかなことです。

日蓮大聖人の時代においてさえも、御本仏がいらっしゃっても、世間の恐ろしさに捨てる人は、た

くさんいたのです。いわんや、これからがほんとうに大事なのです。

「其の中に返って本より謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり」

「佐渡御書」をみても、残念ながらそういう事実があったのです。そして日蓮大聖人の時代にあったことは、今もあるのです。一度は日蓮大聖人の弟子となっても、やがて退転して批判する人もある。こういう人は、もとから謗じている人よりも、かえって強く謗ずるというのです。こわいことです。こういうことを、よくみきわめていくべきです。

「在世にも善星比丘等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返って仏をはうじ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき」

釈尊在世において、善星比丘という比丘は、初めは釈尊の弟子として信心したけれども、のちには捨てて、かえって仏を謗じた。釈尊の慈悲をもってしてもどうしようもなく、ついに無間地獄に墮ちたというのです。

善星比丘というのは、釈尊の太子の時代の三人の子供の一人といわれています。子供であっても、これだけ師敵対するのです。釈尊在世においても、こういうことがあるのだとおおせです。そういう因縁、役目があり、悪役があるのです。

このことは、日蓮大聖人の弟子として、退転して、日蓮大聖人をそしったからといって不思議に思うことはないのです。御本尊に功徳がないから退転しているのではないのだよ、という御文と拝せばいいのです。

皆さん方も、退転して「御本尊に功徳がないから……」などという人に対しては、この御書をみせてあげればいいのです。「釈尊の子供だって釈尊に敵対して地獄に堕ちている」と。なにも恐れることはありません。皆さん方が退転しても同じことです。地獄へ堕ちていくのです。御本尊は絶対なのです。あとは、おのおのの信心です。

此の御文は別してひやうへの志殿へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によくよく申しきかせさせ給うべし・きかせさせ給うべし・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。

文永十二年四月十六日　　日蓮花押

この「兄弟抄」は、池上兄弟にあてられたものですが、別しては、弟の兵衛志宗長にさしあげたお手紙であるとおおせです。兄が勘当されたのをみて、兄よりも信心の弱い弟のほうの動揺を心配されたからでありましょう。

また、兄の太夫志宗仲の夫人、弟の宗長の夫人にも、よくよく読んできかせてあげなさい、ともおおせです。「よくよく」というそのひとことに、この御書の指導どおり、しっかりと実践していってほしいという、大聖人の願いがこめられているように思われます。

（昭和三十七年四月十二日）

「曾谷殿御返事」講義

建治二年　五十五歳御作

（御書全集一〇五五㌻～一〇五六㌻）
編年体御書　九二九㌻～九三〇㌻）

この「曾谷殿御返事」は、別名「成仏用心抄」ともいわれております。私たちが成仏するためには、信心修行において、なにが肝要なのかを指導された重要な御書であります。

曾谷殿というのは、曾谷教信のことで、法名を法蓮といい、下総国（今の千葉県）に住んでいた武士であります。富木常忍や大田乗明とともに日蓮大聖人のもとで強盛な信者として戦ってきたひとりであります。

夫れ法華経第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二

「第一方便品に云く」とは、第一の巻、方便品第二にいわく、という意味です。法華経は八巻に分かれていますから、その第一です。

「諸仏の智慧は甚深無量なり」と説かれている。ひとくちにいうならば「諸仏智慧甚深無量」とは、大御本尊の智慧は甚深無量である。日蓮大聖人のお智慧は甚深無量である、と拝するのであります。

その方便品の経文を、天台大師が釈して、法華文句にいわく「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量」――と。

「境淵無辺なる故に甚深云云」ということは、時間的に約すならば、永遠であり、空間的に論ずるならば、宇宙の広さそれ自体である、これが御本尊の智慧であり、日蓮大聖人の智慧である、このように天台も釈しているというのです。

そして、大聖人は「仏になる道は豈境智の二法にあらずや」と結論づけられているのです。

南無妙法蓮華経を境とするならば、日蓮大聖人が智になるのです。したがって、法本尊、人本尊、境智の二法の境智冥合の御当体が、三大秘法の御本尊になるわけです。

また、私ども信心する立場からいうならば、大御本尊が境です。私どもの信心が智になるのです。そして、境智冥合して仏になれると、こういう原理になります。

されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり

「万法の体」とは、あらゆる森羅万象の本源、本体のことで、その究極は南無妙法蓮華経です。これを境という。

智とは、妙法による智慧の働きです。その智慧の働きによって、万法の体がそのあるがままの姿で照らしあらわされることが、「自体顕照」になります。すなわち、妙法の智慧の光によって、宇宙の万物が南無妙法蓮華経と照らしあらわされるのです。したがって、智とは、日蓮大聖人と拝してもよろしいわけです。また「万法の体」が本尊、境です。

またこんどは逆に、御本尊の智によって、信心する私どもの生活、生命活動が境になり、自体顕照の姿になるのです。

すなわち、最高の生命力の本源である御本尊に照らされ、おのおのの境遇にあって、おのおのの使命にたって、有意義にすこしのムダもなく、最高度の人生を生ききっていける、そういう生命活動、生活活動を、自体顕照の姿ともいえると思うのです。

本尊とは根本尊敬、功徳聚とも輪円具足とも説かれておりますけれども、根本尊敬の、根本の「本」、そして尊敬の「尊」で、「本尊」といわれます。

その本源の当体を一幅の御本尊と顕された、当体として顕されたのは、日蓮大聖人だけなのです。

それが日蓮大聖人の出世の本懐です。

この大宇宙の現象世界をなすあらゆる森羅万象、あらゆる生死を起こし、滅せしめていく法則、それが妙法であり、それを具体的に、現実に御図顕してくださったのが御本尊です。ですから、あらゆるものの本源、根本の当体、それが本尊なのです。

その御本尊に南無していけば、大宇宙のリズムに合致して生きいきとした生活を送ることができるし、さらに永遠の生命を感得できるわけですから、願いはかなうし、病気が治ったり、商売がよくなったりすることは、その過程として、当然の道理です。

而るに境の淵ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながるる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり

「境の淵ほとりなく・ふかき時は」、すなわち御本尊はそれ自体、宇宙大の広さと深さがあり、際限がないがゆえに、「智慧の水ながるる事つつがなし」、すなわち智恵の水、御本尊の力、働きというものは、とどこおることはないのです。

私たちの生命に約していえば、私たちの生命もまた、本来、宇宙大の妙法の当体であるという境であり、御本尊に南無することによってそれを覚知し、仏界の境に合致した智をあらわしたとき、即身

成仏するのです。ゆえに日寛上人は、御本尊を境、題目を唱えることが智、御本尊に唱題する姿を境智冥合であると教えられています。

われわれは、すぐ人生に行き詰まりましたとか、やれ商売に行き詰まってしまったとか、そういうグチをこぼしますけれども、日蓮大聖人の智水は永遠に行き詰まりはありません。

したがって、日蓮大聖人即御本尊を私どもは受持しているのですから、境智冥合して等しくなるのですから、ほんとうは行き詰まるわけはないのです。ですから、行き詰まってしょうがないという人は、まだ信心が弱いと、自身を反省してください。「御本尊には行き詰まりがない」とここにおしたためなのですから。

また、よく「こんなに信心しても功徳が少ない」「すこしも変わらない」という人がおりますけれども、それはウソです。それは御本尊と境智冥合していない証拠です。

また、御本尊を受持しきって信心に励んでいけば、人生を満喫し、永遠の生命、幸福を感得することも、この御文を拝して事実です。絶対の確信をもって、大聖人はいいきられています。どうか皆さん方も、なにがあっても御本尊を根本として、信心強盛にがんばっていきましょう。

法華以前の経は境智・各別にして而も権教方便なるが故に成仏せず、今法華経にして境智一如なる間・開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり、此の内証に声聞・辟支仏更に及ばざる

ところを次下に一切声聞辟支仏所不能知と説かるるなり

爾前経は境智冥合ではなく、境智各別である。空・仮・中の三諦を説ききってない権教方便の教えである。したがって、成仏しない、幸福になることはできない、と断じていらっしゃるのです。

今、法華経においては、別しては三大秘法の御本尊のみが「境智一如」である。

そもそも方便品に説かれているように、仏の出世の目的は、「開示悟入の四仏知見」にある。すなわち衆生をして仏知見を開かしめんと欲し、または仏知見を示し、仏知見を悟らしめ、仏知見の道に入らしむ――これが仏の目的である。

開とは信心の異名です。信心をもって南無妙法蓮華経と唱えることが、仏知見をわが生命に開くことになる（開仏知見）。そうしたとき、仏は、その衆生の生命が妙法の当体であることを示し（示仏知見）、現実の自分の世界を常寂光土と悟り、みずからも即身成仏できると確信するのです（悟仏知見）。そのときこそ、仏界に照らされ、いかなる縁にも紛動されない人生になる（入仏知見）ことができるのです。

したがって、私たちが御本尊に題目を唱える信心があってはじめて四仏知見を開示悟入し、成仏することができるのです。

「声聞・辟支仏」とは、声聞、縁覚の二乗であります。「内証」とは南無妙法蓮華経です。

方便品に「諸仏の智慧は甚深無量なり」とあり、その次下に「一切声聞辟支仏の知ること能わざる所なり」とあるのは、いっさいの声聞、縁覚は、仏の内証である妙法蓮華経のこの大仏法を、とうて

い知ることができないというのです。

ですから、いまもって学者や評論家など、指導階層といわれる人々が、日蓮大聖人の三大秘法の仏法、一念三千の理法を知るわけがないのも当然です。知らないのに批判していること自体、たいへん残念であるといわざるをえません。

この妙法蓮華経といい、また一念三千といい、境智の二法といい、境智冥合といい、ぜんぶ同じことなのであります。境智冥合しないところに不幸があるのです。

資本家も政治家も、労働者も、全人類が等しく願う幸福と平和は、日蓮大聖人の仏法と境智冥合するならば、すみやかに仏国土の確立ができると、このように私は確信するしだいであります。

> 此の境智の二法は何物ぞ但南無妙法蓮華経の五字なり、此の五字を地涌の大士を召し出して結要付属せしめ給う是を本化付属の法門とは云うなり

この「境智の二法」とは、いままでの講義でもおわかりのように、結局は境も智もともに、南無妙法蓮華経のことであるというのです。

この妙法蓮華経の五字を「地涌の大士」――これは地涌の菩薩の上首である上行菩薩です――を召しいだして「結要付属」をした。これを「本化付属の法門」というのである。

すなわち、迹化の付嘱は総付嘱といわれ、法華経嘱累品で行われ、これは三摩の付嘱ともいわれております。それに対して本化の付嘱は、これは別付嘱といわれ、神力品です。これは皆さん方もよくおわかりであると思います。「如来一切の所有の法」「如来一切の自在の神力」「如来一切の秘要の蔵」「如来一切の甚深の事」――この四句の要法をもって、上行菩薩に付嘱をしたのです。これは三大秘法の付嘱を意味しております。

然るに上行菩薩等・末法の始の五百年に出生して此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり経文赫赫たり明明たり誰か是を論ぜん、日蓮は其の人にも非ず又御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり、既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う是れ智慧の義なり、釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む

「上行菩薩等」とは、上行、それから無辺行、浄行、安立行の四菩薩をさす意味で、上行等とおおせになったわけであろうと思いますが、別しては上首の上行菩薩です。

上行菩薩が「末法の始の五百年」に出現して「此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべし」と。この境智の二法たる五字とは「南無妙法蓮華経」と拝します。

法華経薬王品には「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなけん」と、また勧発品にも「如来の滅後に於いて、閻浮提の内に広く流布せしめて、断絶せざらしめん」とあります。このように五濁悪世の末法において、上行菩薩が南無妙法蓮華経を流布することは、経文に赫々とでている、だれが疑う必要があろうかというのです。

「日蓮は其の人にも非ず」――日蓮大聖人は、その妙法蓮華経を弘める人ではないのだが、これは御謙遜のお立場でこのようにいわれています。

「御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり」、また「然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む」ということは、内証では日蓮大聖人が上行菩薩であり、さらには御本仏であるということを確信していらっしゃることになります。

いまだかつてだれびともなしえなかったことを、大聖人がなされたことは、厳然たる事実です。御自身の実践の姿をもって実証されているのです。

上行菩薩が釈迦如来より妙法蓮華経を相伝されて、末代悪世の枯れた衆生に、不幸の衆生に、この妙法蓮華経を流す、弘めてあげる、これが「智慧の義」というのである、というのです。これはあくまでも外用の立場で論じているわけです。

日蓮大聖人は、御内証は「久遠元初の自受用報身如来再誕日蓮」です。「久遠元初自受用報身如来垂迹上行」です。その再誕の日蓮です。ゆえに、釈尊から「妙法の智水」をうけたとなっていますが、大聖人はもともと御自身が「妙法の智水」をおもちなのです。釈尊といえども南無妙法蓮華経に

よって仏になったのです。

今、私たちもまた、大聖人の遺された偉大な御本尊を持つことによって、わが生命にゆたかな知恵がわき、うるおいに満ちた幸せな人生を送ることができるのです。

又是には総別の二義あり総別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん

「総別の二義」です。簡単にいえば、総とは全体的、一般的な意義であり、別とはそのなかに含まれる特別、肝要の意義です。

総別の二義を少しでもたがえるならば、成仏できない。ここは大事なところです。

総じては、本化地涌の菩薩に仏法をゆずった、しかし別しては、上行おひとり、すなわち日蓮大聖人にゆずられたと、こう読まないとまちがいを起こすのです。

すべてこうなるわけです。たとえていえば、総じては一切衆生は仏なり、別しては日蓮大聖人おひとりです。総別の二義をわきまえないと「日蓮大聖人は一切衆生は仏なりとおっしゃっている。だから自分は仏である。信仰など必要ない」と、こういうふうになってしまうのです。

私たちの信心に約していえば、総じては、あくまでぜんぶ御本尊の子供である。だが、別しては、折伏行に励み、広宣流布に進んだ人が、まことの弟子である。また総じては、御本尊を持った者に

は、みな功徳がある。別しては、日蓮大聖人のおおせどおりに信心しきったものだけに功徳がある、成仏できる。こういうことになるでしょう。

その総別の二義をたがえるということは、つまり日蓮大聖人、即御本尊が成仏の根源であることを知らないからであり、それで成仏することができないのです。仏法といえば、総じていえば、「一切法皆これ仏法なり」で、ぜんぶ仏法ではある。しかし別しては、日蓮正宗以外に仏法は断じてない。こうなります。

例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・薬師に遇て成仏せず譬えば大海の水を家内へくみ来らんには家内の者皆縁をふるべきなり、然れども汲み来るところの大海の一滴を閣きて又他方の大海の水を求めん事は大僻案なり大愚癡なり

三千塵点劫における大通智勝仏の十六番目の王子、これが過去世の釈尊であります。そのときこの釈迦如来に下種をされたのが、今日の声聞です。今日というのはインドの釈尊の在世です。それらの声聞は、阿弥陀如来や薬師如来にあっても成仏することはできない。釈迦如来に下種された人は、あくまでインド応誕の釈尊にあって、はじめて成仏するものであるというのです。

あくまでも釈尊に下種をされた衆生は、釈尊によって仏になるのであるということです。他の仏、

菩薩にあっても、絶対に成仏することはできない。大御本尊にお目にかかった私どもは、当然、大御本尊を受持しきって仏になるのです。ほかの鬼子母神や、立正佼成会や霊友会に行っても、仏になれようはずがないというのです。

また、この末法の衆生というのは、久遠元初の自受用報身如来に成仏の本種をただちに下種されなければ成仏はできません。

日本の国にある世界最高の大仏法こそ、その下種益の仏法である。この日本の大仏法によって、日本の人々も、全世界の人々も利益し、救うことができるのです。

いまの指導者に、この御文を目をあけて読みなさいといいたいのです。そして日本の国に七百年のあいだ、世界最高の仏法があることに気がつかないで、認識もせずして、そういう指導者が表にたって日本の国を指導しているから、いくらたっても日本の国はよくならないのです。

一日もはやく、皆さん方が成長して、世界的な指導者になっていただかなければ、世界の平和は絶対にないと、こういう確信で進んでください。

法華経の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなるべし

「根源の師」とは、日蓮大聖人です。また人法一箇の御本尊です。日蓮大聖人は、一往、念仏や禅宗や真言宗等を打ち破ろうとなされて、当時の人々の心を、釈尊へ釈尊へ、法華経へ法華経へと、もどしていらっしゃるのです。

一度、釈尊へ、法華経へともどってみれば、それがぜんぶ末法の予言書であることがわかるではないか。上行菩薩の出現のときではないか。上行菩薩の出現といえば、日蓮大聖人しかいないではないか。こういう論理で説かれているわけです。

現在、釈尊の予言どおり、そして大聖人の御指導どおり、根源の師を忘れず信心修行に励んでいるのは、われわれしかないのです。

「輪廻生死のわざはい」とは、永久に不幸になるということです。御本尊を忘れ、正しい仏法を忘れ、日蓮大聖人を忘れるならば、個人も国も、かならず永久に不幸になるのです。

> 但し師なりとも誤ある者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間・仏法の道理によるべきなり

師であっても、師匠であっても、誤りのある師匠を捨てるのは当然です。日蓮大聖人は正しい師匠です。

しかし、師匠に細かいところで誤りがあっても、捨てない場合もあります。

この点については、「世間・仏法の道理によるべきなり」、世間、仏法の道理によって判断していきなさいというのです。

世間でも悪い師匠は捨てるべきである。よい師匠はもたなくてはいけない。仏法も同じである。まちがった時代不相応の、機根不相応の法を説いている師匠は捨てなさい。その時代の仏さまの仏法、そしてまた、それを説く師匠を求めなさい、たもちなさいというのです。

世間の例をみた場合には、音楽の勉強をしようと志したときには、音楽の師匠につくべきであります。法律の先生についてもなにもなりません。

成仏する道も同じです。末法の御本仏である日蓮大聖人を師匠にしないで、邪宗教の僧を師匠にしたりしていくことはまちがいであると、こういう意味なのです。

末世の僧等は仏法の道理をば・しらずして我慢に著して師をいやしみ檀那をへつらふなり、但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ

末法の日蓮正宗以外の僧は、仏法の道理を知らないというのです。折伏してみておどろくように、いまの邪宗教の僧に、仏法の道理がわかるはずがないのです。日蓮大聖人は、他宗の僧たちを、仏法

の道理を知らないにもかかわらず増上慢であると、七百年前に断言していらっしゃいます。

「我慢に著して師をいやしみ」――そうした僧たちは、我をたのみ、おごるあまり、師を軽んじているのです。したがって、釈尊のいうことをきかない、また天台大師のいうことも、伝教大師のいうこともきかない、さらに末法の御本仏である日蓮大聖人のいうことをもきかないのです。

それであって、「檀那をへつらふ」、信徒のきげんをとるのです。

「但正直にして少欲知足」――これが真実の僧である。日蓮正宗の御僧侶方であります。日蓮正宗の御僧侶だけは、仏法の道理を知っていらっしゃるのです。日蓮正宗の御僧侶は少欲知足であります。そしてまた、日蓮大聖人のおおせのとおりの真実の僧になるのです。

文句の一に云く「既に未だ真を発さざれば第一義天に慙じ諸の聖人に愧ず即是れ有羞の僧なり
観慧若し発するは即真実の僧なり」云云

文句にいわく「既に未だ真を発さざれば」――すでに真実の仏法を求めなければ、正しい仏法を求め、正しい信心をしなければ、「第一義天に慙じ」――ひとくちにいえば、成仏できないということです。「第一義天」というのは、仏菩薩の所持する中道の妙義をいうのです。

「諸の聖人に愧ず」――仏さまに愧ず、三世十方の仏にも笑われるというのです。

そのことを真実の仏法を求めるバネにしていくことができるものは、「有羞の僧」である。求めきらなければたいへんだという心がけがあるから、恥を知っている僧であるというのです。日蓮正宗を除いては、いまの宗教界は、恥を知らない僧ばかりです。感情、偏見、我執、名聞名利、打算の僧ばかりです。有羞の僧ではないのです。

日蓮大聖人の時代においては、他宗の僧でも、日蓮大聖人と佐渡の国で法論して、日蓮大聖人に負けると、その場で数珠を切って弟子になっています。そういうことは、多々あったわけです。

いま、いくら折伏をしようが、議論をしようが、道理正しい仏法に歯がたたなくなっても、それでも感情だけ、我執だけであって「自分がまちがっていた。これからは正しい仏法を求めよう」という、こういう僧は絶対におりません。また、そういう人々も少ないわけです。

「観慧若し発するは即真実の僧なり」――正しい仏法を求め、正しい仏法を信ずる人は、真実の僧である。「観慧」とは、正しい仏法を信心することをいいます。

涅槃経に云く「若し善比丘あって法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し挙処せんは是れ我が弟子真の声聞なり」云云、此の文の中に見壊法者の見と置不呵責の置とを能く能く心腑に染む可きなり

これは涅槃経の文です。釈尊もこのように戒めているわけです。また、日蓮大聖人も御遺命されています。折伏をする以外にない。折伏をせよ、というおおせなのです。これ以外に人々を幸せにする道もないし、宗教革命もないし、個人の成仏もありえないと、こういうのです。

「呵責し駈遣し挙処せずんば」

「呵責」とは相手の非を呵り責めること、「駈遣」とは対治すること、「挙処」とは罪をあげて糾明し、処断することで、ぜんぶ折伏になります。

正法誹謗の者をみていながら折伏しなければ、その人は「仏法の中の怨なり」と。

あまり折伏などしないほうが人にはきらわれないし、人格者みたいに思われてかっこうがつくようだけれども、その人は仏法のなかの怨である、敵である、と厳しく断言されています。そういう人は成仏できるわけがありません。

その反対に「若し能く駈遣し呵責し挙処」する者は「是れ我が弟子真の声聞なり」——と。

涅槃経等においては声聞が対告衆でありましたから、真の声聞なりとおおせなのです。

私どもは日夜、折伏行に励んでいるのですから、真の弟子です。ぜんぶ等しく、日蓮大聖人のおおせどおりに、成仏できないわけは絶対にない、と私は確信します。

「見壊法者の見」——法をやぶる者を見ての、この「見」、それから「置不呵責」——置いて呵責せずの「置」、この字をばよくよく心腑にそめなさい。絶対に謗法をみたならば、そのままおいておかないという、その自覚をもって信心修行をしなさい、とこうおおせなのです。

法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄に堕ちん」云云

大御本尊を誹謗し、日蓮大聖人の仏法を批判する者をみて、そのまま放置しておくならば、師も檀那もともに地獄に堕ちるというのです。

天台大師の師匠である南岳大師も「諸の悪人と俱に地獄に堕ちん」と述べています。

私たちはただ、日蓮大聖人にほめていただければいいのだし、日蓮大聖人にほめていただくことは、三世十方の仏菩薩も賛嘆してくれることでもあるのだし、また、多くの同志がみんな知ってくれているのですから、人々がすこしぐらい悪口をいおうとも、新聞などですこしぐらい批判されようとも、勇ましく、忍耐強く、しかも楽しく、日本国中の人々を、ひとりももれなく折伏しきるとの決意をもって戦いましょう。日本が終わったら、それでいいというわけではありません。全世界もあるのです。

御本尊は宇宙大です。地球の一つぐらいはちっぽけなものです。地球をのんでいくような大きい境涯をもってがんばってまいりましょう。

謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし、何に法華経を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒気深入・失本心故は是なり

「謗法を責めずして」云云。

折伏をしないで仏になるということは、これは火のなかに水を求め、水のなかに火を求めるようなものである。折伏しなければ、絶対に成仏できないというのです。

創価学会は折伏の団体です。創価学会から「折伏」の二字をとったならば、もうなにもないのです。世間では折伏が強すぎるとか、こわいとか、なにやかやいいますけれども、釈尊も折伏せよ、日蓮大聖人も折伏をせよ、とおおせなのです。折伏すれば絶対に成仏できるのです。

「何に法華経を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし」

御本尊を持って、強盛に信じているようであっても、謗法がわずかでもあるならば、地獄に堕ちるという御文です。

たとえば、大量のうるしがあって、そのなかに蟹の足をわずかでも入れてしまうと、うるしの効力がなくなってしまう。それと同じ道理だというのです。また、うるしにかぶれた場合には、蟹をつけるとかぶれがなおるといわれております。

「毒気深入・失本心故は是なり」――これは寿量品の御文です。「毒気深く入って、本心を失えるが故に」と読みます。謗法の害毒が体内に深く入って本心を失ってしまうために、正法（御本尊）を信じようとしないことをさします。

ここで大事なことは「十四謗法」という謗法があるということです。その十四の謗法のなかでも、御本尊を持って、まじめに信心していくならば、初めから十の謗法はまぬかれます。不信謗法とか、不解の謗法とか、それは皆さん方もごぞんじであろうと思います。

しかし、最後の四つの謗法には、とくに気をつけなければなりません。この謗法があるかないかで、功徳がでるか、また罰を受けるか、生活がうまくいかないとかが決まってしまうのです。

この四つの謗法は、まず「軽善謗法」――御本尊を持っている人をバカにすることです。

それから「憎善謗法」――御本尊を持っている人を憎むということです。御本尊を持っている人を憎みながら題目をあげてごらんなさい、絶対に罰を受けます。

それから「嫉善謗法」――怨嫉です。御本尊を持っている人を怨嫉するのが嫉善謗法です。

それから「恨善謗法」――恨むことです。これはもうだめです、地獄です。

以上、四謗法は、いちばんこわいことですから、この四つだけはおこさないようにしましょう。謗法をおかしている人は、なんとなく生命力がない。なんとなくいやな顔をしています。なんとなくさえない。それから、なんとなく生活も暗いのです。これが事実の姿です。

そういうような気持ちになりかかったならば、それを乗り越えて題目をあげるのです。これを乗り

越えて折伏をし、それを乗り越えて御書を読み、それを乗り越えて先輩に指導を求めていくことが大切なのです。どんどん消していけるのです。

ですから、強い強い信心にたてば、そういうことは、しぜんに消えているのです。

経に云く「在在諸の仏土に常に師と俱に生ぜん」又云く「若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん」

法華経化城喩品にいわく「在在諸の仏土に常に師と俱に生ぜん」――と。

師とは、御本尊です。永遠に大御本尊とともに生きていくことができる。大御本尊のおわしますところに、生ずることができるとのおおせであります。

「又云く」――これは法師品です。

「若し法師に親近せば」とは日蓮大聖人のことです。日蓮大聖人即御本尊ですから、御本尊に題目を唱えていくならば「菩薩の道を得ん」、正しい菩薩の修行をすることができるというのです。

「是の師」とは御本尊です。日蓮大聖人です。御本尊に随順して信・行・学に励むならば、「恒沙の仏を見たてまつる」ということは、成仏のことです。成仏することができるというのです。

釈に云く「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」又云く「初め此の仏菩薩に従って結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」云云、返す返すも本従たがへずして成仏せしめ給うべし

「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」

この釈は、天台大師の法華玄義の文です。「此の仏に従って」――仏とは日蓮大聖人です。また御本尊です。御本尊によって「初めて道心を発し」、また、御本尊によって「不退地に住す」――すなわち成仏する。絶対の幸福をえられるということです。

御本尊を離れて、途中どんなところへ行っても、幸福にはなれない。もっといい方法はないものかといって退転した人が、さんざん苦労したあげくに、やっぱり信心するしかないと、また御本尊にもどってくる姿があるでしょう。そのことをいうのです。ですから、初めから終わりまで御本尊を受持しきっていくならば、かならず成仏の境界をうることができるのです。

又云く「初め此の仏菩薩に従って結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」――と。

これは、天台大師の法華文句の文です。ぜんぶ大事な信心のあり方をいっているのです。釈尊も天台も、このように示されているではないか、幸せになる道は、道理はこうなのだよ、と繰り返しくりかえし、おおせになっていらっしゃるのです。

釈尊の仏法の場合には、釈尊に結縁して、釈尊によって仏になるのです。また天台大師の場合には、天台大師によって仏になるのです。途中どこへいっても仏になりようはないのです。ほかをいくら探しても、それはまちがいなのです。いまの日本の国は、宗教界が闇のようなものですから、実際問題、一般の人々は、どこへどう求めていっていいのかわからないのです。

ゆえに「返す返すも本従たがへずして成仏せしめ給うべし」と念をおしていらっしゃるのです。

成仏のカギは「本従」をたがえないこと、つまり末法の一切衆生の成仏のための「本従の師」こそ、大聖人であると知った私どもが、どうしても日蓮大聖人のことを、御本尊のことを教える以外に道がないのです。私たちの使命は大きいのです。私たちの活躍は如来の使いなのです。その如来の使いをしているのですから、三世十方の仏菩薩、諸天善神が守らないわけはありません。

釈尊は一切衆生の本従の師にて而も主親の徳を備へ給う

この「釈尊」は、一往は、ここではインド応誕の釈尊のことをさしますけれども、釈尊といっても六種類あるのです。蔵教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊、法華経迹門の釈尊、本門文上の釈尊、本門文底の釈尊です。末法今時においては、再往は「文底の釈尊」すなわち日蓮大聖人と拝すべきです。

この文底の釈尊は、私たち一切衆生の「本従の師」であり、「主親の徳」をそなえた御本仏である、

こうおおせです。主、師、親の三徳を明かしていらっしゃるわけです。

日蓮大聖人が、私どもの師匠です。永遠についていってまちがいのない師匠です。この三世にわたる根本の師匠にお会いできたゆえに、私どもはいちばん幸せなのです。

末法の衆生は、貪、瞋、癡、慢、疑という煩悩におおわれている。貪欲で、そしてすぐにおこり、おろかである。そのうえ慢心が強い。それであって疑い深いのです。

そうした人々を、そして社会を救済できるのは、絶対に日蓮大聖人の仏法しかないのです。

此法門を日蓮申す故に忠言耳に逆う道理なるが故に流罪せられ命にも及びしなり、然どもいまだこりず候法華経は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如くなり、若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく候、恐恐謹言。

建治二年丙子八月三日　　日蓮花押

曾谷殿

「此法門を……及びしなり」、これはこのままでいいでしょう。

「然どもいまだこりず候」――日蓮大聖人は小難数を知らず、大難四度であっても「こりず候」とおおせです。これは建治二年のお手紙でありますから、佐渡の国から身延へおはいりになっていらっし

るのです。でも「こりず候」です。

日蓮正宗創価学会も草創期より迫害の歴史でありました。皆さん方も批判をされきってきた闘争の歴史であると思います。だが、個人個人にしても、学会としても、どこまでもこの御文を拝して「いまだこりず候」と、この精神でいきましょう。

わずかこの一文でありますけれども、日蓮大聖人が「こりず候」とおおせになった御金言のとおり、生涯、弟子である私どもも、どんなつらいことがあっても、強い団結をして、それでにっこり笑って、「いまだこりず候」と、信心第一でまっすぐに進んでいきたいものです。

きょうはこれだけ覚えればいいのです。これが「成仏用心抄」の要です。

「法華経は種の如く」――妙法蓮華経は、成仏の種です。絶対に幸福になれる種です。「仏はうへての如く」、もったいない話ですね。「衆生は田の如くなり」――衆生は田です。

すなわち、末法の御本仏日蓮大聖人は、衆生の生命という田に、妙法の種をうえられます。この種を芽生えさせ、育て、実らせていくのは衆生です。せっかく正しい種をうえてもらいながら、育てる方法をまちがえたり、育てる努力を怠ったりして、腐らせてしまったならば実りません。成仏はできないということです。

今、私どもが如来の使いとして、一生懸命、この一切衆生に教えて、うえているわけです。これは折伏です。

成仏ができる原理は、謗法を責めること、折伏です。そして、謗法、十四謗法のうち、とくに最後

の四つの謗法に気をつけなさい。さきほど申し上げましたとおりです。

「若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく候」

この日蓮大聖人おおせの義に従順しなければ、違えるならば、あとは日蓮は助けてあげないよ、そのとき後悔しても知りませんよ、とのおおせであります。

私どもは、日蓮大聖人のおおせどおりのことを実践し、指導しているのでありますから、かならず成仏し、幸福になることは、これはまちがいないのです。

どうか、強い信心の人もいるでしょうし、また後輩の人のなかには、弱い信心の人もいるかもしれませんけれども、この日蓮大聖人のお教えを根本として、全世界に向かって「私ほどの幸福者はいない」といいきれる一人ひとりになっていただきたいことを切願するしだいであります。

（昭和三十七年八月九日）

日々の教学

（ここに掲げる講義は、昭和五十二年七月から十月にかけて「聖教新聞」に掲載されたものです）

「報恩抄」

仏法の要諦は〝一人立つ〟精神

（御書全集三二八ページ十七行目～三二九ページ六行目
編年体御書　九二六ページ七行目～同ページ十四行目）

此の事いまだ・ひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二十五年が間一人も唱えず日蓮一人・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もをしまず唱うるなり

われわれの三世にわたる根本の師匠は、日蓮大聖人であります。釈尊滅後二千余年のあいだ、どんなに唱えたくとも、だれ一人、口にすることのできなかった南無妙法蓮華経の題目を、日蓮大聖人は、押し寄せるであろう迫害、中傷の嵐を覚悟のうえで、命を賭して説いてくださった。われわれは、この深恩を夢にも忘れることがあってはならないと思うのであります。

朝晩の勤行唱題は、われわれにとってごく普通のことのように生活のリズムとなっておりますが、

じつはこのことが、どれほど甚深の意義を秘めていることか——。二千年余の長きにわたって、人々が知ると知らざるとにかかわらず、生命の奥底で求めに求めてきた一点こそ、南無妙法蓮華経だったのであります。

生死の問題のように人間の幸、不幸を決める決定的な分岐点に立ったとき、この世の地位、財産、名誉等は、なんら役に立ちません。御書に「今日本国の高僧等も南無日蓮聖人ととなえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん」(御書全集二八七ページ)といわれているように、業苦の淵を垣間みた生命は、ひたすら南無妙法蓮華経を求めぬくのであります。

しかも御本尊に縁することのなかった生命は、求めて得られず、なにに「南無」してよいのか、すなわち、なにをよりどころにしてよいのかわからず、苦悩の海で、あてどのない航海を続けていかざるをえません。

ゆえに、大聖人は「彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし」(御書全集二六〇ページ)とおおせなのであります。「癩人」とは、この世の不幸の象徴でありましょう。「天台の座主」つまり世の中でいかに位人臣を極めようとも、南無妙法蓮華経と唱えることのできる大福運に比べればいかほどのこともない。したがって自分が、どんな恵まれない境涯にあろうとも、今、現実に題目を唱えることができるということは、確たる仏法の正道なのであります。

その現在の一瞬に、苦楽一如、善悪一如の大生命力を湧現させるためにこそ、大聖人は御本尊をしたためられたのであります。報恩感謝、これにすぎるものはありません。このことを、朝晩の唱題の

さい、深くかみしめることのできる日々でありたい。

つぎに「日蓮一人」ということについてふれておきたい。

これは「諸法実相抄」に「日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが」うんぬんとあるのと同様、本宗、学会永遠の指針である〝一人立つ精神〟〝一人が原点〟に通ずると拝せましょう。

尽未来際をうるおす清流が、大聖人御一人に源を発するように、いまや大河のごとく水かさを増しつつある私たちの運動も、もとはといえば、老齢の身を極寒の獄中に殉ぜられた初代会長牧口常三郎先生、その遺志を継いで国破れた山河に一人立たれた二代会長戸田城聖先生の戦いに発しているのであります。

広くこれを論ずれば、戦野がいかに多角化、重層化しようとも、その運動がどれだけ進展し価値を生んだかをはかる尺度は、それをとおして皆さん方一人ひとりがどれだけ境涯を開き、人間革命の実証を示すことができたかにつきるのであります。その一点をぬきにした運動というものは、どんなにはなばなしかろうと、広宣流布の名に値しない空転であるといっても過言ではない。

「声」とは生命感応の響き

さらに重要なことは「声もをしまず唱うるなり」との個所であります。「声仏事を為す」とおおせられているように、声というものはまことに不思議な力をもっている。

あの人の声を聞くとほんとうに気持ちがいい、さわやかだという人もあれば、声を聞いただけで、うんざりするような気分にさせられる場合もある。目は心の窓であるように、声こそわが生命の明暗をあやまたずに映しだすスクリーンであります。

ともかく、声には宮殿堂の奥深くより発する、力強い響きがなくてはならない。能破、撥破という言葉がありますが、たとえば友の誤りを、ときに厳しく指摘してあげなければならない場合もある。そのさい、自分の生命に友を思う一念が脈打っていれば、指導は梵音声にも似た力強い慈愛の響きとなって、友の生命に巣くう障魔を打ち破っていくにちがいない。これ能破であります。逆に、いらいらしたり、感情に走ったりした生命状態であれば、同じ言葉を発したとしても、相手の心に入るものではありません。撥破であり、残るものは感情的な対立やしこりだけであります。

竜口の法難のさいの大聖人のお振る舞いは、声の力用をあますところなく示したものと拝せます。権勢におごる平左衛門尉は、郎党数百人をひきつれて、松葉ケ谷の草庵へ大聖人を捕捉にやってくるのですが、これに対し大聖人は一歩も退くことなく、彼らを大音声で叱咤される。

――「日蓮・大高声を放ちて申すあらをもしろや平左衛門尉が・ものにくるうを見よ、とのばら但今日本国の柱をたをすと・よばはりしかば……」（御書全集九一二ページ）と。

おびただしい刀や弓をまえにして大聖人が臆するとは思いのほか、このようなすさまじい気迫にふれ、郎党どもの周章狼狽したようすが「種種御振舞御書」には、手にとるように描かれています。

もとより「大音声」「大高声」といっても、たんに声が大きいということだけではない。その人の

内なる生命の明暗が、外なる言語音声、挙措動作となって発現してくるさいの〝感応の響き〟が「大」なのであります。

したがって、ごく小人数の親しい語らいであっても、そこに生命の〝感応の響き〟さえあれば「大音声」「大高声」であるといってよい。極端にいえば、たとえ声なき言葉であっても、その振る舞いをとおして、同じ効果を発揮する場合さえあるかもしれない。要はどれだけ〝一人〟の生命の宝塔を開き、仏事を成就していけるかであります。

だからこそわれわれは、声を惜しんではならないのであります。限られた生涯を、尊い使命に生きるならば、この偉大な仏法を力のかぎり語り継いでいくことこそ、われらの本懐であります。

二十一世紀へ妙法の根を深く広く

例せば風に随って波の大小あり薪によって火の高下あり池に随って蓮の大小あり雨の大小は竜による根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながしと・いうこれなり

日蓮大聖人が一人立って妙法を唱えられたことが、いっさいの根源力となって、広宣流布をしていく原理を具体的な例をあげて、説いてくださっているわけであります。すなわち、風と波、薪と火、

池と蓮、竜と雨、根と枝、源と流れといった関係のうえから、わかりやすく教えておられます。

「根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながし」

なにごとも「根源」さえ磐石でありさえすれば、いっさいは栄えていくということであります。「根源」という言葉を分解すれば「根」と「源」になります。万事に根さえしっかりと地中の奥深く張っていれば、大樹に育っていくということであります。空をおおうような大木には、それ相応の根の張り方があります。

川の流れについても、その水源がどこに位置するかで、大河になるか小川に終わるかが決まってしまうのは当然です。たとえばナイル川ですが、その地中海にそそぐ河口から、はるか六千六百キロもさかのぼったルワンダに水源を見いだすことができます。

さらに「根ふかければ枝しげし」「源遠ければ流ながし」の両御文を、大聖人は同じ意味で使っておられますが、そこには若干のニュアンスの相違があるようです。「根ふかければ……」がヨコへの広がりを方向性としているのに対し、「源遠ければ……」はタテの流れの永遠性を意味しているといってよい。

この二つの原理は、現代のわれわれにとっても、じつに重要な機軸を示されていると拝せます。

第一に、あらゆる分野、あらゆる次元にわたって、地中深くそして広く、妙法の根を張っていかなければならないということであります。これなくして、大聖人の仏法を、人類の共有財産にしていくことはできない。皆さんはどうか、そのための根っこになっていただきたい。

第二に、妙法の流れを永遠たらしむるためには、崇高なる伝統と、そこにたたえられた満々たる草創の息吹を、つねに胸中に通わせていかなくてはならない。組織であれ、国であれ、伝統のないところほどもろいものはありません。時の流れのままにいつしか生命力を枯渇させ、老残の姿をさらしだしてしまうものであります。われわれは、史上数多くみられるそのような事例の轍を踏むようなことがあってはならない。それには、信・行・学の根本軌道を、厳しく継承していくことを第一義とすべきであります。

千里の道も一歩より始まる

周の代の七百年は文王の礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道によるなり

中国の古代国家・周の世が七百年も続き、秦の時代が、始祖の没後ほどなく滅亡の運命をたどったのはなぜか。それは周の文王、秦の始皇帝という、それぞれの建国の祖の振る舞いによることが明らかであるとおおせなのであります。

「十八史略」によれば、秦の始皇帝は、文化を破壊した専制暴君の典型であった。戦国時代、強大な軍事力をもち「虎狼の国」として恐れられていた秦は、他の六か国を占領し、天下統一を成し遂げ

る。秦王は、覇者にふさわしい名称を欲し、中国太古の名君といわれた三皇五帝を超えるものとして、三皇の「皇」と五帝の「帝」を合わせて「皇帝」と称した。しかもそれだけでは足りず、その上に「始」をつけ「始皇帝」とし、天下、人臣の始祖たることを僭称したというのであります。新秩序に徙おうとしなかった多くの学者を弾圧し、その著書を焼いた〝焚書坑儒〟事件などは、よく知られております。

これに対し周の時代が長く続いたのは、創業の文王の業績によるところが多いといわれております。文王については、名参謀・太公望との〝釣り〟にまつわる逸話などで有名ですが、その治世の実をたたえる話として、つぎのようなエピソードが伝えられている。――周の国に近い二つの国で、あるとき、土地争いが起こった。なかなか決着がつかず、周へ行って裁定を仰ごうとした。ところが一歩、周の領内に入ると農民があぜを譲りあい、年長者を大切にしているのに接し、二人はすっかり恥ずかしくなり、労せずして和解が成りたったというのであります。

もとより「十八史略」は、一つの史観にのっとって書かれたものであり、今日の目から見れば多くの異論もあるはずであります。その問題はさておき、大聖人は当時流布していた故事を例にとり、草創期の伝統というものが、いかに大きな力を発揮するかを述べられているのであります。

ともあれ、昔も今も、またわが国においても、他国においても、さらに大小を問わず、いかなる団体においても「源遠」をいかにして「長流」にしていくかが、最大の課題であることはまちがいない。

この一点において失敗するならば、いかに一時的に華やかであっても、それは一炊の夢のごとく、はたまた、うたかたのごとく儚いものとなってしまうものであります。

仏法の歴史においても、釈尊は十大弟子をつくって法を久住せしめようとした。また、付法蔵二十四人の人々が、つぎつぎと仏法の松明を伝持しながら、時代の昂然たる灯としてきたのであります。さらに、天台大師もまた、その仏法を、なんとか後世へ伝えていくことを念願し、章安、妙楽、そして日本の伝教等は、その精神の後継の人でありました。

日蓮大聖人もまた、末法万年尽未来際にまで流布すべき大法として、大御本尊を建立されたのであります。弟子たちに与えられた数多くのお手紙の行間からは、その未来久住、民衆救済の熱誠があふれでております。かならずやその文字が、後世の人々を触発し、人間仏法の規範、鏡となっていくであろうとの大確信の心情が、心に食い入ってくるのであります。

万代にわたる御本仏の慈悲

日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり、無間地獄の道をふさぎぬ

有名な御文です。私はこの文に接するたびに、日蓮大聖人の民衆にそそがれる大慈大悲を感じ、胸が熱くなってくる。この崇高な叫びを、世の指導者はなんと聞くか、と叫ばずにはおられません。

まず、この御文は、主師親の三徳をあらわされた文であります。「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」とは親の徳、「日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり」とは師の徳、「無間地獄の道をふさぎぬ」とは主の徳、と拝される。すなわち、日蓮大聖人が主・師・親の三徳具備の仏であると宣言された御文であります。

第一に、日蓮大聖人は「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と述べられている。「日蓮が慈悲曠大ならば」が人、「南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」が法をあらわすことはいうまでもありません。

日蓮大聖人は、学問や観念で人々を救われたのではない。慈悲という本源的な生命のうえから発する力をもって、人々の救済に向かわれたのであります。

されば「開目抄」には「日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし」（御書全集二〇二ページ）と説かれたのであります。

慈悲なきところに難はない。民衆を本源より救いきろうとする慈悲の力のまえには、これを妨げる三障四魔が紛然として競い起こるのが、仏法の原理であります。日蓮大聖人は「仏法は勝負なり」の道理によって、たびかさなる難を忍ばれ、大慈悲のやむにやまれぬ発露のままに、実践行に挺身され

たのであります。

「南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」とは、南無妙法蓮華経の法力が、慈悲という大聖人の人格に発する力によって尽未来際にまで流れ通うということであります。しょせん、この文は広宣流布の淵源が、日蓮大聖人の慈悲の振る舞いから始まったことを意味しているといってよい。

慈悲とは、仏法を根本にした崇高な人間の営為のなかに、にじみでてくる人間の光なのであります。法、法といっても、しょせんは、仏法を信ずる人間の営みのなかに流れていくことはまちがいない。

第二に「日本国の一切衆生の盲目」の「盲目」とは、これは肉眼をいうのではない。どんなによい肉眼をもっていても、生命の本源に暗く、人生に暗く、未来の光を感じない人はここでいう盲目なのであります。

日蓮大聖人の仏法は、たとえていえば暗闇をさまよう船を導く灯台であります。また、荒海を航行する船の羅針盤であります。方向性を失った生活、人生、社会はみじめこのうえもない。つねに未来を切り開く叡智の光の光源こそ、南無妙法蓮華経であることを、強く訴えておきたい。

また、ここには師弟の問題が論じられている。師弟こそ人間の生き方の究極であり、生命の盲目を開く師なき人は、人間として向上を失っていくのであります。

第三に「無間地獄の道をふさぎぬ」の「無間地獄」とは、人間の苦悩の極限をさすのであり、人間が人間らしさを失い、品位も尊厳も、芥のごとく踏みにじられていく塗炭の苦しみをいうのであります

す。その最たるものは戦争でありましょう。

ゆえに、無間地獄の道をふさぐということは、あらゆる苦悩の根源である、生命奥底の魔性を冥伏させることによって、三毒熾盛の根を断つことを意味している。そこに、人間がもっとも人間らしく生きることのできる平和、文化建設の方途が示されることは必然であります。

天台、伝教に超える功徳

> 此の功徳は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり、極楽百年の修行は穢土の一日の功徳に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか

「此の功徳は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり」

日蓮大聖人の、主・師・親の三徳を具備なされた三大秘法の仏法を流布しゆく功徳は、伝教、天台にも超過し、竜樹、迦葉にも勝れているとおおせであります。

迦葉、竜樹、天台、伝教がいまだ弘めなかった「大法」を弘通する者は、これらの人々の受けなかった「大功徳」を受けられるとおおせなのであります。まさに「法妙なるが故に人貴し」の原理であります。それは「人貴きが故に所尊し」となっていくことも必然である。

ここは、あくまでも日蓮大聖人の仏法、および御自身の功徳について述べられた御文です。そのことを前提としたうえで、私たち信徒の立場に約して拝するならば、われわれにとってまことにありがたいおおせであります。あの釈尊十大弟子の筆頭たる摩訶迦葉、かの〝大乗八宗の祖〟とされる竜樹を凌駕し、中国において小釈迦といわれた大聖哲・天台大師を超え、かつまた、日本の平安期の精神文化の基礎を築いた伝教大師に勝る、とのおおせである。

ここに、迦葉、竜樹を代表としてインドの先哲、天台大師を代表として中国の碩学、伝教大師を代表として日本の大宗教家をあげておられる。三国を網羅しているということは、当時の世界観に照らして全世界に通ずる意味をもっているのであります。すなわち、大御本尊を受持し、日蓮大聖人の仏法を信ずる人は、全世界の先哲や碩学よりもなお尊貴であることを訴えておられるのであります。

末法の大法・南無妙法蓮華経こそ宇宙本源のリズムの根源力であり、この妙法を唱えられる福運を、われわれは改めて肝に銘ずべきでありましょう。

またこれこそ、日蓮大聖人の仏法の骨髄の御教示であると拝することができる。なぜなら、天台、伝教等々これらの先哲は、かつて人々の崇拝の的であり、雲閣月卿をみるがごとき高貴な存在であった。それに対し、われらは無名の庶民である。しかし、それらの人々よりも、なお偉大な人間としての実践行動ができることを示されているからであります。

「極楽百年の修行は穢土の一日の功徳に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」――と。

「極楽百年の修行」とは、苦難のない、恵まれた環境での修行であるともいえる。これに対し「穢土」

とは、苦難重畳のなかでの人間革命の日々であります。安楽イスのなかにあるような生き方に、どうしてわが生命の電撃的な変革が可能となるでありましょうか。

汗と労苦のなかにのみ、人間の真実の価値は生ずるのであり、日蓮大聖人の仏法は、この現実との鋭い対決のなかに、その偉大なる昇華があることを説き示されたのであります。

「正像二千年の弘通……」について、これはまず第一に、日蓮大聖人の仏法が、釈尊の仏法よりいかに偉大であるかを、時に約して説法されたものであります。

時にかなった実践行動を

> 是れひとへに日蓮が智のかしこきには・あらず時のしからしむる耳

仏法流布における「時」の重要性を、鋭く明言された一節です。

当時、末法といえば、正像二千年が終わり、その延長として、暗いイメージをともなっていました。それに対し、日蓮大聖人は、末法という時代が、いかに光輝につつまれた時であるかを確信せられています。

さらに私は、この一句に万感を込めて、広宣流布の時を感ぜられている大聖人の御心境が胸に迫っ

てくるのであります。夕日のごとく地に落ちていく既成の釈尊の仏法――それに対し、旭日のごとく昇りゆく胸中の灼熱のエネルギーをもった大仏法、その対照はあまりにも鮮やかであったにちがいありません。

この一節から、大聖人は、一人の人間の偉大な智力よりも、時にかなった実践行動を展開する有智の民衆の力こそが偉大であることを教えられていると、私は拝するのであります。

つぎの文に「春は花さき秋は菓なる夏は・あたたかに冬は・つめたし時のしからしむるに有らずや」とお述べのように、仏法三千年の弘通を貫く主軸は「時」であったことを、天地自然の道理をあげて説かれています。

「撰時抄」の冒頭の有名な一句は「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」（御書全集二五六ページ）との御文であります。

「必ず先づ」とある。〝教、機、時、国、教法流布の先後〟という〝宗教の五綱〟の中核をなすものは「時」であり、ここにすべてが包摂されるといってよい。たとえば、機といっても民衆の鼓動はたえず時代精神を反映したものであり、時のなかにすべて含まれるのです。

だが「時のしからしむる耳」とのおおせを、ただ漫然と時を過ごしていれば、いつかは自然と広布の時がくるというように、受動的に固着化してとらえるのは、明らかに誤りであります。それは、身近な例でいえば、電気ガマのスイッチも入れず、時がくればご飯が炊けるであろうと、はかなく夢想しているようなものと変わりはない。ゆえにこの御文は、御本仏日蓮大聖人につらなり、地涌の門下

としての能動の誓いを込めて受け取らなければならない御金言と受けとめたいのであります。

時代を動かすものは、主義にあらず人間である――といった先人がいます。われわれもまた、一人の人間革命が日本の運命、世の宿命をも変えていくことを確信している。

日寛上人の撰時抄文段には「時を知るを以ての故に大法師と名づくと云云。文意に云く、時尅相応の道を知るを以ての故に大法師と名づくと云云。大法師とは能く法を説いて衆生を利する故なり」とあります。

時を知り、時尅相応の道を選びつつ、衆生を利する大法師の出現があって、初めて広宣流布への確実な歩みが開始されることを忘れてはならない。末法の初め、時代と民衆が無明の深き眠りについていたころ、御本仏日蓮大聖人は末法弘通の大法を建立された。その法性の慧火は七百年余の歳月を経て、いま仏法の旭日となり、地平を昇りはじめています。

総じて、時を知る――とは、人々が何を欲しているか、人情の機微を知ることも、人心の帰趨を知ることも含まれる。いかなる激浪をも乗り越え、機雷を回避しつつ、現実の舞台のなかでカジを取り、眼光鋭く本源を見ぬいて適切に処置をとる人でなければなりません。

ゆえにそれは、民衆救済という大責任に立ったときに、とりうる行動といえますし、そのときにこそ初めて、民衆の有智の団結の輪はつくられゆくのであります。

かつて、戸田先生は、広布を担いゆく丈夫に「いまはいかなる時かを凝視して」と呼びかけております。

いま皆さんの敢闘によって、学会は、いよいよ時を得て、民衆の文化と平和へ貢献しゆく道を、着実に歩んでおります。どうか今後とも、広宣流布のために、立派な指導者に育たれるようお願い申し上げます。

「法門申さるべき様の事」

脈打つ閻浮第一の大確信

（御書全集一二六八ページ三行目～同ページ十三行目
編年体御書三二九ページ三行目～同ページ十三行目）

この御書は、比叡遊学のため京都に上った三位房日行に与えられたとされるお手紙です。ある公家の持仏堂において説法したことが、〝面目〟をほどこしたと日蓮大聖人に報告したことに対し、厳しく叱責されたところです。

もとより僧の身である三位房に対する日蓮大聖人の御指南をうんぬんする立場ではありませんが、大聖人の御指南は広く僧俗一般に通ずる重要なものであると拝しますので、あえて感ずるままを述べさせていただきます。

この御文を拝して、日蓮大聖人の、仏法に対する御確信、また大仏法を奉ずる者の内証の深さ、高さ、かつまた大聖人の仏法がいかに気宇壮大な哲理であるかを、改めて痛感するのであります。

又御持仏堂にて法門申したりしが面目なんどかかれて候事・かへすがへす不思議にをぼへ候、
そのゆへは僧となりぬ其の上一閻浮提にありがたき法門なるべし

公家に召されて仏法を講じたのがたいへんな名誉であるとの三位房の文面に接して、大聖人はひじょうに残念がっていらっしゃいます。

三位房については、資料もほとんど残っていないため、不明な点が多く、この御抄の対告衆と「聖人御難事」等にでてくる人物とが同一人物かどうかについても異説がありますが、いちおう、ここでは同一人物として話をすすめます。

彼は京都遊学を許され、また桑ケ谷問答に活躍するなど学才に秀で、問答に巧みな、それだけ実力もあり、門下で重きをなしていた人物であった。ところが、一面、名聞名利の心が強く、臆病で、求道心が弱く、虚栄の心に支配されやすい人間であった。

「聖人御難事」には「をくびゃう物をぼへず・よくふかく・うたがい多き者」（御書全集一一九一ページ）と、その根底を見ぬかれ、どんなに仏法を教えても「ぬれるうるしに水をかけそらをきりたるやうに候ぞ」（同ページ）とあります。

法門への理解がいかに深く弁舌さわやかであろうとも、名聞の念厚く臆病で慢心が強ければ、成仏の道をふみはずしてしまう。この重大な一点を、三位房の例は後世の私どもに教えています。

大聖人はさらに、あなたは僧となったうえ、一閻浮提でもっとも偉大な法門を受持している立場ではないか、と諭されている。

ここで注目すべきは「一閻浮提にありがたき法門」との御文です。大聖人の仏法は、全世界随一、偉大な哲理と実践の宗教であることの大確信が躍如としております。

三位房は、おそらく公家のまえで説法して称賛されたことを、大聖人に報告してほめてもらいたかったにちがいない。しかし、案に相違して、大聖人から厳しい叱責をうけたのであった。三位房のなかにある名聞の心を、大聖人は感じられていたと十分考えられます。

大聖人はいつも、あらゆる弟子の傾向性を知り、なんとかほんものの人物に仕上げたいという一念に徹せられていた。ゆえに、その三位房の一言を逃すことはしなかった。面目をほどこしたという一言のなかに、三位房の根底を、御本仏は見てとられたにちがいありません。大聖人は、具体的事実から三位房の全体に流れる根性を打ち破られようとなされたのでありましょう。

こうした大聖人のお振る舞いのなかに、事に即して弟子を薫陶するとともに、さらに広く深く仏法を展開していく姿がうかがえるのであります。大聖人の仏法が、事の仏法であるといわれるゆえんが、ここにある。身近な行動、生活、振る舞い……そこに人間を見、仏法を展開していく大聖人の正道の生き方を、われらはけっして見逃してはならない。

なお僧とありますが、この御文の教示は、広く折伏弘教に励む仏法指導者を意味されていると拝すべきことは、御文の趣旨からいって当然であります。

大聖人の仏法は人類を救う永遠の宗教

設い等覚の菩薩なりとも・なにとかをもうべき、まして梵天・帝釈等は我等が親父・釈迦如来の御所領をあづかりて正法の僧をやしなうべき者につけられて候、毘沙門等は四天下の主此等が門まほり・又四州の王等は毘沙門天が所従なるべし、其の上日本秋津嶋は四州の輪王の所従にも及ばず・但嶋の長なるべし

この段は、日蓮大聖人の仏法が世界人類を救うべき、永遠の宗教であることを明かされたところであります。

すでに、私どもが拝する大御本尊を「一閻浮提総与の大御本尊」と申し上げるように、御本仏日蓮大聖人の大慈悲と南無妙法蓮華経の法力は、全世界の民を、未来永劫にわたってうるおしていくのであります。

たかだか、一国の民族を救済して事終わるような偏狭な仏法ではない。まして、一国の国教化を策して、権威や権力に安住するような宗教ではない。かつて、日蓮大聖人を国粋主義者に祭りあげたり、大聖人の仏法を鎮護国家の宗教ととらえようとする一部の人々があったが、それらの動きはむし

ろ、大聖人の仏法を狭く矮小化したものにすぎなかったのであります。

たとえば、日本に軍国主義が勃興しつつあったころ、ある他宗派からだした講義録では、この段の文中「但嶋の長なるべし、長なんどにつかへん者どもに」の部分と「上なんどかく上」の部分が抜けている。おそらく、当局から削除を要請されたのであろう。

削除された部分が、いかに当時の日本の国家主義的見地から、つごう悪い言葉であったかは明らかであります。この削除の事実自体、大聖人の仏法を狭く矮小化した好例であるとともに、逆に、大聖人の仏法の世界性を象徴しているといえるでありましょう。

それにつけても、鮮やかに思い出されるのは、初代会長牧口先生の激烈な戦いであります。牧口先生は軍国権力の狂乱の嵐のなかで、敢然と日蓮大聖人の仏法の正義を貫かれ、正義に殉じられたのであります。

この初代会長の壮烈無比な死身弘法の精神こそ、わが創価学会の永遠の魂であり、その精神を万代にまで継承していく責務が、私たちにはあるとつねづね思っております。

ましてや、いまだに国教化や国立戒壇などと唱える者もあるが、まさしくさきの大聖人仏法の矮小化の亜流にすぎないのであります。

この段の御文を率直に拝読したならば、日蓮大聖人の御境界の宇宙大の広さと崇高さに感嘆しない者がありましょうか。

京都の公家の持仏堂で説法したことを名誉にも誇りとも思っている三位房の偏狭さと、権威へのへ

つらいを、日蓮大聖人は、宇宙大のスケールから、じゅんじゅんとその非を説かれているのであります。

三位房がもった仏法は「一閻浮提にありがたき法門」である。すなわち全世界随一の仏法であると述べられ、この妙法をたもつ者の位がいかに尊貴であるかを教示されていくのであります。

「設い等覚の菩薩なりとも・なにとかをもうべき」――一閻浮提の仏法を受持した者は、仏の境界と等しき等覚の大菩薩といえども問題にならないほど高い位である、とのおおせであります。なぜなら、妙法は、三世十方の諸仏を成道させた根源の法だからであります。

つぎに「まして梵天・帝釈等は我等が親父・釈迦如来の御所領をあづかりて正法の僧をやしなうべき者につけられて候……毘沙門天が所従なるべし」とは、きわめて重要な意義をはらんだ御文であります。

まず「我等が親父・釈迦如来」とは、一往は、文上の釈尊でありますが、再往は、久遠元初の自受用報身如来をさすことはいうまでもありません。

一往の辺からいえば、梵天、帝釈や毘沙門等の四天王の諸天善神は、釈迦如来から、正法を弘める僧を供養するために、その所領を預かっているのだとおおせであります。ここに重大な意義がある。すなわち、妙法を受持し、弘通する人間を供養するためにこそ、梵天、帝釈、四天王の諸天が存在しているとのおおせであります。

そこには、人間を超越する神もなければ、人間から隔絶した絶対者もいない。まさに、人間仏法の

宣言と拝してよいでありましょう。一国の王、権力者、貴族などは、この梵天、帝釈の眷属(けんぞく)の眷属の、そのまた眷属にすぎないということであります。

再往の辺でいえば、全世界、地球全体が、本来、妙法の脈打つ寂光土であり、久遠元初の仏の常住の浄土であるということです。

「仏界は是れ尊極の衆生なり」(三重秘伝抄)とあるように、衆生の生命に真実の尊き輝きを発揮すること自体が、即仏なのであります。したがって、仏の世界とは、現代的にいえば、生命を至上(しじょう)とする世界ということであります。

そこにおいて、梵天、帝釈、四天王等は、すべて宇宙、自然、社会の秩序を守る働きにほかならない。すなわち、これらの善神は、妙法の脈打つ常住の寂光土を守護する働きなのであります。

それゆえ、これら善神が「正法の僧をやしなう」とは、宇宙のさまざまな働きが、妙法を受持し弘通する人の生命を守るように働くということであります。

しかも、その働きを起こさせるのは、法をたもつ一人ひとりの生命力であります。ゆえに、どこまでも人間が主役であることはいうまでもない。

ここに、私は、日蓮大聖人の仏法において、真実の人間自立の哲理が説かれているのをみるのであります。

また「其の上日本秋津嶋は四州の輪王の所従にも及ばず・但嶋の長なるべし」とは、つねに一閻浮提、全世界の民衆救済という広大な立場にたたれた日蓮大聖人が、どのように日本国の権力者をみら

れていたかを明らかにされた御文です。なんと雄大な視点でしょうか。私どもは、この大聖人の御境界を寸時も忘れずに、いつも大きく、ダイナミックに朗らかに、人生を闊歩していきたいものであります。

真の面目は御本仏の称賛

長なんどにつかへん者どもに召されたり上なんどかく上・面目なんど申すは・旁せんずるところ日蓮をいやしみてかけるか

三位房が「上」に召されて「面目」をほどこしたと手紙に書いてきた。日蓮大聖人は、公家等の社会的身分をもった人間をありがたがり、そのまえで仏法を講ずることを名誉と思っている三位房の姿勢を、厳しく叱られているのであります。

それは、一言でいえば、仏法を根本とすることを忘れ、社会的栄誉を根本としてしまっているからであります。御本仏大聖人の弟子であり、妙法をたもっていることこそ、最高の栄誉であります。「当体義抄」に「正・像二千年の国王・大臣よりも末法の非人は尊貴なり」（御書全集五一二ページ）とお示しのとおりであります。

その精神に立てば、法を説く相手の身分や地位などは問題ではない。一庶民に法を説くのも、高貴の人に法を説くのも、まったく同じであるというのが、日蓮大聖人の平等大慧の仏法であります。それを公家に説いたからといって「面目」をほどこしたと誇っているのは、まさに、日蓮大聖人の仏法の本意をゆがめるものであります。

いったい、われわれ仏法者にとって、真実の「面目」とはなにか——。私は、恩師の「青年訓」の末尾が思いだされてならない。「……愚人にほむらるるは、智者の恥辱なり。大聖にほむらるるは、一生の名誉なり。心して御本尊の馬前に、屍をさらさんことを」と。

表現は若干激しいですが、われらの生き方の「面目」を、ものの見事にいいきられている。まさに三位房は「愚人にほむらるる」をもって「面目」をほどこしたなどと取り違え、名聞名利の道に踏み込んでしまっているのであります。

日興上人が二十六箇条の「遺誡置文」に「学問未練にして名聞名利の大衆は予が末流に叶う可からざる事」としたためられているのも、こうした大聖人門下の違背の実例を目のあたりにされ、肺腑をえぐる思いで書かれたものでありましょう。

われら仏法者の「面目」とは「大聖にほむらるる」こと以外にありません。その意味でも、日蓮大聖人の門下であることをなによりの誇りとして、生涯を生ききっていただきたい。

思い起こされるのは、草創期の水滸会における恩師の指導であります。小説「人間革命」にも記しておいたことですが、一青年幹部の「故郷に錦を飾るとは」の質問に対して、恩師はつぎのように指

導された。「君たちは、社会的に成功し名士といわれるようになることが、錦を飾ることだと思ってはいないか。一流企業の社長になるとか、大学教授になるとか、大臣になるとか、一応は世間にとって錦かもしれない。しかし、そんな錦は、いつどうなるものかわからない」と——。そして学会の幹部となって、広宣流布に挺身していく姿こそ「最高にして永遠の錦」であることを、万感込めて訴えておられました。

なにも恩師は、世間の名声それ自体を悪いといっているのではない。社会の信用をかちえ、それが名声へとつながっていくことは、大切でさえあります。しかし、それが最高の目的であるとはき違えてしまうと、いつしか世間の風に侵され、名聞名利のとりことなって、ついに三位房の轍を踏む愚をおかしてしまうでありましょう。

御書にいわく「願くは『現世安穏・後生善処』の妙法を持つのみこそ只今生の名聞・後世の弄引なるべけれ」（御書全集四六七ページ）と。

すなわち、栄枯盛衰を常の法則とする人生において、生々世々にわが生命をかざり、福運の花を咲かせていくものは妙法以外にない、とのおおせなのであります。もし「名聞」というならば、この生命の勲章こそ、なにものをもってしても代えることのできない、真実の「名聞」なのであります。

またいわく「智者・学匠の身と為りても地獄に墜ちて何の詮か有るべき」（御書全集一三六七ページ）と。

いかに高き地位につき、名声をほしいままにしようと、生命自体が地獄の状態にあって、なんのための人生でありましょうか。どうか皆さん方は、一生において、なにが根本であり、なにが枝葉末節

の問題であるかを、鋭く見ぬいていっていただきたいのであります。

虚飾におぼれず、初心を忘るな

総じて日蓮が弟子は京にのぼりぬれば始はわすれぬやうにて後には天魔つきて物にくるうせう（狂少輔）房がごとし、わ（和）御房もそれてい（其体）になりて天のにくまれかほる（蒙）な

当時、京都と鎌倉は、西国と東国を代表する中心地で、政治的にはそれぞれ公武二大勢力の拠点であった。もっとも承久（じょうきゅう）の乱（承久三年＝一二二一年）以後は、武士が朝廷に代わって実質的な支配階級を形成しつつあり、時代の流れは鎌倉のほうにありました。ちなみに、日蓮大聖人の御聖誕はこの承久の乱の翌年です。

しかし、当時なお文化的には先進地域は西国であり、東国は後進の地域であった。朝廷の権威が失（しっ）墜（つい）したとはいえ、西国には貴族社会を背景に伝統を誇る文化があり、武家たちが京都の貴族文化へいだくあこがれは、相当のものだったようです。それは京都への劣等感といってもよく、自分たちの生活をいやしみ、教養のなさを恥じ、ただひたすら憧憬（しょうけい）をもって京都をながめていたようです。

三位房の〝京へのぼる〟という行為には、こういう時代背景があったのです。当時の、今でいえば

インテリに属する知識階級の精神の屈折した傾向を、日蓮大聖人は厳しく見ぬき、指導されているのです。

ちなみに「関東御成敗式目」（貞永式目）は、武家社会の初の成文法として画期的な意義をもつものですが、その制定のとき、北条泰時が「式目」といっしょに京都に送った手紙に、興味深い一節があります。

「……京辺には定めて物も知らぬ夷どもの書集めたる文とて笑はるる方も候はんずらん、憚り覚え候へ共……」

これは、京都のあたりでは、（貞永式目が）なにも知らない教養のない東国人（東夷）どもが書き集めた文章であると笑う人々もおられるであろう、それで気恥ずかしさも感じるのですが、という意味であります。時の権力者・泰時でさえ、京風へのこのような一種の遠慮をいだいていたのですから、一般の人々の考え方も想像がつくというものです。

京都の宮廷生活を経験した女性の目には、百貨輻輳の商業、港湾都市にもなった政都鎌倉も「袋の中に物を入れたるやうに住ひたる、あな物侘し」と映ったようです。

このような雰囲気をもつ京都に行くと、ともすると、それだけでなにか、さも自分の教養が深まったかのような錯覚に陥りやすいことを、大聖人は指摘されているわけであります。なんとなく華やかな虚栄と虚飾の渦巻く王朝文化に、軽薄に酔いしれる人間の浅はかさを心配されているわけです。

その京風に流されてしまった典型として少輔房の例をあげておられる。少輔房については、どうい

う人物か不明の点も多いのですが、やはり三位房と同じく、大聖人門下で上京し、軟風におかされ、一説によれば、伊豆の法難のころから退転し、ついに仏法違背の徒となり、やがて横死した人物のようです。

「天のにくまれかほるな」と、厳しくもあたたかく弟子の行く末を思ってお述べです。「天のにくまれ」とは、まさしくなにをやってもうまくいかない、悲運の人生となることです。仏法の軌道からはずれた生き方、それは、自分自身の生命を破壊することにもなるのです。わが人生の運行はリズムを失い、胸中の天座の星は光を失い、暗雲のなかに遠征をよぎなくされるのであります。

庶民とともに

のぼりていくばくもなきに実名をかうるでう物くるわし、定めてことばつき音なんども京なめりになりたるらん、ねずみがかわほりになりたるやうに・鳥にもあらずねずみにもあらず・田舎法師にもあらず京法師にもにず・せう房がやうになりぬとをぼゆ

「ネズミがコウモリになったように、ネズミとも、鳥ともつかずに」とは、まことに厳しい叱責のお言葉です。三位房の心には京へのぼり、京で生活するうちに、東国の田舎者だと笑われたくないとい

う一心が動いていたのでしょう。大聖人は、三位房のその報告のうらにあるこうした傾向性を鋭く見破られた。公家に説法して称賛をあび、得意気になって夢心地になり、表面ばかり変えることに腐心し、みずからを失っていく三位房を、大聖人は心からあわれみ、大慈悲をもって叱られているのです。

三位房が京にのぼって実名を隠岐の法皇の名である尊成と変えたのも、田舎出身を恥じ、それを隠す意図からだったのでしょう。その一瞬の心理の奥底をみてとられ、ズバリその心中にくさびを打たれているのです。

日蓮大聖人がこの御書を御述作の文永六年は、その前年に蒙古の牒状が到来し、国中が騒然とするなかで、鎌倉に弘教の足跡を力強くしるした年です。いわゆる十一通御書をもって公場対決を迫られるなど、いちだんと激しく立正安国の正義を訴えられていたときです。それだけに三位房の軟弱さを、よけい心配されたのでありましょう。

時代の動向も知らず、ただ一身に京都の貴族の称賛を求めて得意然としている三位房に、大聖人は、今はいかなる時か、今こそわが門下なら民衆救済のために立って戦え、との思いを込めておられると拝したい。

三位房、あなたは一閻浮提第一の法門をもっているではないか、苦悩の人々を救いゆく究極の使命を失うな、真実の門下ならば、今こそ誇りと襟度をもって立ちなさい――という大聖人の激しくもあたたかい烈々たる思いが、私には響いてきてならないのです。流行や華美に走り、仏法の革命的精神を喪失したならば、仏法者としてのみずからを放棄したにも等しいのです。

ネズミがコウモリになったように、ネズミとも鳥ともつかず、あっちへ泳ぎ、こっちへつき……といった確信のない不安定の人生ほど、醜いものはない。ともかく、信念の道を生きぬき、だれがなんといおうと、状況がどう変わろうと、われらはわれらの道を歩もうという確固たる姿勢が、最終的にその人の人生をかざるのです。

さて日蓮大聖人御自身は、伝道の場を鎌倉に定め、時代精神を呼吸しながら、民衆の真っただ中で弘教を進められました。南都北嶺の仏教には一顧だにもしなかった。なぜか——。大聖人の胸中には、つねに苦悩する民衆の姿があったのでしょう。だからこそ大聖人は、民衆仏法の巨大な一石を、当時の日本の社会的中心地・鎌倉の地に投じられたのです。

このことは、ほぼ同時代の法然が地方の豪族、栄西は神官、親鸞、道元が貴族の出身であったのに対し、大聖人が平凡な庶民の出であったことと無関係ではありません。

御自身で「民の家より出でて頭をそり……」(御書全集一四〇七ページ)といわれ、「日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり」(御書全集九五八ページ)と宣言されているように、大聖人は末法の仏法の樹立と流布に、まさしく東国の辺地から立ち、時代精神の沸騰する鎌倉でこそ、力強い弘教を展開されたのでありました。

それはまさしく「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり」(御書全集七六六ページ)との仏法の究極をひっさげつつ、自身の悟達の境地と確信そのままに、現実に苦悩する民衆救済のために戦われた偉大な法師のお姿だったのであります。まことに気骨あふれた、末法の大法流布という大感情と大確信に立った

崇高なるお姿がそこにある。まさしく庶民とともに歩む偉大なる世界をもつつむ御本仏のお姿ではないでしょうか。

民衆救済を忘れ、権威化し、あるいは貴族化した宗教は、やがて衰滅せざるをえないことは、歴史が鋭く証言しております。日蓮大聖人の仏法は、どこまでも民衆の苦悩を解決するため、民衆のなかに生きていく仏法です。ゆえに、今日においても、もしいたずらに権威の座に安住して、いつしか庶民を睥睨するようなことがあったならば、三位房ならずとも、いつのまにか〝現代の三位房〟とならざるをえないと恐れますし、大聖人のお叱りを受ける結果となるでありましょう。

〝地域主義〟の原理を明かす

言をば但いなかことばにてあるべし・なかなか・あしきやうにて有るなり、尊成とかけるは隠岐の法皇の御実名かかたがた不思議なるべし

田舎者と笑われたくない、もともとの京の人間のように思われたい。そのために使う言葉も〝京言葉〟になったであろう三位房に対し、大聖人は「言をば但いなかことばにてあるべし」と厳しく指摘されているわけであります。それは、東国の日蓮大聖人の弟子であると誇りをもっていけということ

とともに、虚栄の心を排し、どこまでも自分らしく、主体性をもって発言せよ、との御教示なのであります。

ここに、一個の人間の言葉遣いからも、鋭くその生命の傾向性を見ぬき、かつ細心の配慮をめぐらせながら、仏道修行の根本姿勢を明示されている大聖人の、慈愛あふれるお姿を改めて痛感せざるをえない。

しかし、日蓮大聖人は、三位房の言葉遣いを指摘されてはいるものの、それはけっして、当時の京の言語を否定されているのではない。絢爛にして華麗な都の貴族社会に心を奪われたであろう精神の退廃を、戒めておられるのであります。ともかく、われわれの広宣流布の運動とは、三位房のごとく、けっして虚栄を追うような世界ではない。どこまでも、この現実の大地に深く根を張り、現実の荒波と鋭く対決しながら進んでいく生々しい宿命転換の戦いこそが、広宣流布であることを、強く申し上げておきたい。

さて、三位房に対する日蓮大聖人の御指南をとおして、もう一点、重要な原理を学ぶことができる。それは〝いなか言葉〟という土俗性、すなわち庶民感情が息吹く地域をいかに大切にされ、また、その生活実感がただよう庶民の心をどれほどか慈しまれたかという、あくまでも地域主義に根ざした大聖人の仏法の大精神であります。

私はこの意味からも、今日、私どもの進めている地域主義を根本とした信仰活動の正しさを、ともどもに確認しておきたいのであります。

日蓮大聖人の御書を読むたびに、私はいつも庶民の哀歓の情に迫り、心のヒダまで知悉されている日蓮大聖人の、深き人間性に驚きを覚えるのであります。一人の老婦人が子供を亡くしたことに対するお手紙のなかに込められているものは、みずからが子供を亡くしたかのような気持ちが縷々と語られている。まさに大聖人は〝人間のなかに〟〝生命のなかに〟徹底して生きられたのであった。民衆をこよなく愛され、人間が可能なかぎりの生きる力を発揮することに真実の喜びを見いだされていたのであります。

あるときは、乱世に生きる武士の人生観に対し、生と死の問題を鋭くとらえられ、人情味豊かに語りかける姿も、まざまざとまぶたに描かれてくる。またあるときは、四条金吾や南条時光に対して、あまりにも凡夫そのままの、人情の機微にふれられたかずかずの激励をされている。

「いなかことばにてあるべし」との一言のなかにも、この現実の大地に生き、自然と人間のなかに呼吸するきわめて土着的なものを愛された御本仏の心情というものが、鮮やかにうかがえるのであります。

この土俗性のなかに普遍の妙法を輝かせたところに、大聖人の仏法の優れて偉大な特質があることを、けっして見落としてはならない。抽象的、観念的な言葉を弄することは容易である。しかして、現に生きる一人ひとりの人間の存在のなかに、宇宙をもつつむであろう妙法の力を説いていかれた大聖人のお振る舞いは、まさしく宗教革命のなんたるかを示すに十分でありましょう。

真の地域主義とは、ひとくちにいえば、普遍性と土俗性の融合のいき方であるといってよい。土俗

性――すなわち庶民の生活実感に密着した習慣や風俗等を触発しつつ、そのなかに、人類、世界と通ずる普遍性の響きを通わせていく。そこに、人間が真に人間らしく生きていくための価値は昇華されていくのであり、われわれの志向する地域主義もその一点に結実するのであります。

御書にいわく「虚空の遠きと・まつげの近きと人みなみる事なきなり」（御書全集一五四六ページ）と。「虚空の遠き」とは哲理の普遍性であり「まつげの近き」とは足元であり、まさしくわれらが生を営んでいる地域そのものの土俗性と拝せましょう。私は、卑近な譬喩を用いて述べられたこの御金言に、われわれの運動のめざす地域主義の方軌が、見事に要約されていることに驚きを禁じえません。

ともかく、大聖人門下のなかでも重きをなしていた三位房でさえ、権威、権勢にあこがれ、仏法の本義から外れていったということは、いかに大聖人の仏法を正しく実践することがむずかしいかを、端的に示しているといえよう。真実の人間のあり方を示されたのが大聖人の仏法であります。

わが創価学会の行動は、大聖人の仏法を〝人間のための仏法〟として位置づけた。それは日蓮大聖人の御精神にかなっていることは疑いない。

そして今日、末法流布の大河の時代を到来せしめた評価は、なによりも世界を舞台にして活躍する地涌の勇者の姿が証明しているでありましょう。私どもは、この厳粛なる事実におおいなる誇りをもちたいのであります。

「撰時抄」

わが振る舞いこそ信心の結晶

（御書全集　二八八ページ三行目～同ページ七行目
編年体御書七五一ページ三行目～同ページ七行目）

経に云く「所謂諸法如是相」と申すは何事ぞ十如是の始の相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う

「撰時抄」とは「時を撰ぶ御抄」という意味です。末法という時を凝視し、いかなる法を弘めるべきかを検討され、三大秘法の妙法こそ、末法の人々を救済する法であることを宣言された重書であります。

「時」ということについては、すでに「報恩抄」の講義のさい述べましたが、今回学ぶ個所は「余に三度のかうみょうあり」（御書全集二八七ページ）と、大聖人の三度にわたる予言がことごとく的中し、真

実の時を知るのは仏であることを、確信をこめて断言されている段の後半にあたります。

方便品の十如実相の文が「如是相」より始まることから「相」ということの重要性を説かれているところであります。「相」とは、一言にしていえば「如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云うなり」（御書全集四一〇ページ）と示されているように、事実のうえに顕現された姿、振る舞いをいうのであります。

それでは、なぜ「十如是の始の相如是が第一の大事」であるかといえば、その点を論ずることが、天台の理の一念三千の法門と、日蓮大聖人の事の仏法との、根本的な相違を浮き彫りにするからであります。

天台大師は、どちらかというと心性を重んじ、己心を観じて十法界を明察する観念観法の修行を軸に、法理を展開しました。それに対し日蓮大聖人は、徹底して事実のうえの振る舞いを重視されたのであります。

「百六箇抄」においても「涌出品より已後・我等は色法の成仏なり」（御書全集八六二ページ）との文にみられるように、大聖人はしばしば、生命の色法の側面を、本門、随縁真如の姿としてとらえておられます。心法の側面は、まだ迹門、不変真如の理門にとどまっているわけであります。

思うに、日蓮大聖人の仏法を実践するにあたって、なにが要諦となってくるのでありましょうか。

それは、悟りとか決意、慈愛といったものが、心の領域にのみふみとどまっていてはならないということであります。心中に凝縮された一念は、即地涌の実践の場へと展転し、わが身に、わが生活、

わが人生に、いかなる事の振る舞いとなってあらわれたかという現実性、具体性こそ、日蓮門下にとって大事中の大事なのであります。

しかも大聖人はこのことを「相如是が第一の大事にて候へば仏は世にいでさせ給う」とおおせられている。すなわち、現実に仏が出現され、人間としての事実のうえに仏法を会得し、顕現していく方途を明かされたという歴史的事実こそ重要なのであります。

たしかに大聖人は、久遠元初の自受用報身如来であられる。しかしわれわれが、その偉大な存在をまぎれもない事実として覚知することができたのは、七百年前に大聖人が御出現になったからこそであります。

仏法は、キリスト教の〝神〟のように、遠き夢のかなたにあるのでもなければ、山中深くひっそりと説かれるものでもありません。現実に生きる人間のなかにのみ息づくのであり、さまざまな生活の葛藤のなかに豁然と開けゆく生命蘇生の泉なのであります。ゆえに大聖人は、民衆が雲集し、苦楽、愛憎の織りなす現実の真っただ中に飛び込んでいかれたのであります。

「日蓮末法に出でずば仏は大妄語の人・多宝・十方の諸仏は大虚妄の証明なり」（御書全集一一九〇ページ）

とのおおせがあります。

大聖人は御本仏でありますから、本来は、釈尊をはじめとする仏菩薩、あるいは人師、論師の証明など必要としないのであります。にもかかわらず、みずからの御出生を「日蓮末法に出でずば……」と、歴史の流れのなかに意義づけておられる。私は、この御金言のなかに、歴史性と現実性とをとく

に重視する事の仏法の骨髄を、垣間見る思いがしてならないのであります。まさしく「相如是が第一の大事」であります。

この「相如是」について、若干敷衍して、われわれの日常生活に即して申し上げれば、ここでいう「相」とはたんなる姿や形とは異なり、人間本然の生命のありようが、具体的な形として現れたものと拝せましょう。虚栄、虚飾によってつくられた姿ではなく、わが奥底の一念の発露であります。

その意味で顔色や目の輝き、言葉遣いから一挙手一投足にいたるまで、いっさいの振る舞いは、われわれの信心の姿そのものであります。一念の奥底に歓喜の脈打っている人ならば、顔色も生きいきと輝き、日々の言々句々や振る舞いのなかに、なんともいえぬ薫風の漂うような雰囲気がかもしだされているものであります。逆に、いくら表面の威儀をかざり、口でうまいことをいおうとも、顔色が悪く言葉に張りもなく、感情に流されているといった状態であったならば、なんの説得力ももちえないにちがいない。

とくに、人間の顔ほど正直なものはありません。私は以前、老境のトルストイの顔に刻まれた、人生のさまざまな風雪をくぐりぬけた重厚さについてふれたことがありますが、「聖教新聞」に連載された「信心20年の貫録」をながめながら、同様の感を深くいたしました。そこには、さまざまな年輩者の顔が見事な光彩を放っておりました。ともに懐かしい戦いの思い出を刻んできた方々であります。顔に刻まれた一本一本の〝笑顔皺〟は、病苦や生活難に果敢に挑戦しつつ戦ってきた信心の年輪を、

ほうふつとさせてあまりあるものであります。私は旧懐の情にひたりながらも、真金の人は、月々、年々に輝いていくものだな、との思いを深くせざるをえません。

古賢も「人いずくんぞかくさんや」と述べているように、信心していようといまいと、人々の目というものはじつに鋭い。われわれの何気なしの動作や片言隻句までも、敏感に感じとっているものであります。その意味からも、地域や近隣、職場でのふれあいにおいて信心の光を発する、金の輝きをもった存在となっていただきたい。

われわれが「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」（御書全集一一七四ページ）との御聖訓をとおして学んだように、その事実の姿こそ、信心の凝結なのであります。

まして時流は「実証」の時代であります。われわれの姿、行動はあくまで常識第一、良識第一に徹し、人々から「さすがだ」と賛嘆されるものとなっていかなくてはならない。大聖人は、折伏のさいの言葉遣いにいたるまで、じつに細かな配慮をすべきことを教えられております。

たとえば御書には「……和らかに又強く両眼を細めに見・顔貌に色を調へて閑に言上すべし」（御書全集一二八〇ページ）と述べられています。すなわち、感情に走ったり激したりすることなく、つねに顔面に笑みをたたえるほどの余裕をもって対話する。そして、静かななかにも、道理としていうべきことは堂々といいきっていく――という姿勢であってください。

その文の次下に「公場にして理運の法門申し候へばとて雑言・強言・自讃気なる体・人目に見すべからず浅猥しき事なるべし」（御書全集一二八三ページ）とおおせのように〝売り言葉に買い言葉〟的な雑

言、強言のたぐいや、独善的な言動は、厳に慎まなければなりません。そうでなければ、法を宣揚しているつもりで、かえって法を下げてしまうからであります。

仏法は道理ですから、世間の常識、良識を大切にしつつ「相如是が第一の大事にて候へば……」の文をそれぞれの立場で読みきり、「実証」の時代を、着実に歩んでいっていただきたい。

大法興隆の時を察知された大聖人

智人は起をしる蛇みづから蛇をしるとはこれなり

これは、日蓮大聖人が一閻浮提第一の聖人、すなわち末法の御本仏であることを述べられた文であります。

「智人は起をしる蛇みづから蛇をしる」とは、妙楽大師の法華文句記巻九の文を、日蓮大聖人の随自意の御境界によって、自在に転用されたものであります。

妙楽の文は「智人は智をしる」となっているが、日蓮大聖人は、あえて「智人は起をしる」とされている。ここに、日蓮大聖人が、智人すなわち仏というものを、いかにとらえられていたかが明らかでありましょう。

智人とはたんに智を知るだけであってはならない。智慧豊かな人であるだけでもならない。むしろ、あふれるがごとき智慧をもって、宇宙や自然の出来事、社会、人心の動向を察知し、悩める民衆を本源から救いきる慈悲と責任感に貫かれた人こそが、真の智人なのである。

「智人は起をしる」の「起」とは、天変地夭をはじめ、いっさいの現象の起こる原因や根本、ということであります。したがってこの御文は、日蓮大聖人こそ、三世に通達した仏眼をもって、世の中に起こるもろもろの現象の根本原因を知る真の智人であり、末法の御本仏であることを明かされた文となるのであります。

日蓮大聖人は、正嘉の大地震、文永の大彗星等の現象を三大秘法の仏法興隆の瑞相ととらえられ、相つぐ災難の到来によって動揺する暗黒の社会に対し、不惜身命の実践で妙法の光明を掲げつづけられたのであります。

ともかく、仏法のことは、仏にしかわからないのであります。仏の智のみが、仏法の正邪、いかなる仏法が時と機根にかなうかを知ることができるのである。

「蛇みづから蛇をしる」とは、蛇は、みずからの本能や習性により、自分の通る道を知っているという。人間にはまったくわからないが、蛇自身が知っている道があるのです。これはなにも蛇に限ったことではありません。

「日女御前御返事」にも「闇の中に影あり人此をみず虚空に鳥の飛跡あり人此をみず・大海に魚の道あり人これをみず月の中に四天下の人物一もかけず人此をみず、而りといへども天眼は此をみる」

（御書全集一二五〇ページ）とあります。

鳥が虚空を飛ぶのも、魚が海の中を泳ぐのも、それぞれに自分の道を知り、そこを通っているのであるが、人間には見えないとのおおせであります。

同様に、仏法には仏法の法則があり、因果律がある。凡夫には見えないけれども、仏、智人のみが、それを知ることができるのであります。正嘉の大地震、文永の大彗星等の打ちつづく災難も、凡夫にはまったくその因果関係がわからなかった。だが、御本仏日蓮大聖人には、はっきりと、大法が興隆する時を知らせる鐘であることがみえておられたのであります。

万代広布を凝視した大宣言

衆流あつまりて大海となる微塵つもりて須弥山となれり、日蓮が法華経を信じ始めしは日本国には一滴・一微塵のごとし、法華経を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば妙覚の須弥山ともなり大涅槃の大海ともなるべし

広宣流布の原理を示された御文です。とともに、この一節には、日蓮大聖人の広宣流布への烈々たる御確信が込められていると拝したい。

多くの流れがあつまって大海となる。わずかの塵が集積して須弥山となる――とは、洋々たる大海も、峨々たる大山も、その淵源をたずねれば、一滴、一微塵から成っていることを述べられたものです。

渓流は峻嶮な沢を下り、深き谷間を駆け、いくつもの支流を合して大河となり、やがて滔々と大海へそそぎ込む。はじめは一滴（ひとしずく）から始まっているのです。と同じように、広宣流布の流れも一滴から始まり、やがて大海となっていくと、天地自然の様相を例に、断言されているのです。

須弥山とは、古代インドの世界観、宇宙観で、その中心にあるとされる山です。この世界観は、天空に伸びるヒマラヤの山々をのぞむインド亜大陸の地理的位置づけと無関係ではないでしょうし、事実、いまも人はヒマラヤを白き神々の座と感じ、聖なるものとして畏敬の念をもっています。仏法上において、この須弥山は、仏の無上の正覚の象徴として、しばしば登場します。

たとえば「須弥山に近づく衆色は皆金色なり、法華経の名号を持つ人は一生乃至過去遠遠劫の黒業の漆変じて白業の大善となる、いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり」（御書全集一四〇五ページ）と御書の一節にあります。

ここでは広宣流布という巨大な偉業の建設を須弥山にたとえ、一微塵、一微塵が集まって、固く結合してこそ、広布の山並みはできあがっていくのだといわれているのです。

大聖人御在世当時、大聖人とその門下の存在は、日本において一滴、一微塵のごとくだったでありましょう。その大聖人の仏法が、今では約一千万人の友が喜々として担う広範な民衆の大宗教運動へ

と伸長し、生きいきと現実の庶民生活へ脈動しているのです。

まさしく、この「撰時抄」の一節にあふれる御本仏の大確信が、七百有余年の今日を確かに予測していたといってよい。元初の夜明けに立って、日蓮大聖人は、南無妙法蓮華経と呼号あそばされた。それは宇宙をもつつむ末法の御本仏としての第一声であられた。その一滴は、けっしてたんなる一滴ではない。大海をもはらんでいる。その一微塵は、たんなる一微塵ではない。大山をもつつんだ峻厳(しゅんげん)な因果の理法をはらんでいる。同じく私たちにおいても、一個の人間の変革は、その一人ひとりにとどまるものではない。全人類をもつつむであろう最小の瞬間である。これほどまでに一個の人間のスケールの大きさを説いた法理があるでありましょうか。

われらの人間革命の戦いは、やがて大海にいたるであろう道程であり、かつは大山を築くもっとも確実なる一歩一歩なのであります。

大聖人は「開目抄」のなかで、こうも述べておられる。

「一滴をなめて大海のし(潮)ををしり一華を見て春を推せよ」(御書全集二二二ページ)と。

また「当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華経にたてまつり名をば後代に留(とど)めし、大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや」(御書全集二二三ページ)と。

これらの御文に込められた御本仏の末法広宣流布の大確信にふれ、いまさらながら、わが身の福運を感ずるのであります。

〝一人をつかむは万人に通ず〟の方軌

つぎに「二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば」とあることに注目したい。いかなる運動も歴史を概観するならば〝一人〟から始まっている。私どもの運動においてもまたしかりである。仏法はどこまでも〝一人〟〝一人〟の人間に焦点をあて、そこにいっさいの可能性を見いだしていく原理なのであります。

その〝一人〟の人間を最大に尊び、いかなる階層の人であれ、生命の絶対的尊厳の立場から、どこまでも平等に、徹底して守りぬいていく――これがわが人間革命運動の骨格をなすものであります。

そうした〝一人〟が〝二人〟となり〝三人〟となって、やがて百千万億人となる。この百千万億はたんなる数字というより、無限に、行き詰まりなく、ということです。

創価学会の歴史のうえにおいていうならば、草創期の渓流は、障魔の砂を下し、強敵の岩をはみ、いまや悠々と未来へ流れゆく大河を現出したことにあたるわけであります。大河は両岸に肥沃な大地を提供しつつ、社会貢献の実りをもたらしている。まさに「河が深ければその水は滑らかに流れる」（シェークスピア）実相ともいえるでありましょう。

わが創価学会は、無名の庶民が立ち上がって築いた尊い団体であります。権力によるものでもなければ、利害や好悪の感情によるのでもない。ただ、ひたぶるに汗と労苦によって築き上げた世界なの

であります。過去の悲惨な運命の曲から、色彩鮮やかな希望のメロディーへと変転していった一庶民の生活詩が、やがて万人の生活詩へとつづられていったのであります。

かつての釈尊の仏法を俯瞰するとき、それはいわば上からの改革であった。しかし、日蓮大聖人の仏法は「旃陀羅が家より出たり」（御書全集九五八ページ）とお示しのごとく、庶民の、下からの仏法流布の流れであり、この大聖人の御金言を事実のうえで証明したのが、日蓮正宗創価学会なのであります。

一人の覚醒に始まり、一人が一人の宝塔を開き、そのまた一人が次の一人の宝塔を開いていく――この地道にして着実なる〝下〟からの盛り上がりこそ、われわれがめざす真実の広宣流布の実像なのであります。したがって、かつての田中智学等の主張した国教的ないき方は〝上〟からの統制でことを運ぼうとしている点からも、大聖人の仏法と、根本的に反しているのであります。

ともかく、全国の会員の努力と熱誠によって、広宣流布の様相もようやく安定と向上の新たな段階に入りました。御本仏の御遺命どおりの仏法の世界に名を連ねる私どもは、こんどはみずからが一帝となり、一微塵となって、人間であることの共通の基盤に立ち、それぞれが信頼の核となり、新たな生命の自覚を呼び起こす運動を堅実に進めていくべきでありましょう。

そうしたみずからの新たな生命の自覚が、つぎの自覚ある一人を生み、それが二人、三人、十人と続いて、御聖訓のままに大涅槃の大海となり、妙覚の大山へと連なっていくのであります。

この世でもっとも偉大なものはなにか。それは太陽のいつも変わらぬ同じ運行が示すごとく、もっとも地道な作業を忍耐強く繰り返しゆく軌道のなかにあるといってよい。一人の人間の心を深く知

り、理解と信頼を得ていく作業は、たしかに忍耐と困難がつきまとう地道な労作業といわねばならない。しかし、だれが見ていようと、見ていなかろうと、黙々と一人ひとりの心と心を通わせ、そこに誠意と信頼を交流させゆく行為は、万人の心をつかむことに通ずるのであります。

恩師は叫ばれた。

「青年よ、一人立て！　二人は必ず立たん、三人はまた続くであろう」と。

いずれの時代にも方軌は同じであります。すべては〝一人〟からはじまり、それは新しい一人の胸中の輝きとなり、一人の光は万人の胸中の輝きへと広がっていくのであります。「星火燎原」という中国の言葉がありますが、一点の火が燎原の火となって燃え広がっていくとの意です。私どもの広布の時代は、まさに「妙法の星火燎原」といってよいでありましょう。

広布にかける生涯に人間革命

仏になる道は此れよりほかに又もとむる事なかれ

結論していうならば、広宣流布の道に進む以外に成仏はありえないということです。人を救うということは、自分自身の宿命転換に通ずるということであります。人の生命に妙法を湧現させていく戦

いをしていくことが、自分自身の生命の扉を開いていくわけであります。これは、あたかも地球が自転と公転を同時にしながら、己の厳しき軌道を運行している姿にも似ております。公転は広宣流布、成仏すなわち自己の人間革命は自転とも考えられます。

「此れよりほかに又もとむる事なかれ」――この一句に注目したい。この大聖人の強い鋭いおおせをどう受けとめて実践していくかということであります。一人だけの信仰などということはありえません。わが生涯を広布にかける――それ自体が偉大なる人間革命になっているのであります。

創価学会は、日蓮正宗を外護し、社会にあっては広宣流布をしていく団体であります。ゆえに、この創価学会を守護することが即、総本山を守護することに通ずるのであります。また広宣流布につながる。ゆえに、御宗門と学会が過去、現在、未来と永遠に一体となって進みゆくところに、幾層倍の広布への原動力が生まれることはいうまでもありません。

もったいなくも日達上人は、私どもに対し「わが国に創価学会があるかぎり、日本国は安泰であり、世界もかならず平和をたもつことができると断言できるのであります」とおおせくださっております。

広宣流布というものは、仏の所為であります。ゆえに、広宣流布を推進することは、如来の所遣として、如来の事を行ずることになる。この尊い使命を、僧俗一体となって進めていくところに、かならず広宣流布は実現していくことを確信していただきたいのであります。

「開目抄」

輝かそう生命の富を

（御書全集　二二三ページ二行目～同ページ四行目
編年体御書四五二ページ九行目～同ページ十二行目）

当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし命は法華経にたてまつり名をば後代に留べし、
大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華経の
六難九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし

「日本国に第一に富める者は日蓮なるべし」

私はこの言葉が、配流の地・佐渡において述べられたことに、深い感動を覚えるのであります。寒さと飢え、そして虎視眈々と命をねらう念仏者の群れのなかにあった孤独の世界。凡夫の目からみれば、まさに地獄そのものと映るでありましょう。しかし、大聖人の生命には日本一、世界一、いな宇

宙一の〝富〟が輝いていたのであります。

これは、強気や独善の言葉ではない。心奥より自身の立場を喜ばれている崇高なる御境界の一言であられる。苦難の極底にあって、このような偉大な輝きを示した人が他にあったでありましょうか。

天平期より江戸期にいたるまで、流罪の地・佐渡に身を送られた人は、数しれずありました。しかしそのなかにあって、かくも崇高な御境界に比すべき、真実の歓喜の声を発した人が、あったでありましょうか。みな、憂愁と悲嘆と絶望の日々を送るばかりでありました。

この一事をもって、日蓮大聖人の御内証の深さを思うべきであります。仏法上、なにが最高の財宝か——それは心の財、すなわち生命の内より発する豊かさこそ、第一の宝であります。その心の財を根本として生きぬいていく信心の極致を、大聖人のお姿から学ぶべきであります。

ある世界的に有名な歌手の死が最近報ぜられました。〝有名〟の二字を極め、いかに人々の渇仰の的となって一時の華美の世界をつくりあげようとも、生命の奥底だけはどうしようもなかった。彼自身、まさしく孤独地獄そのものであったとみざるをえないのであります。

また私は、この御文をとおして、戸田先生の懐かしい思い出がよみがえってまいります。先生が公会堂で御書の講義をされたさい「あなた方が功徳を得たといっても、私からみれば、まだまだ小さい。小指の先のようなものです。私の得た功徳は、この公会堂いっぱいほども大きいのです」と何度もいわれておりました。

結局、生命の豊かさ、深さ、大きさ、それが人間としての真実の財宝なのであります。われわれが

御本尊を持った以上、わが功徳、福運は、世界一偉大であるとの確信に立って進んでいきたい。いかなる苦境、苦難に遭遇しても、その胸中の太陽の輝きさえあれば、かならずや人生を未来へと開いていけることはまちがいないと確信するのであります。

「命は法華経にたてまつり名をば後代に留べし」

人間だれしも、かならずなんらかのものに、日々命を使っているものであります。ある人は家庭や子供に、ある人は会社に、またある人は趣味に等々。一人の人間であっても、時々刻々、さまざまな対象に命を費やしております。その意味では人生とは、日々、命を使っていく過程の総体でもあります。

しかし、その命を帰していることが、ほんとうにその人の大満足の人生となるかならないか、すなわち、人生の総決算において、大きな悔いが残るか、あるいは真実の生きがいを感ずるかという、重大なテーマが残っております。多くの人々は、命を使うべき対象が、有為転変の無常の世界であることに気づいていない。ゆえに、その人生にもまた、不安と動揺と、陰鬱の深淵が広がっているのであります。

それに対し、根本の常住の世界に棹さして生きる人の命には、満足と不動の強さがあり、そこから発するいっさいの振る舞いは、作々発々のはつらつたる姿を現じていくのであります。まことに法華経に命をたてまつるほど、強靱な人生はないのであります。

「名をば後代に留べし」とは、法華経ゆえの、真実の人間としての名を、永遠にとどめるということ

であります。

たとえば、大聖人御在世中の四条金吾の名は、歴史書のなかにも一行、一言も載っていない。しかし、七百年後の今では、日本中、世界の人々の口にさえ、広布の誉れとして響き渡っております。大聖人より「法華宗の四条金吾・四条金吾と鎌倉中の上下万人乃至日本国の一切衆生の口にうたはれ給へ」（御書全集一一一八ページ）といわれた御金言どおりの名を、後代にとどめたのでありました。

私はいつも確信している。それは広宣流布のために、わが人生をかけて実践する人は、三世十方の諸仏の知るところであり、その名を宇宙に輝かせているのであります。ゆえに、その名は後代に、まことの人生の勝利者としてとどめられるのであります。

さらに、この「名をば後代に留」とは、その人の永遠の福運を意味しております。三世諸仏に、その名が称賛されるということは、即、生命自体に揺るぎなき大福運の軌道をつくることを意味している。ゆえに、その福運の名の記別は生々世々に続いていくことを、確信されたいのであります。

実践こそ仏法の生命

「大海の主となれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざるべしや、法華経の六難九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし」

「六難九易」は、法華経見宝塔品第十一に説かれています。法華経を仏滅後に受持することが、いか

に至難であるかを明かしたものです。

この宝塔品には三箇の鳳詔といって、滅後の弘法を三度にわたり勧め命じている。その第三の諫勅のなかに、この六難九易の原理が説かれていることは、仏滅後末法の妙法広布に生きる勇者に、なみなみならぬ決意を要請するためであります。

須弥山を接って他方の無数の仏土に擲げ置いたり、乾いた草を背負って劫火のなかに入っていっても焼けないことなど、およそ普通では不可能、あるいは不可能に近い難事の例を、九つあげている。そして、これを法華経実践の六例に比べれば、なお易しいことだと経典が述べていることは、すでにご承知のことと思います。

法華経流布には大難があることを示した、この「六難九易」を引かれて、大聖人は、もしもこの六難九易を実践する人がいるとすれば、その人こそ仏法の王者である、たとえ一切経を読み実践しなくても、それら経教の原理が一つの例外もなく、この法華経の行者のものになるとおおせであります。

これは、大聖人こそがいっさいの仏の根源の御本仏であるがゆえに、いっさいの仏菩薩が随従し、いっさいの功徳が雲集しているとの御断言なのであります。大聖人こそ宇宙第一の本源の仏であられることが、ここにも明確であります。

「法華経の六難九易を弁うれば一切経よまざるにしたがうべし」――この一節は「実践」ということの偉大さと、難をうけることの重大さをお示しです。

実践は、いうまでもなく宗教の生命であります。あらゆる宗教をはじめ、いっさいの思想、哲学の

究極の使命は、一人の人間を救うかどうか、事実として何人の人々を救ったかどうかにある。

どれほど高邁な説を掲げようとも、博学を誇ろうとも、六難九易という現実のなかで実践しぬく事実には、はるかに及ばないし、その実践があって初めて、成仏への大道が開けるのであります。

〝一人〟に光あてる妙法

ともかく宝塔品のなかにおいて、六難九易の原理が示されていることは、一個の人間の生命の扉を開き、そこに抜本的蘇生の光源を送りゆくことが、いかに困難であり、いかに偉大な法理であるかを説かれたものといえる。九易とは物理的困難を象徴したものと拝せる。また六難とは、生命の世界に分け入っていくことの戦いの至難さを述べられたものであり、胸中を制覇しゆくことが、いかに困難であるかを示した原理なのであります。

ゆえに、日蓮大聖人は、この六難九易を引かれながら「今度・強盛の菩提心を・をこして退転せじと願しぬ」（御書全集二〇〇ページ）とも述べられていることを、深く銘記していただきたいのであります。

この六難九易の原理を、たんなる譬え話や主観的な心情、決意といった次元で受け取っていてはならない。真実の仏法運動であるならば、かならずそうした困難をともなうという客観的事実を、未来永久の戒めとしておおせなのであります。

私は以前、六難九易の原理的客観関係についてふれたことがありますが、われわれの運動は一人の

人間を徹底して大切にし〝悩める一人〟〝嘆きの一人〟をどう救っていくかが眼目であります。こうした人間観は、すべての人々を数のなかへ組み込み、権力による支配、統制下におこうとする人間観とは逆であり、方向を異にするのであります。ゆえに、権力というものは、そうした運動には、つねに過敏なまでの警戒心を働かせており、そこに、相対抗する緊張関係が生ずることは、必然であります。原理的客観関係とは、そのことをいうのであります。

さて過去の宗教の歴史をふり返ってみてもわかるとおり、そのほとんどの宗教というものは、支配階層に直結し、あるいは権力のなかに組み込まれ、その下僕の存在となるような忌まわしい道をたどってきた。しかし今、ここに説かれる宝塔品においては、一人の人間の無限の可能性をいかに引き出し、輝かせていくかの原理を明かしている。この一個の人間の内面世界を徹底して照射し、そこに自在の生命的境涯を会得せしめていこうとする方途からしても、仏法がいかに革命的な原理であるかおわかりでありましょう。宝塔品のなかで六難九易が取り上げられた真の意味も、この一点にあるわけであります。

かつて、オーストリアに初めて鉄道が敷かれたさい、人々の反応はつぎのようであったそうです。

「……ウィーンの新聞は恐怖と不吉な予言でわきたった。鉄道王ロスチャイルドは十八世紀的に平和な国に二十世紀の悪魔をおしつけたと非難された。人間の呼吸組織は一時間十五ﾏｲﾙ以上の速度にたえられないから、肺は虚脱状態になり、循環器はこわれる。旅行者の鼻、目、口、耳から血が迸りでるにちがいない。六十ﾌｨｰﾄ以上の長さのトンネルは、客車のすべての乗客を窒息させ、汽車は他の出口か

ら運転者のいない霊柩車となってでてくるだろう」と。

今からみれば笑い話のようなことが、本気で論議されていた。このように、一般世間の目というものは、未知のものに対して、本能的な不安感をもっているのであります。また、権力の習性は、こうした一般の心情、心理を巧妙に利用しつつ、支配の網を広げてくるのが常であります。ゆえに、民衆の賢明さを開発することが仏法運動の成否を決するといってよい。

ともあれ、われわれの未聞の運動が、対抗する力の存在なしに進むわけがありません。釈に「惑耳驚心」と説かれているとおりであります。だからこそ、世間の常識や良識を内から輝かせていく労作業が必要とされるわけですが、それと同時に、私たちの仏法運動にはかならず難があることを、永遠に心にとどめていきたい。

皆さんは、内には、この六難九易の原理を確信し、いかなる諸縁にも幻惑されることなく、ものごとの奥底を見極めつつ、外にあっては春風のごとく、地域の柱の存在として活躍されますようお願いいたします。

「日女御前御返事」

尊き同志を信頼しあおう

（御書全集一二四七ページ九行目～同ページ十一行目
編年体御書一一〇四ページ一行目～同ページ三行目）

法華経をば経のごとく持つ人人も・法華経の行者を或は貪瞋癡により或は世間の事により或は・しなじなのふるまひによって憎む人あり、此は法華経を信ずれども信ずる功徳なしかへりて罰をかほるなり

この御文の意味するところは、別しては当然、日蓮大聖人のお立場を述べられております。しかし総じては、末法の慈折広布に邁進する日蓮大聖人門下にあてはまる御文と自覚して拝せるのであります。

法華経とは、末法の法華経、すなわち御本尊であります。「法華経をば経のごとく持つ人人も」と

は、御本尊を受持している人々のすべてに共通いたします。たとえ、そういう「法華経をば経のごとく持つ人人も」、それはかたちのうえのみで、実際は、もし「法華経の行者」――別しては、御本仏日蓮大聖人お一人であられる。また総じては、日蓮大聖人の門下、すなわち正法をたもって広宣流布に向かって、日夜、真剣に活動している人――を憎んだり、謗る者には、功徳がないばかりか、かえって罰を受けてしまうという御金言なのであります。

それでは、どういうかたちをとって誹謗中傷が行われるか、それを大聖人は、一つは謗る人の「貪瞋癡」によって、二つには「世間の事」に事寄せて、三つには仏法実践者の「しなじなのふるまひ」をとおしてである、とおおせなのであります。

「貪瞋癡」によって憎むというのは、その人の貪り、瞋り、癡か――すなわち、その人の心の魔性の発露ともいえるであろう煩悩が原因で、法華経の行者を憎んでしまうことであります。

この貪り、瞋り、癡かというものほど、やっかいなものはない。人間のもつ悲しむべき性であります。しかし、怨嫉、怨念、憎しみというものに振り回されるか、信心という仏界から自分の生命を律していけるか、ここに絶えざる人間革命の戦いがあることを知ってください。

当然、荒凡夫の未熟さのゆえに、さまざまなことがあるかもしれない。私たちの側でそうさせない努力も、当然必要であります。しかし、故意に尊き〝仏子〟を傷つけていくことは、じつは、みずからの生命をも傷つけていく醜い行為であり、みずからを奈落の底に追いやっていくことは疑いない。

また「世間の事」によって憎むというのは、仏法の厳然たる教義によらず、世間的なことに事寄せ

て批判したり、憎しみをいだく場合であります。たとえば、地位とか、立場とか、財産とか、いわゆる世間的な姿のうえから批判することであります。地位や権威をカサにきて驕りたかぶり、法華経の行者を誹謗することも含まれてくるわけであります。

さらに「しなじなのふるまひ」によって憎むというのは、その人の振る舞いや言動、すなわち、表面に現れた姿、形で批判する場合であります。

いままでも難というものは、かならず世間のこと、生活的な事象に事寄せて起きてきました。大聖人の時代もそうでした。いまた同じであるといえます。

これらは、いずれも、人間がもっとも陥りやすい通弊でもあります。それだけに、みずからの仏道修行の鏡としていくべき重要な戒めとも拝すべきなのであります。

とともに、世間的なことに事寄せたり、表面の振る舞いや言動によって人々は見ていくのでありますから、自身の社会における姿や地域における行動も〝さすが〟といわれる人になっていくことが大切です。しかし、それでもなおかつ経文、御書に照らし、かならず非難中傷は内外ともにあると考えなくてはならない。

ともかく日蓮大聖人は、結果的に法華経の行者を憎むということは、いかに法華経を経のごとくたもっているかにみえても、そのような姿には信心の功徳はない、かえって罰を受けてしまうのである、と断言されているのであります。

日蓮大聖人の偉大な仏法をみずからも行じ、この末法に弘通している人を誹謗すれば、かならずこ

うなるとの厳しき御聖訓なのであります。

同志というものは、互いに信頼し、尊敬しあわなければならない。自他彼此の心で、互いに反目したり、怨嫉したり、憎しみあったりすれば、もはや仏法の命脈は、そこには息づいていないことになります。むしろ、生命の魔性に汚染された世界をつくりあげてしまうのであります。

ともあれ、亀裂化し、断絶化した社会にあって、ひたすら御本尊を受持、唱題まいらせて、互いに「信」で結びあった教団は、この世で比類なきものと信じます。

「佐渡御書」に「悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食む等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし親しみより破るべし」（御書全集九五七ページ）の御金言の鉄則を銘記していきたい。ゆえに内部から破壊していこうとする行為は、最大の仏敵となる所業なのであります。

とくに、これからの時代は、日本的にも、世界的にも、内部充実の時代となるであろうと思われます。世間にも「艱難にあいて、はじめて親友を知る」とのことわざもあります。いわんや〝異体同心〟が、仏法の真髄であります。ゆえに、真実に、広宣流布に苦難を共有しながら活動していくなかに、なにものにもかえがたい強靱な絆は築かれるにちがいありません。

一人ひとりが己の信心を確立しつつ、仲良くスクラムを組んで、地涌の菩薩の眷属として誉れの道を、ともどもに進んでまいろうではありませんか。

「種種御振舞御書」

一切を包む御本仏の大慈悲

（御書全集　九一七ページ五行目～同ページ六行目
編年体御書九五四ページ五行目～同ページ六行目）

釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものは
かたうど人よりも強敵が人をば・よくなしけるなり

私は、この御金言を拝するたびに、御本仏の宏遠無辺なる大境界に、驚嘆の念を新たにいたします。善知識とは有徳の友人であり、人を仏道へと導き入れる人を意味しております。

さきに「相模守殿こそ善知識よ平左衛門こそ提婆達多よ」（御書全集九一六ページ）とおおせのように、釈尊にとっての提婆達多と同様、大聖人は、みずからを迫害し、酷寒の佐渡へと流罪せしめた張本人である北条時宗や平左衛門尉を、御自身の善知識であるとおおせなのであります。

ふつうならば、天に怨嗟の声を放ち、悲涙をもって地をぬらし、あるいは悲嘆と諦めの暗い日々を送っているのが当然でありましょう。しかし、大聖人は、その次下に「平左衛門尉・守殿ましまさずんば争か法華経の行者とはなるべきと悦ぶ」（御書全集九一七ページ）とまでいわれているのであります。

その御境界たるや、まさしく山をも抜き、海をも容るる大慈悲と拝する以外にありません。私にはこの御文を拝するたびに、紅涙滴る思いがいたすのであります。

私たちはこの一節をとおし、難に遭遇したときの、仏法者たる者の姿勢の極底を学びとっていきたいと思います。

もちろん、大聖人の御一生にとうていおよぶものではありませんが、凡夫である私たちの人生においても、よいときもあれば悪いときもあるのが当然であります。むしろ、今日のような濁世、激動の時代にあっては、順境のときのほうが少ないかもしれません。また、広布遠征の途上にあっても、今後とも、さまざまな障魔が競い起こってくることは、御金言に照らして必定であります。

そのさい、われら大聖人門下は、大きくいっさいをつつみこみながら苦難を避けずに、むしろ反省すべきことは潔く反省をしながら、人間革命の絶好のチャンスととらえていくべきであると申し上げたい。

私は、佐渡において大聖人が「喜悦はかりなし」（御書全集一三六〇ページ）と、宇宙大の大きさでわが生命の躍動を感ぜられた御心境が胸につきささってきます。

一般世間でも「艱難汝を玉にす」といわれております。まして信心の世界において、困難を乗り越

えずして、一流の人間、真金の人に成長できるわけがありません。
「鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈して試みるなるべし」（御書全集九五八ページ）ともおおせであります。
安逸のなかには本格派の人材は、けっして育たない。私はこのことを、とくに未来性豊かな青年部諸君に、強く要望しておきたい。

苦難もまた人間革命の因

学会の歴史にあっても、過去に、難をまえにして敗残の姿をさらしていった残念な人々を、何人か知っております。私は、それらの実例をみて、つねづね痛感していることですが、それらの人々は、外から襲ってくる難に敗れたというよりも、むしろ己心との戦いにおいて挫折したといったほうが、真実に近いように思えてならないのであります。大聖人御在世当時においても同様であったでありましょう。その弱い自分に打ち勝つことが、信仰の第一義なのであります。
いまは亡きある有名な小説家が「波騒は世の常である。波にまかせて、泳ぎ上手に、雑魚は躍る。けれど、誰か知ろう、百尺下の水の心を。水のふかさを」といった言葉があります。
まことに波騒は世の常であります。そこにたくみに生きる小さい心の人間もいます。しかし、人間のほんとうの偉大さ、尊さはなにか。みずからの信ずる目的のために波騒をつつみつつ、なおかつ悠然と師子王の歩みをなす人こそ、もっとも尊い人であります。

われらの人生は、波浪に翻弄されてゆくような、はかないものではならない。また、波間を巧妙に泳いでいくような、世故にたけた名聞の道であってはならない。しょせん、どう過ごそうとも、一生は一生であります。

ゆえに私たちは、このかけがえのない一生を「浅きを去って深きに就くは丈夫の心なり」（御書全集五〇九ページ）の御金言のままに、決定の日々でわが人生の歴史書を綴っていきたいものであります。

たしかに、釈尊にとっては提婆達多が、日蓮大聖人にあっては平左衛門尉が、第一の善知識でありました。しかし重要なことは、難に直面したとき、それを善知識とするか、悪知識とするかは、わが一念にあるということであります。御本仏の心を推察するのは恐れ多いことですが、平左衛門尉を善知識とおおせられたのは、いつに御本仏日蓮大聖人の比類なき御境界、大慈悲であられました。

総じて私どもにおいても、一念のいかんで悪知識も逆境も、ことごとく自身の成長の発条としていくことができるのであります。また、罪障消滅につながっていくのであります。苦難があるたびに、真実の信仰の核は、いやましてその力を凝縮させながら、新しい時代を切り開いていくにちがいありません。

その意味からも「今の世間を見るに人をよくなすものは……」うんぬんのおおせも、まことに道理であると拝することができます。味方同士のなれあいの平穏にひたっていては、人間であれ組織であれ、堕落するばかりであります。苦難につぐ苦難の峻険を踏破しぬいてこそ、嵐に揺るがぬ大樹のごとき境涯が開かれゆくのであります。

「難来るを以て安楽と意得可きなり」（御書全集七五〇ページ）とおおせのように、苦難こそ真実の平安であり、波乱万丈のなかに底光りを増していくものこそ、真金の人生であるといってよい。

長途の旅を苦難と戦い、耐えぬいてきた人の顔には、つややかな輝きがあります。ひとまわりもふたまわりも境涯を開き、その目や表情は、不屈の光沢を放ち、私たちの内側に力強いなにものかを生じさせてくれるものです。

どうか、皆さん方の一生もかくあれかしと祈りつつ、講義を終わらせていただきます。

「祈願抄」

祈りは願業成就の原動力

（御書全集一三四七ページ十五行目～同ページ十七行目
編年体御書五一五ページ十五行目～同ページ十七行目）

されば法華経の行者の祈る祈は響の音に応ずるがごとし・影の体にそえるがごとし、澄める水に月のうつるがごとし・方諸の水をまねくがごとし・磁石の鉄をすうがごとし・琥珀の塵をとるがごとし、あきらかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし

法華経の行者の祈りは、かならず叶うことを断言された御文です。

引かれた響えが、いずれも自然の道理、事実の姿であることに、日蓮大聖人の強い御確信をみる思いがします。音には響きが応ずるように、体に影が従うように、法華経の行者の祈りのあるところ、そこに結果がでないわけはない。祈りに応じて、自己の生命の色心にわたる回転が起こり、また依報

もそれに呼応して動くとのおおせであります。

ここで「法華経の行者の祈る祈」と述べられていることに注意をはらわなければなりません。法華経の行者すなわち実践者とは、別しては末法御本仏日蓮大聖人、総じては日蓮大聖人の教えのままに信心修行に励み、広宣流布に邁進する私どものことになるのはいうまでもありません。法華経の行者の祈りは叶う。しかし、爾前権教の人の祈りは、根本的に叶わない。

「諫暁八幡抄」には、つぎのように述べられています。

「此の理を弁へざる一切の人師末学等設い一切経を読誦し十二分経を胸に浮べたる様なりとも生死を離る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程の祈とは成る可からず」（御書全集五七七ページ）

また「撰時抄」には「此の災の根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡びん事疑いなきか」（御書全集二八四ページ）と述べられています。

つまり、魔の通力等によって一分のしるしがあったとしても、天地の知るほどの祈りとはならないし、さらには、より深い苦しみの世界へ入っていってしまうということであります。すなわち、大宇宙にも響く己心の大回転とはならない。

それに対して、法華経の行者の祈りは、天地に響きわたって、祈ったとおりの方向へと入っていくことができるのです。

祈りとは、けっして観念ではない。科学万能のものの見方にとらわれた現代人の目からすれば、目

に見えない生命の世界は観念の産物にすぎないと考えるかもしれません。しかし、もし物質的な観点だけでものごとをとらえていったならば、人と人との関係、人とものとの関係の大部分は、偶然の混沌のなかに埋没してしまうでしょう。

仏法の透徹した英知は、その混沌の奥に生命の法を見いだし、事象を内より支え、動かしていく力をとらえているのであります。

「命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功徳と説き給へり」（御書全集四六六ページ）とおおせのように、瞬間瞬間に如々として来って内より自身を支え、本源的な方向性を与えていくものこそが、もっとも問題とされなければならないわけであります。祈りとは、この本源的な世界における唯一の対決のあり方といってよいでありましょう。

したがって、祈りとは、正しい実践、粘り強い行動を貫くための源泉であります。祈りのない行動ほどもろいものはない。それは、あるときは順調で、意気盛んに見えるかもしれません。しかし、ひとたび逆境に直面するや、枯れ木のように、もろくも挫折してしまうでありましょう。なぜなら、そこには、わが胸中を制覇するという一点が欠けているがゆえに、現実社会の浮き沈みのなかで、木の葉のように翻弄されてしまうからであります。

人生の坂は、一直線に向上の道をたどるようなものでは、けっしてありません。成功もあれば失敗もある。勝つときもあれば負けるときもあります。そうした、さまざまな曲線を描きつつ、一歩一歩、成長の足跡を刻んでいくものであります。その過程にあって、勝って傲らず、負けてなお挫けぬ、強

願な発条として働くのが、祈りなのであります。

ゆえに、宗教的な祈りのある人ほど強いものはない。ましてわれわれの祈りは、人生への諦観を助長するような弱さの発露でもなければ、ある種の宗教的ドグマをもって独り善しとする、狂信的な祈りでもありません。外にあって人間を支配する神仏の加護を祈るのではなく、わが強盛なる祈りに込めた一念が、信力、行力となってあらわれ、それと相呼応して仏力、法力が作動するのであります。主体はあくまで人間であります。

祈りとは、ある意味で人間の心に変化をもたらすものであります。目に見えないが深いその一人の心の変化は、けっして一人にとどまるものではありません。また一つの地域の変革は、けっしてその地域のみにとどまってはいない。一波が万波をよぶように、かならず他の地域に変革の波動をおよぼしていくのであります。

そうした展転の原点となる最初の一撃は、一人の人間の心のなかにおける変革であると、私は申し上げたいのであります。

仏法は道理である、といわれることの深意もここにあるといってよいでしょう。譬えのなかの「音」「体」「すめる水」等は祈りの姿であり、「響」「影」「水にうつる月」等は、祈りの叶っていく自然な様相をあらわしていると拝することもできます。それらの譬えが自然の理法であるように、法華経の行者の祈りは、生命の世界の必然の法として、道理として、かならず叶っていくのであります。

こうした祈りは、傲慢や慢心とは、およそ縁遠いものでありましょう。端座唱題の凜然たる姿に

は、浅薄な自己の智慧、わずかな経験への執着を乗り越えて、仏の智慧によって見いだされた生命の法、自然、宇宙の根源のリズムに冥合しようとの、謙虚な姿勢が脈打っているものであります。卑屈にもならず、いっさいの活動を一念へと凝縮し、生命の充電を受けつつ、無限の飛躍を期している。それは人間生命の、もっとも健康にして充溢した姿なのであります。

ともかくも、私どもは、生活の、人生のすべての問題を御本尊に祈りきって、取り組んでいこうではありませんか。

この、すべてを祈り、かちとってきた戦いこそが、個人の人間革命をもたらし、今日の大河の日蓮正宗そして創価学会を築いてきた原動力なのであります。

ゆえに、祈ることが大事であり、そこからいっさいが出発することを忘れてはならないと申し上げたい。事のうえにおいて、祈りを失って、わが生命を回転させなければ、どのようなうまい話をし、高尚な理論を展開しても、それはすべて理であり、夢であり、幻となってしまう。信心といい、学会精神といい、すべて現実を、強く、深く祈ることから始まるといってよいのであります。

仏法の祈りは、たんに祈っていればいいというものではない。満々たる生命力をはらんだ矢が射られていくごとく、行動、実践をはらんでいるのであります。したがって、行動なき祈りは観念であり、祈りなき行動は空転なのであります。

ゆえに、偉大なる祈りは、偉大なる責任感から起こると申し上げたい。仕事に対し、生活に対し、人生に対して無責任な姿勢、どうでもいいという姿勢からは、けっして祈りは起こってきません。

自己のかかわるいっさいに責任をもち、真剣に取り組んでいる人こそ祈りをもつものであります。世の中が厳しいだけに、生活の一つひとつに強い祈りをもって取り組んでいただきたいことをかさねて申し上げ、私の講義とさせていただきます。

「御義口伝」

人間生命の諸悪に敢然と挑戦

（御書全集　七一〇ページ十八行目～七一一ページ二行目
編年体御書一五五六ページ十八行目～一五五七ページ二行目）

今日蓮等の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり

この一節から、私どもは、信心の、そして人生の根本目的である成仏をめざす究極の姿勢を知ることができます。とくに強く銘記したいことは、法戦のないところには、成仏は断じてありえないとの、日蓮大聖人の明確な御教示なのであります。

すなわち「貪愛・無明」という生命の魔性から自身の内外に競い起こるさまざまな障魔に、敢然と立ち向かい、戦いぬいてこそ「教主釈尊の如く仏身を感得」できる、成仏できる、との御本仏のおお

せを胸に刻みたいのであります。

さて、まずこの一節において、日蓮大聖人は、提婆達多を師として父の殺害、破仏法という悪逆のかぎりをつくした阿闍世王をさして「今日蓮等の類いは阿闍世王なり」とおおせられています。ここには甚深の意味があります。

歴史上の阿闍世王は、釈尊在世から滅後にかけての中インド・マカダ国の王で、のちに名医・耆婆の諫めもあって改心、仏法久住のために余生をささげたことはよく知られております。しかし、ここで展開されているところの阿闍世王とは、歴史上の一人物というより、万人に通ずる阿闍世王としての生命の活動をさしております。

阿闍世王とは梵語の音写で、未生怨と訳されております。すなわち「生まれる以前にすでに怨みをもつ」という意味ですが、この〝怨む〟という生命の一断面は、だれもがもっております。

ソクラテスの言葉に「最も深き欲望より、しばしば最も恐ろしき憎悪は起こる」とあります。

われわれの立場でこの言葉を読めば、欲望とは貪愛、無明であり、憎悪とは未生怨そのものでありましょう。この、恐ろしいまでに深く人間を蝕む生命の傾向性に、仏法哲理の光を鋭く照射し、どう克服し、人間革命し、成仏をめざすべきかを明かされたのが、この一節であります。

この上の文には「日本国の一切衆生は阿闍世王なり」（御書全集七一〇ページ）とあります。

この御文は、七百年の歳月を越えて、そのまま病める現代社会の根本原因を照らしだす明鏡とも拝することができます。殺人、暴力等の横行している現代の世相の荒廃をみるとき、人々の生命の奥に

潜む〝怨〟という魔性の根の深さを思わざるをえません。私どもも、もしこの大仏法を知らず、真実の和合僧に縁することができなかったならば、かならずやこの〝怨〟の生命に支配され、社会の揺れ動くままに、無明の淵をさまよっていたでありましょう。

私どもが日々、汗を流しつづけている折伏弘教は、この濁世の根本原因を撃ち、そこに歓喜踊躍の深い傾向性の流れをつくっていく尊い作業なのであります。ゆえに、さまざまな非難中傷の嵐が吹き荒れることは、当然の帰結なのであります。

ところで大聖人は、ここで「日蓮等の類いは阿闍世王なり」と、まったく正反対の阿闍世王を示されているのであります。これまさしく妙法によって蘇生した真実の阿闍世王なのであります。

なぜならば、そのとき南無妙法蓮華経の光明に照らしだされた未生怨の生命は、貪愛、無明を冥伏させる力となって、発揮されるからであります。すなわち、この内なる生命悪を断破する阿闍世王の生命は、不正を憎み、生存の権利を脅かすものと対決しつつ、民衆を厳護する果敢な闘志として昇華されるのであります。

「南無妙法蓮華経の剣を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感得するなり」と説かれているように、貪愛、無明という人間生命に巣くう根源悪を、南無妙法蓮華経という至高の生命をもって打ち破っていく――それこそ妙法の阿闍世王の姿勢であり、成仏への方途なのであります。

ここで、「殺す」あるいは「害する」――総じて殺害ということについて、ひとこと申し上げてお

きたい。

仏法とは、いかなる意味でも人を殺すものではなく、本源的に人を救い、生かすものであります。その点が、西洋中世に猛威をふるった〝魔女狩り〟等とは、根本的に異なるところであります。

「釈迦の以前仏教は其の罪を斬ると雖も能忍の以後経説は則ち其の施を止む」（御書全集三〇ページ）とおおせのように、とくに大乗仏教にあっては「殺す」ということは、厳しく戒められているのであります。

ではいったい、なにを殺すのか。御本尊への絶対の信という利剣をもって、わが生命に巣くう貪愛、無明の心を殺すのであります。真実の宗教は、史上、幾多繰り返された血なまぐさい宗教戦争に民衆をかりたてたりするものであってはならない。また、人々を自殺に追い込む哀音の宗教であってもならない。人々に、生きて生きて生きぬく力をわきたたせずにはおかないものであります。

大聖人の仏法は、縁するすべての人々の生命を、貪愛、無明の闇から、元初の太陽の赫々たる陽光に浴せしめるのであります。妙法が、いっさいを生かし、蘇らせていく「蘇生の義」とされるゆえんもここにあることを、知っていただきたいのであります。

さらに「教主釈尊の如く仏身を感得するなり」とは、信心に徹することによって、教主釈尊、すなわち久遠元初の自受用身即日蓮大聖人の御命を、総じては、そのままわが身に湧現できるとのおおせなのであります。「教主釈尊の如く」とは、教主釈尊のようにと、一往、拝することができます。

しかし、「如は不異に名く」（御書全集七八二ページ）との御金言にみられるように、「如く」とは「異な

らない」「等しく」と、より深く拝していくことが可能でありましょう。

じつに凡愚下賤の私どもであっても、唱題に励み、弘教に励むことによって、御本仏と等しい境界にまで達することもできうるとの、甚深の御文と拝することができるのであります。まことにまことに、もったいないかぎりであります。

金剛不壊、清浄にして無垢なる久遠名字の如来の生命が、まぎれもなく現在一瞬のわが生命に豁然と蘇ってくる——私は、感涙おさえがたしの思いを、いやまして深くするのであります。

その大哲理を奉じた私どもであります。どうか、いちだんと勇猛精進の努力を奮い起こして、日々、苦難の社会との戦いを勝ちぬいていってくださるようお願いし、講義を終わらせていただきます。

索　引

題　名	(御書のページ)	(本書のページ)	年月日	掲載紙誌・会合
「諸法実相抄」講義	(1358)	3	52.1.1～6	聖教新
「生死一大事血脈抄」講義	(1336)	93	52.4.18～30	〃
「観心本尊抄」講義	(246)	185	53. 1～2	大白蓮
「佐渡御書」講義	(956)	271	41. 4～5	高等部講
「如説修行抄」講義	(501)	333	41. 6～7	〃
「経王殿御返事」講義	(1124)	393	35. 9. 8	姫路市指導
「一生成仏抄」講義	(383)	417	36. 4.23	関西地区部長
「富木殿御返事」講義	(962)	441	37. 4. 5	埼玉地区部長
「兄弟抄」講義	(1087)	459	37. 4.12	婦人部講
「曾谷殿御返事」講義	(1055)	485	37. 8. 9	夏季講習
日々の教学				
「報恩抄」講義	(328)	515	52. 7.12	聖教新
「法門申さるべき様の事」講義	(1268)	532	52. 8. 1	〃
「撰時抄」講義	(288)	551	52. 8.13	〃
「開目抄」講義	(223)	565	52. 9. 1	〃
「日女御前御返事」講義	(1247)	573	52.10.18	〃
「種種御振舞御書」講義	(917)	577	52.10.20	〃
「祈禱抄」講義	(1347)	582	52.10.22	〃
「御義口伝」講義	(710)	588	52.10.24	〃

著者略歴

昭和3年1月2日，東京都に生まれる。
富士短期大学経済学科卒業。
現在，創価学会名誉会長。
主な著書，「人間革命」（第1巻～第10巻），「生命を語る」（第1巻～第3巻），「生活の花束」「詩集 青年の譜」「家庭革命」「婦人抄」「わたくしの随想集」「私の人生観」「若き日の読書」「創造家族」「二十一世紀への対話」上・下（共著）他。

新版 池田会長全集 10

発行日 昭和五十五年五月三日
第三刷 昭和五十六年二月十六日
著者 池田大作
発行者 松岡資
印刷所 株式会社 精興社
製本所 牧製本印刷株式会社
発行所 聖教新聞社
〒一六〇 東京都新宿区信濃町十八
電話〇三―三五三―六一一一（大代表）
振替口座 東京五―七九四〇七
*
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
Printed in Japan

©1980

定価 二,〇〇〇円